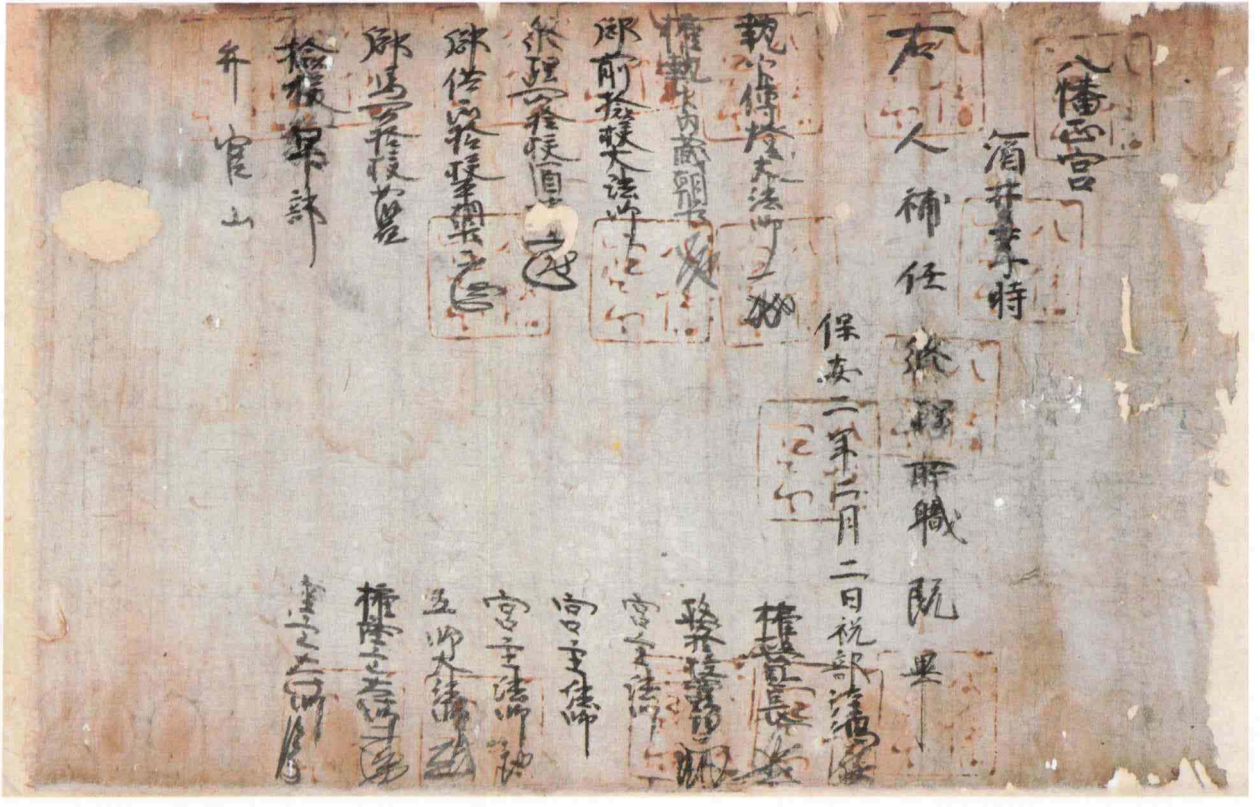
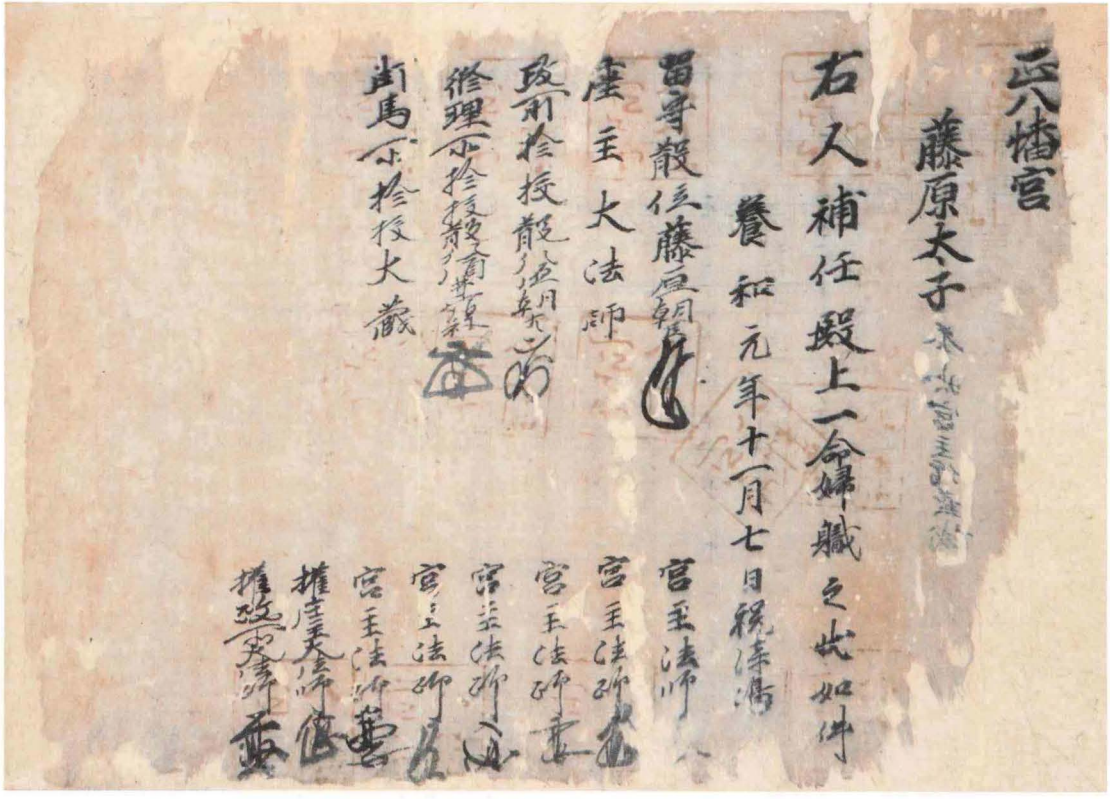
鹿児島県史料

旧記雑録拾遺

家わけ九



鹿児島神宮文書　保安二年二月二日　「正八幡宮修理所職補任状」



正八幡宮

藤原太子

右人補任殿上一命婦職之状如件

養和元年十一月七日

鹿児島神宮文書　養和元年十一月七日　「正八幡宮神官命婦職補任状」

解　題

本書は『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ九』として、『同家わけ八』に収載した「種子島家譜」巻二十七から巻七十三までの四十七冊のあとをうけて残りの分巻七十四から巻八十九までの十六冊分と、吉田町所在の「市来文書」、旧川辺町所在の「大井文書」、隼人町所在の「鹿児島神宮文書」、旧志布志町所在の「鹿屋文書」、野田町所在の「感応寺文書」、旧宮崎県高原町所在の「隈元文書」、国分市所在の「志布志野辺文書」、鹿児島県歴史資料センター黎明館寄託の「永吉島津家文書」、鹿児島県立図書館所蔵の「島津家文書（日置文書）」、尚古集成館所蔵の「日置島津家文書」、黎明館所蔵の「日置島津家文書」、鹿児島市所在の「松原神社文書」を収載する。以下その一々について説明する。

種子島家譜（継続分）

家譜成立の経過、第一次家譜―「種子島譜」、第二次家譜―「種子島正統系図」、第三次家譜―「種子島家譜」の相互関係、第三次家譜―「種子島家譜」の編集経緯、相伝事情、記述内容等の概略については、既刊の『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ四』の解題において筆者が、また『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ九』の解題において宮下満郎氏が関説しているのでそれらに譲り、本書の記載分についてのみ述べる。巻七十四は安政五年の記事・文書で以下巻八十五の明治二年の記事・文書まで、ほぼ一年毎にまとめられているが、巻八十六は明治三年から八年まで、巻八十七は明治九年から十五年まで、巻八十八は明治十六年から二十二年まで、巻八十九は明治二十三年から二十四年までの数年毎の記事・文書が収載されており、記述を欠く年もあって精細ではない。その内容の特色については、あたかも今回本書編集の実務を担当した林匡氏執筆の「種子島家譜小考㈠―

巻二十七（文化八年）以後の家譜について―」（『黎明館調査研究報告第14集』）が刊行されており、その中で「家譜巻七十四以降の編纂について」及び「家譜巻八十六以降について」の二章において詳記されているので参照されたい。たとえば安政五年、島津氏支族に準じての系図類提出のことや、幕末期の種子島記録所職員の活動ぶり、松寿院（島津斉宣女）の島内産業育成へのとりくみ、維新後の家譜編纂方針の改訂、明治十年西南戦争時の欠落状況、役所日記の残存焼失、東京修史館と磯島津家の家譜借用、明治二十三・四年の家格、華族入の請願等の諸項目について説明がある。また『黎明館調査研究報告第13号』にも同氏による「種子島家譜小考(一)」として家譜全般についての解説のあることを申しそえておこう。

市来文書

惟来姓市来氏は中世、市来院郡司職を世襲した雄族で、薩摩国一宮新田八幡宮執印職を世襲した執印氏、薩摩国国分寺留守職を世襲した国分氏も同族。吉田町本名在住の市来昭宏氏はその本流の一流で、元禄年間から享保年間に至り、藩記録奉行として活躍した市来家年（政香、源右衛門、早左衛門、虚白）の末裔に当る。同家文書については昭和四十六年、筆者が採訪調査の結果を、『鹿児島中世史研究会報29』に発表したが、その後未調査未紹介の同家収集の一族諸家系図等七三点が一括黎明館に寄託された。今回ははじめに惟宗姓市来氏系図並びに一族諸家系図を、次に書状、覚書等の順で掲載した。系図類の多くは家年の記録奉行在職時の収集書写にかかるものと思われ、中に元禄十四年の年付の記されているものもある。また一族諸家系図中、所々に「不審」、「誤ナラン」等家年の所見が記されている。当時（元禄年中）市来小四郎家が市来家の嫡家（市来久家・忠家の後）であるとの申出があり、審査が行われていたのであり、家年は自家も市来氏流であることから疑念を挿み、記録奉行伊地知重英（重張）等に意見を述べていたが、重英の退任後自身が記録奉行になるに及んで、自らその処理に

当ることになったのである。さて書状等の主たるものは前稿で紹介した寛永八年から十一年にかけての市来助左衛門家（左仲家、後藩老家）の家督相続の処理をめぐる備後守家尚（家年曽祖父、早左衛門家）の主張、すなわち後嗣の無い場合一族からたてるのが筋で、たとえ有力者であろうとも縁家からたてるのより優先すべきであるとする。その条理を認めながらも内々の儀による変更を慰撫承服させようとする家老伊勢貞昌の書状等であり、近世初期の藩主と上士間の家督相続の処理をめぐる史料として興味深い。それと前記市来氏嫡家判定に関わる家年の奉行伊地知重英宛の書状案や、当の重英よりの書状三点もある。重英は記録奉行として後世に名を残した人物である。（『鹿児島中世史研究会報43』拙稿「市来家由緒書と市来家文書・系図」参照）

大井文書

これまで川辺町神殿軸屋の大井光三氏所蔵文書として紹介されてきたが、平成十二年、光三氏の死去により三重県桑名市の令弟大井貢氏のもとに移動している。内容は暦応三年七月二十日の島津道鑑（貞久）軍勢催促状の正文一点（「旧記雑録」に収載、「正文在川辺衆大井七郎右衛門実延」とあり、近世はじめには同氏は既に川辺郷に移住していたことがわかる）の他、武蔵国荏原郡を本貫の地とする紀姓大井氏が鎌倉時代末、薩摩国祁答院に移住するに至るまでの経緯を示す案文写九点（「旧記雑録」に未収載）が主たるもので、また大井家由緒書・紀姓大井系図等も残されている。東国御家人西遷の一例を示す史料として注目されてきた。本文書の紹介としてはこれまでに筆者の『鹿児島中世史研究会報7』（昭和四十二年）、高島緑雄氏の『品川区史資料編—中世編』（昭和四十六年）、同『駿台史学六五号』（昭和六十年）所収のもの等があるが、とくに後者掲載の「補訂薩摩大井文書」が詳細である。「旧記雑録」にはじめ「写在雑書」として「沙弥御判」の文書をのせ、加えて「道鑑公御譜中」と花押入りの文書写を重複掲載しているが、これは編者伊地知季通が記録所の雑書から写しとったものに、

後年実見した「道鑑公譜」から写しとったものを増補併載したことを示しているのであろう。

鹿児島神宮文書

中世、正八幡宮とよばれた大隅国一宮鹿児島神宮の歴史は古い。同社には桑幡・沢・留守・最勝寺の四社家をはじめ多数の神職家があって神事や社務、社領の経営に当っていた。しかし数次にわたる罹災等によって写本以外古文書の原本を伝える社家はほとんどなく、鹿児島神宮文書として知られるものとしては社家瀬戸口氏寄進の養和元年の命婦職補任状と建治三年の執印下文の二点のみであった。ところが昭和四十七年、野口逸三郎氏によって宮崎県高原町の隈元栄氏所蔵文書が採訪され、保安二年の正八幡宮修理所職補任状他の関係文書の存在が明らかになった。そして昭和五十三年、同氏の芳志により、また三ッ石友三郎氏らの尽力により、社家隈元氏相伝文書は鹿児島神宮に永久寄託、移管されることになった。以後三ッ石氏らの手により、上記瀬戸口氏旧蔵文書と併せ整理成巻されたものが平成五年に至り鹿児島県重要文化財に指定されたわけである。本書には成巻順にしたがい全二二点を収載するが、二・一二号の他はすべて隈元氏旧蔵文書である。また「旧記雑録」未収録文書は二二点中二〇点に上る。隈元氏は酒井姓、平安時代後期以降正八幡宮修理職を世襲した有力社家で、『史籍集覧』に載録された建久図田帳も社家隈元本（現存せず）によったとされている。本文書については『鹿児島県文化財調査報告書三十九集』（平成五年）に筆者の紹介があり、関連論文として同「大隅国御家人酒井氏について」（吉川弘文館『御家人制の研究』所収、昭和五十六年）等がある。また平成九年二月には『鹿児島神宮文化財調査報告書』が同宮から刊行されており、第二章鹿児島神宮（大隅正八幡宮）の歴史、第五節で「鹿児島神宮・旧社家所蔵文書について」（日隈正守氏執筆）の記述がある。

鹿屋文書

志布志町鹿屋兼伸氏旧蔵文書は現在国立歴史民俗博物館の購入所蔵となっている寛元二年八月二日の島津庄預所下文以下、建長四年七月日、弘長元年七月日、同二年八月日、文永七年八月日、永仁六年五月三日、永仁七年二月一日の各島津庄預所下文と正安元年九月二十日の吉国奉書の八点以外はその消息が明らかでない。そこで本書では筆者が昭和三十八年採訪調査の際、撮影した写真をもとに前出八点以外の分も追補採録掲載することとした。当時同家には中世文書は寛元二年より慶長四年まで一三点の原本又は古写と嘉慶二年より元和六年に至る一六点の文書写及び目録を収録する伴姓鹿屋氏系譜一冊と文明十七年の幕の打方等に関する口伝書一点、他に鹿屋氏系図一巻、肝付氏系図古写一点等が残されていた。本書ではじめに原文書を、次に系譜収載文書を、終りに口伝書並びに系図類を編年順に掲げることにした。鹿屋氏は伴姓肝付氏一族で、中世島津庄寄郡鹿屋院弁済使職を世襲、以後も鹿屋院領主、島津家々臣団の一員として活躍、その証拠となる文書も相伝したが、近世に入り、藩記録所の史料調査では志布志士鹿屋権左衛門家文書は御用の物として注目され、召し上げられたものもあったと思われる。「旧記雑録」に原本志布志士鹿屋権兵衛兼治蔵書とあり、島津庄開創事情とその後の発展の経過を知る上で貴重な史料として知られている正応四（元）年かとある長文の島津庄官等申状なども或は同家から藩記録所に提出、留め置かれたのではあるまいか。同文書は伊地知季安・季通編纂の「諸家系図文書」中、巻三と巻六にそれぞれ「鹿屋氏文書系図」、「鹿屋氏系図文書」が収録されているが、そのうち巻六の方に掲載されており、伊地知季安も著述「管窺愚考」の中で重要史料としてとりあげているが、鹿屋家には伝存しなかったのである。しかしこれと並んで元徳二年八月の鹿屋院雑掌兼信申状と付属の鹿屋院惣地頭代押領田在家山野注文は当時の所領支配の実態を具体的に究明する手懸かりを与えてくれる史料として注目されよう。『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　伊地知季安著作史料集三』解題参照。参考論文として筆者の「島津庄大隅方鹿屋院小考」（昭和四十年鹿

児島大学法文学部紀要『文学科論集』一号所収）がある。

感応寺文書

出水郡野田町所在の鎮国山感応寺は中世、諸山に列した由緒ある古刹で、はじめ臨済宗東福寺聖一派に属したが、明治初年廃仏毀釈後の復興に際して相国寺派に属し現在に至っている。中世この地は島津庄寄郡山門院の中で、守護兼総地頭島津忠久が最初に入部し拠地としたといわれる木牟礼城は程近いところにあり、島津家初代より五代迄の墓所といわれる五廟社も境内に祀られている。廃仏毀釈の際も住職等の尽力によって室町期の仏像・頂相（県指定文化財）と共に同寺の由来、歴世住持名文書目録、文書写等を載録した「感応寺由来」一冊や古文書写数十点も伝存している。現在東京大学史料編纂所蔵の旧島津家臨時編輯所蔵本中に大正十一年感応寺所蔵本の書写本「感応寺書類」全一冊があり、「感応寺古文書集」と「感応禅寺開基之由来」写から成っている。後者が「感応寺由来」の写であろう。本書では平成十二年度の再調査に基づき現存するものと右写本とを対照しつつ近世の分まで主なものを掲載した。はじめに「古文書集」該当のものを掲げ、次に「由来」を、終りに以上と重複しない現存文書を掲げている。（『鹿大史学』二八、拙稿「野田感応寺の史料について」昭和五十五年参照）また上田純一氏「中世地方禅院の発展に関する一考察―薩摩野田感応寺の場合―」（『史淵』百二十三輯）は本文書のもつ歴史的意義について克明に関説している。

隈元文書

先述の如く鹿児島神宮社家隈元氏相伝の文書は鹿児島神宮に永久寄託され、鹿児島神宮文書と呼称されることになったが、成巻されて鹿児島県文化財に指定されたものの他になお「斎院史官掟一巻」をはじめ数点の文書が昭和五十三年の筆者も参加した県史料編纂所の鹿児島神宮及び宮崎県高原町隈元栄氏宅での調査の際存在してい

たのを確認しているので、それらを撮影した写真によって限元文書としてここに一括掲載することにした。なお限元氏相伝系図（酒井氏并修理所職系図）は現在熊本県菊陽町の限元栄一氏が受けつぎ所蔵されており、同系図は大隅国一宮正八幡宮の歴史の研究にかかせない重要史料であるといってよいであろう。

志布志野辺文書

中世櫛間院領主野辺氏の系譜文書は中世末、野辺盛仁の代以降、盛仁の櫛間退去以前に鹿児島に出府、本宗島津家に仕えた盛仁の子盛篤の統と、退去後、島津氏支族北郷氏領庄内（都城）に移り、その後都城島津家々臣になった統に分かれたことにより両統に分有相伝された経緯がある。前者が本書掲載の志布志町野遣盛博氏所蔵文書であり、後者が既に『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ七』で載録済の宮崎県都城市本村寅雄氏所蔵文書である。今回所蔵者故盛博氏の子息野遣盛雅氏の芳意により黎明館に一括寄託されることになったため、新に数点の近世史料を追補採録することを得た。志布志野辺家は盛仁の没落後、盛篤は文明十五年、鹿児島・谷山に給地を与えられ、家督継承者を以て任じていたが、その子孫盛武は肝付氏に備えるため天正五年、救仁郷蓬原に移住を命じられ、さらにその子盛清代には串良より志布志に移住するに至った。したがって原文書は文明十五年の坪付が初見でそれ以前のものは写であるが、後年実現はみなかったものの都城野辺家の文書の入手をはかったことも史料の上からうかがえる。「旧記雑録」との関係でいえば三九点中、未収録文書は三三点を数える。採録文書は都城野辺家文書と重複するもの五点、及び永享十年「福昌寺仏殿造営奉加帳」以外はすべて未収である。上記文書は年次比定等に問題はあるが、野辺盛在はじめ野辺氏一族の氏名が多く記載されており興味深い。元禄年間には藩記録所にあったことがわかっており、或は後に野辺氏の方で縁故の文書として写しとったものとも思われるが明らかでない。なお『日向古文書集成』によれば第三類に野辺文書として都城野辺家文書から五点、志布

志野辺家文書から六点を採録している。また「旧記雑録」に「豊州家豊後守忠朝譜中」「案文在都城衆野辺惣右衛門」として収録されている五〇余点の文書の現在の所在、前出文書との関係等についてはなお明らかでない。（『鹿児島県史料拾遺Ⅵ』、拙稿「志布志・都城野辺文書」昭和四十一年、『都城文化財調査報告書』三十集、重永卓爾氏「野邊・東條家古文書」平成六年、『宮崎県史史料編　中世2』同年、『宮崎県史　通史編中世』平成十年等参照）

永吉島津家文書

近世永吉（吹上町永吉）領主であった島津氏支族相伝文書。久しく尚古集成館に保管展示されていたため「尚古集成館文書」として知られていたが、鹿児島県歴史資料センター黎明館の開設に当り、所蔵者の芳志により同館に一括寄託された。永吉島津家の祖は島津貴久の四男家久であり、藩主となった二男義弘の子家久と同名であるため、区別して官名中務の唐名をとって中書家久とよばれている。中書家久は天正七年、島津氏が伊東氏を追って日向を勢力下におさめるや、同国の鎮将として伊東氏の拠点であった佐土原の領主となり、天正十五年、豊臣秀吉の九州攻めに抗戦したが、同年五月、野尻で秀吉の弟秀長に降り、佐土原に帰還後急死した（毒殺説、粛清説等あり）。秀吉はその遺跡の領有を認め、家久の子忠豊（豊久）が佐土原二代目の城主となった。しかし豊久は叔父義弘と共に慶長五年の関ヶ原の戦に従軍戦死した。このため佐土原は一時徳川氏の直轄下におかれたが、慶長八年には垂水島津家の以久の領有が認められ、佐土原藩主として忠興・久雄と継承する。豊久の跡は弟本城源七郎忠直が継承することになっていたが、病を理由にこれを辞し、その女婿に当る喜入忠続の長子忠栄が継承、永吉邑主となった。しかし同人は寛永元年二十八才で死去、寛永十一年に至って藩主家久の九男安芸守久雄（当時十三歳）がその跡を相続したのである。永吉島津家文書の特色として、本来相伝すべき佐土原時代の中書家久・

豊久関係文書の他に、本宗島津家の義久・義弘・家久関係の文書・歌懐紙等が相当数伝存しているのはそのためであろう。

同家文書の構成は、以前は巻装の物と一紙物と冊子類とに分れていて、巻物は「尚古集成館文書目録」等によれば五巻からなっていた如くである。今その順にしたがって掲載すると、巻一（一―四〇）にははじめに「延宝二年甲寅正月廿五日写之」の註記のある元暦二年の源頼朝下文写四通をはじめとする十余点の文書が収録されており、以下近衛龍山（前久）や照高院如雪（道澄）等の家久宛書状がまとまって収録されている。それらは「島津氏世録正統系図」（家久譜）や「旧記雑録」には「正文在島津安芸守久雄」と註記されていて、このことからもそのような文書移動の経緯をうかがうこともできよう。前者の中、源頼朝下文写等は本来奥州家島津氏が相伝していたもので、これらを天正六年島津義久らが日向に攻め入り伊東氏の庇護下にあった奥州家島津氏の遺孫の手元から入手したもので、その際日向に入った中書家久が別途入手していたとも考えられ、佐土原伝来の文書がその重要性に鑑み、本宗家に召し上げられ、その写が本宗家よりの付与文書と共に永吉島津家にあらためて与えられたものとも考えられるのである。（平成十二年黎明館企画特別展図録『奇跡の至宝島津家文書』所収、拙稿「島津家文書伝存の経緯」参照）巻二（四一―五六）は天正十六年より文禄三年の豊久宛の豊臣秀吉・秀次の朱印状等で、成巻者の推定の年代順に配列されており、巻三（五七―五九）は秀吉の豊久宛天正十六年の知行方目録、慶長二年の高麗再出勢の際の法度、同陣立書からなる。巻四（六二―六七）は秀吉より豊久宛の朱印状で、この一群の文書は「豊久譜」に「正文在伊作樺山蔵人入道」等の如く「正文在久雄」ではない他家（伊作衆）より入手したものを集めているものと思われる。巻五（六八―八五）は文禄二年より慶長四年までの秀吉・秀次の朱印状と慶長四年の徳川家康書状、寺沢正成書状等で、やはり成巻者推定の年代順に配列されているものの如く

である。次に続くものとして巻物ではないが、天正十二年の真木島昭光・一色昭秀連署書状と天正十四年の足利義昭御内書があり、また豊臣秀吉朱印状二通入として封紙におさめられている折紙の豊久宛文書二通は四ノ一、四ノ二の貼札があり、本来成巻文書四に加えられるべきものではなかったかと考えられる。その点を考慮して今回は巻四文書の冒頭に配列した（六〇・六一）。この二点は「旧記雑録」に収録されておらず、当然「譜」（島津氏世録正統系図」及び「新編島津氏世録支流系図」）にもまた採録されていない。今後検討すべき文書といえよう。他に未成巻の文書として拾番と整理番号の付されている（天正十五年）五月二十七日の豊臣秀長書状（一三八）、入田氏より入手したと思われる天正十三・四年の中書家久より入田宗和宛の書状二通（九〇・九一）等がある。さらに家久が参加した際の八条宮邸での会席図等珍しい文書（一三六・一三七）も永吉島津家に伝存している。掲載しなかったが古今和歌集や新納忠元筆の和歌大概・島津光久筆画帳等も伝えられている。島津豊久墓所造立関係の冊子（一四五）もその由緒を詳記してあり興味深い。（昭和四十一年『鹿児島県史料拾遺Ⅲ・Ⅷ』拙稿「磯尚古集成館文書㈠・㈡」、昭和四十六年『鹿児島中世史研究会報30』同「磯尚古集成館文書㈢」参照）

日置島津家文書

日置島津家は島津貴久の三男歳久を初祖とする島津氏一族で、のち薩摩国日置郷を領有したことから日置島津家とよばれる。歳久は文禄元年、豊臣秀吉の厳命により自裁、それより前天正十五年婿養子忠隣は日向根白坂で戦死、その子常久は藩主家久の信任を得て鹿児島城居館上の山城に居を構えたが慶長十九年早世、その子久慶も家久の女婿として信任篤く、寛永十一年には喜入忠続の後をついで家老となり、幕府の「寛永諸家系図伝」作成にともなう藩史料の収集整理、系図作成事業の責任者となった。これが同家に近世初期の藩政の重要史料が多く伝来している原因の一つになっていると考えられる。寛永十八年家老引退後も異国方、宗門方の要職についてい

たが、家久の死後新藩主光久とはとかく折合わぬこともあり、慶安四年のその歿後、養子久豫（久憲、喜入忠高の子）の告発もあって共々除籍され、『本藩人物誌』の悪人伝に登載される憂き目にあっている。その後は家久の十二男忠朝が入り、日置島津家の後をついでいる。同家文書の多くは近代に至って次第に散逸し、現在各所に散在しているが、そのうち所在の判明している主要文書を以下所在別に掲示する。

島津家文書（日置文書）

鹿児島県立図書館所蔵の「島津家文書」は昭和二十七年旧蔵者志布志町山下政一氏より入手したもので、内容はすべて日置島津家の歴代当主常久・久慶・忠朝等の関係文書で早く散逸した同家文書の一部であることは間違いない。「島津家古文書」と記された文箱に納められている古文書はすべて巻装で十八巻、それぞれの包布に番号と文書の書出しの一句を記した仮題が付されている。本書では巻毎掲載順に採録した。その大部分についてはかつて筆者が鹿児島大学法文学部紀要『文学科論集』十・十一号、『人文学科論集』二五号において「日置島津家文書と島津久慶」一・二・三として分載紹介したことがある。一・九巻は「島津久慶自記」（東大史料編纂所蔵）にも収録されているが、その原本と思われ、四・五巻は久慶の家老又は宗門方・異国方としての職務に関するもので、切支丹取締りや、異国船対策、それに藩主光久と垂水島津家の微妙な対立関係、家老重役相互の見解の相違等、寛永末年前後の藩政の課題の複雑さをうかがわせるにたる史料として注目される。一六・一八巻は久慶の文才、多才ぶりを示す文書で、その才能・人柄をしめす史料として重要である。同文書の奥書に享保二十年、島津彦太夫久富とあるのは、系図に日置家六代久竹の甥に当る人物（旧稿訂正）で、このころに上記文書の整理、補修が行われたことを示している。

県立図書館本日置島津家文書中、「旧記雑録」に採録されているのは三点で、一は巻八の文禄二年の島津歳久

夫人申状案で、「正文ハ島津左衛門久通ニアリ」とあり、二・三は巻一七の寛永十四年、久慶宛の相良頼寛書状、同十三年、相良長毎書状であるが、二通共「家久譜中」「正文在島津左衛門久道」とあり、「旧記雑録」の編者伊地知季通は恐らく直接日置島津家文書からではなく、記録所の史料や「家久譜」中からこれらの文書を採録したのであろう。

日置島津家文書（尚古集成館）

尚古集成館所蔵日置島津家文書は先年鹿児島市在住の旧蔵者から入手したもので、文箱に納められた巻物は成巻時以来のものと思われ、保存状態もよく同家文書中特に重んじられたものと推測される。何れも常久関係の文書で、二七点すべて旧記雑録（後編に一二点、附録に一五点）に採録されているが、「新編島津氏世録支流系図」（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　諸氏系譜三』）の「歳久系図」二の「常久譜」中にも同様に編年順に全点採録されている。恐らく伊地知季通は原本ではなく「譜」によって「旧記雑録」中にとりこんだものと推測される。「譜」の成立は正徳年間ごろと思われるから（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　諸氏系譜一』拙稿解題参照）、原本の成巻もそれより少し前のことということになろう。同文書については『尚古集成館紀要第四号』で堂満幸子氏が「尚古集成館所蔵の日置島津家文書について」と題して詳細に説明している。なお「常久譜」収載の文書は三五点あるが尚古集成館文書以外の八点のうち一点は熊本県の徳本氏所蔵文書（『熊本県史料　中世編三』に旧日置島津家文書、一軸七点とあり）で他は本宗島津家文書等であろう。（「旧記雑録」には全点収録）

日置島津家文書（黎明館蔵）

かつて日置島津家文書は質量ともに豊富な古文書群として日置島津家の所蔵するところであった。その散逸時期については今のところ明確にしがたいが昭和年代、戦前、戦後を通じて逐次巷間に売却分散していったものと

思われ、黎明館等が収集に当った際も一巻又は数巻宛個人（三名）或は古書肆（二店）より入手している。何れも成巻文書であり、早く日置島津家において分類整理装巻されていたものと思われる。さて同家の文書は藩記録所で編纂に当った「島津氏世録正統系図」と並んで「新編島津氏世録支流系図」の「歳久系図」・「常久譜」にも多く載録されている。そして「旧記雑録」はそれらからとりこんでいったことが推定されるのである。まず一は『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録（Ⅱ）文書』（昭和六十年）に「近世二一二番―二三八番」として登録されている日置島津家文書としては一番早く収集した文書で、大体寛永八年から同十二年頃迄の家久から久慶夫人となった息女宛の仮名文書で二八点中二点を除き「旧記雑録」に採録されている。大部分「家久譜中」「正文在島津左衛門久道」とある。二は寛永十八年十月の御厚恩記草案で前出県立図書館本巻九の素案かと思われる。（鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』三一号、拙稿「御厚恩記をめぐって」参照）三は寛永二十一年の久慶書状案、同二十年の同人の義弘追悼和歌等で六点すべて「旧記雑録」不載のもの。これらについては平成二年、『鹿児島中世史研究会報46』に「日置島津家文書と島津久慶（補遺）」として紹介したことがある。四以下一一迄の八巻は高木吉昭氏旧蔵文書であり、昭和六十三年、平成元年の二回にわたり筆者は鹿児島大学法文学部紀要『人文学科論集』二八・二九号に「日置島津家文書と島津久慶㈣・㈤―新知見文書の紹介を中心に、その一・二―」として発表したことがある。四は常久書状、覚書等であるが一九点すべて「譜」・「旧記雑録」とも未採録の文書である。五は歳久宛の天正初年代の飛鳥井雅継、進藤長治、伊勢貞知等の書状であるが一五点これまたすべて「譜」・「旧記雑録」とも未採録となっている。六についても久慶宛の家司進藤氏他近衛家関係者からの書状と琉球王子からの書状等で一〇点すべて未採録である。七は寛永十年代の久慶宛の佐土原島津家二代忠興・三代久雄の書状二〇点で、うち二点が「家久譜」、「旧記雑録」に採録されている。八は光久家督継承の際の幕府

老中らよりの書状、家久病気見舞等に関する細川忠興らの書状、姻戚松平定行、定綱らよりの書状等二〇点で、このうち八点が「家久譜」・「光久譜」・「旧記雑録」に採録されている。九は久慶と秋月・有馬・伊東等九州諸大名との交誼を物語る書状で七点中四点が「家久譜」・『鹿児島県史料　旧記雑録後編五』に採録されている。一〇は有馬直純・康純より久慶宛の書状九点の他、秋月・伊東氏よりの書状も各一点、うち有馬直純書状五点は「家久譜」・『鹿児島県史料　旧記雑録後編五』に採録されている。一一は久慶自筆の草案でその内容は何れも家久歿後の光久の施政に対する献言、忠言であろう。次の一二・一三は古書肆よりの購入文書で、前者は寛永四年の久慶申状案の他に慶安三年代の久慶側近らの覚書等であり、後者は寛永十五年春までの島津家久書状、以後寛永十六年から正保四年に至る間の島津光久書状他二七点である。このうち大部分のものが「譜」・「旧記雑録」に重複の文書である。但し文書の流れは原文書→譜→旧記雑録であり、各文書毎の文末の注記に慣習的、便宜上付した「旧記雑録何々ト同一文書ナルベシ」とあるのは、厳密にいえば順序が逆で「旧記雑録何々ノ原文書ナルベシ」とした方が正確な表現法であろう。「譜」では「歳久系図」・「常久譜」に続く「久慶譜」を欠くのであるが、久慶と家久の親密さを物語るように久慶関係文書は「家久譜」に多く収録されているようである。一々点検はしていないが、「家久譜（年代未詳部）」に配列されている文書中、「正文在島津左衛門久道」とあるものの数は少なくない。このことは近世初期日置島津家の占める役割の大きさを示すものといってよいであろう。もちろんそれらは「旧記雑録」の後編、附録にも採録されているのであるが、それは繰り返し述べているように「旧記雑録」の編者伊地知季通が「家久譜」からとりこんだものと考えて誤りないであろう。一例を『鹿児島県史料　旧記雑録後編五』（寛永三年～十五年）でみれば約一一〇〇点の収載文書中、「正文在島津左衛門久道」等とある日置島津家文書の点数は約一〇〇点で、そのうち六割の文書は現在黎明館所蔵文書であり、残り四割が他家所蔵乃至は

所在不明文書になっているといってよい。ところが『鹿児島県史料　旧記雑録附録二』巻二十一、家久年間未詳の巻に「正文在島津左衛門久道」等として収載されている日置島津家文書は二九点に上るが、そのうち黎明館所蔵文書中にあるのは三点、個人所蔵文書と判明しているのが三点で、他は所在不明のものである。同じく巻二十二の巻では同二四点のうち黎明館所蔵文書が一点、尚古集成館所蔵文書が一八点、個人所蔵文書と判明しているのが一点で他の四点が所在不明となっている。これらを以て全体を推測するのはやや冒険かもしれないが、大むね「譜」から「旧記雑録」に採録された同家文書の六割以上は現在所在が明らかになっており、逆に日置島津家文書全体の約半数は「譜」や「旧記雑録」に未載録であるといえよう。

久慶に対する家久の信任の篤さは寛永五年、二十歳の時、女菊寿を配し、翌六年弾正少弼に任じ、同年末には三ヶ条の誓紙を与えたことによっても推測されるが、その問題の起請文だけが「譜」にも「旧記雑録」にも収録されず存在していることに史実の重みをおぼえるので個人所蔵文書（現在所在未確認）で番外ながらあえて掲載しておこう。

起請文

一今度誓紙之趣条々令満足訖、弥対当家無別心可被抽忠勤事、

一息女其方江進置候上者、貴所事直子同前ニ相存候之事、

一向後不依何篇、於貴所身上不審之様子承付儀於在之者細々可逐糺明事、

右条々於偽者、

日本国中大小神祇、殊者当国鎮守新田八幡大菩薩各可有照覧者也、仍如件、

寛永六年十二月廿八日　　家久（花押）

弾正少弼殿

久慶は表向き系図から削除されたが、日置島津家を継承した忠朝の子孫も久慶の関係した夥しい文書を整理して後世に伝えたわけである。もって近世初期の藩政に久慶の果たした役割の大きさをうかがうことができよう。しかし日置島津家にとってもっとも重要な家久の起請文が「家久譜」に登載されなかった（当然「旧記雑録」にも不載録）意味もまた重くうけとめるべきであろう。（昭和六十一年『鹿児島県中世史研究会報44』、拙稿「島津久慶宛島津家久文書二点について」参照）

松原神社文書

松原神社は島津貴久を祭神とする。廃仏毀釈以前は松原山南林寺があった。昭和五年十一月、島津繁麿氏（日置島津家）奉納文書。島津貴久発給書状八点、義久発給書状一四点、義弘発給書状一点の計二三点で宛名は又六郎・左衛門太夫・左衛門督とあり、何れも島津歳久となっている。ほぼ初祖歳久関係文書を編年順に成巻したものをその父貴久を祀る神社に神宝とすべく献上したのであろう。文書は「歳久系図」（『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　諸氏系譜三』）に順番通りに採録されており、当然「旧記雑録」にも全点、そこから採録したと思われるものが収録されている。なお同文書は昭和四十六年刊行の『鹿児島市史巻三』第六部「鹿児島の古文書」のうちに載録されている。

以上「日置島津家文書」の中、原本の所在が明らかで今回調査を済ませたものについて一括掲載した次第である。終りに参考資料として本書掲載分の史料点数と、文書について「旧記雑録」に収録済のもの、未収録のものの点数をしめしておこう。（表参照）

（五味　克夫）

『家わけ九』掲載文書内、文書・記録・記事等点数

文　書　名	文　書　数 （収載）＜未収＞	系図・記録・記事等 （収載）＜未収＞	目録上史料総　数	掲載史料数
種子島家譜 七十四～八十九巻	177 （7）＜170＞	4 （0）＜4＞	166	166
市来文書	35 （2）＜33＞	43 （0）＜43＞	36	35
大井文書	14 （1）＜13＞	4 （0）＜4＞	18	16
鹿児島神宮文書	22 （2）＜20＞	0 （0）＜0＞	22	19
鹿屋文書	28 （23）＜5＞	6 （1）＜5＞	30	30
感応寺文書	63 （38）＜25＞	9 （0）＜9＞	72	59
限元文書	6 （0）＜6＞	1 （0）＜1＞	7	7
志布志野辺文書	39 （6）＜33＞	3 （0）＜3＞	38	37
永吉島津家文書	110 （83）＜27＞	35 （2）＜33＞	145	145
島津家文書 （日置文書）	43 （3）＜40＞	4 （0）＜4＞	42	42
日置島津家文書 （尚古集成館）	27 （27）＜0＞	0 （0）＜0＞	27	27
日置島津家文書 （黎明館）	174 （71）＜103＞	0 （0）＜0＞	13	13
松原神社文書	23 （21）＜2＞	0 （0）＜0＞	23	23

注　1　収載とは、「旧記雑録」収載文書を示し、未収とは、「同」未収載文書を示す。
　　2　掲載史料数とは、『家わけ九』内で掲載した重複分を除く史料数を示す。

例　言

一　本書は、「種子島家譜」以下十三家の中世から近世（一部近代まで）文書を収め、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ九』として刊行するものである。本書の底本とした史料名と所蔵を掲載順に示すと次のとおりである。

史料名	所蔵別
種子島家譜	種子島時邦氏（鹿児島市）
市来文書	市来昭宏氏（鹿児島郡吉田町）
大井文書	大井貢氏（三重県桑名市）
鹿児島神宮文書	鹿児島神宮（姶良郡隼人町）
鹿屋文書	国立歴史民俗博物館（千葉県佐倉市）
感応寺文書	感応寺（出水郡野田町）
限元文書	限元栄一氏（熊本県菊池郡菊陽町）

史料名	所蔵別
志布志野辺文書	野邉盛雅氏（国分市）
永吉島津家文書	島津基之氏（埼玉県春日部市）
島津家文書（日置文書）	鹿児島県立図書館
日置島津家文書	尚古集成館（鹿児島市）
日置島津家文書	鹿児島県歴史資料センター黎明館
松原神社文書	松原神社（鹿児島市）

一　総括的な文書名の表記は、原則として本来の氏姓に従って「〇〇文書」とした。文書の配列については、『鹿児島県史料　旧記雑録拾遺　家わけ八』に引き続いて収載される「種子島家譜」（七十四巻～八十九巻分）を最初に収め、以下五十音順とした。

一　個々の文書や記録などの掲載にあたっては、成巻されたものや編さん物については原則として底本の収載順に収め、それ以外は編年順に掲載した。「永吉島津家文書」については、かつて成巻されていた文書に原則とし

て旧成巻順に従い掲載し注を付した。また、「日置島津家文書」（黎明館所蔵）については、『鹿児島県歴史資料センター黎明館所蔵品目録　文書(2)(3)(4)』の目録順に収載した。

一　文書は、原則として底本に従って掲載し、通し番号と文書題を文首に付した。重出文書等は文書名のみを示し、本文は省略した。なお、添書等のあるものは、枝番を付して分けて収めた。

一　収載した文書の欠失箇所をほかの文書や写本等によって補充または校訂する場合は、次のようにした。

ア　補充箇所は▽△で示した。

イ　補充や校訂に使用した典拠史料は、次の略号で示した。

旧記雑録　㊧

続編島津氏世録正統系図（東京大学史料編纂所所蔵）　㊨

川辺山田古雑記（「川辺郡地誌備考」東京大学史料編纂所所蔵）　㊫

留守文書（留守景彦氏所蔵）　㊥

御厚恩記（鹿児島大学附属図書館所蔵玉里文庫）　㊩

野辺文書（本村寅雄氏所蔵）　㊯

新編島津氏世録支流系図　歳久譜（東京大学史料編纂所所蔵）　㊲

ウ　「市来文書」中、惟宗姓市来氏系図写による補充箇所は▽㊥△で示した。

エ　「鹿屋文書」中、国立歴史民俗博物館所蔵文書八点以外の所在未確認分については「鹿屋兼伸氏旧蔵文書」として掲載し、注記した。

オ　「感応寺文書」中、現存しない文書一点については「感応寺書類　全」（東京大学史料編纂所所蔵、謄写本）

で補い、注記した。

カ　「隈元文書」中、所在未確認分については「隈元氏旧蔵文書」として掲載し、注記した。

一　刊行にあたって、文書の体裁をおおよそ次のように統一した。

ア　原注や文書中の異筆・補筆は、原則として「　」（墨書）、『　』（朱書）で囲んだ。

イ　文書の年月日・差出所・宛所の位置などは、原則として底本の体裁に従った。

ウ　文書・記録・記事には、適宜読点「、」および並列点「・」を付した。

エ　文書・記事の冒頭部にある「○」印・「●」印は、底本の体裁に従った。

一　原文の磨滅虫損は、字数を推して□または▭を以て示し、判読不能な文字については■で示した。

一　見せ消は、その文字の左側に「〻」を付した。

一　合点は右肩に┐（墨書）┐……（朱書）で示した。

一　頭注や行間の書き込みは、原則として底本の体裁に合わせた。

一　編者の付した注は、原注と区別するために（　）で囲んだ。

一　本文中に、後から記入する目的や虫損等の理由で空けられたと考えられる箇所や、―があるものについては、原則として底本の体裁に従った。

一　欠字・平出・台頭などは、原則として底本の体裁に従った。

一　原文中の送り仮名は、一部を除き省略した。

一　原文中の返り点については、「種子島家譜」を除いて原則として省略した。「種子島家譜」の返り点は、原則として底本に従った。

一　系図中の野線等については、一部朱線について注記した。

一　原文中の地名・人名・官名・年号などに施されている朱引は、全て省略した。

一　変体仮名は現行の平仮名に改めたが、江、而、茂、者、与など一部はそのまま用いた。

一　漢字は一部の異・略・俗字を除き、原則として底本の用字に従った。

一　当時一般に使用された文字のうち、次のようなものはそのまま用いた。

吴（異）旱（畢）叀（事）躰（体）陳（陣）刁（寅）帋（紙）孖（州）仌（氷）埜（野）麑（鹿児）

見廻（見舞）祝義（祝儀）留主（留守）諏方（諏訪）咲止（笑止）仝（同）迁（遷）逃（逃）

旧記雑録拾遺家わけ九　目次

解題……1
例言……19
目次……23

種子島家譜

巻七四　二十五代久尚〔安政五年〕……一
巻七五　二十五代久尚〔安政六年〕……一四
巻七六　二十五代久尚〔萬延元年〕……三四
巻七七　二十五代久尚〔文久元年〕……五六
巻七八　二十五代久尚〔文久二年〕……七二
巻七九　二十五代久尚〔文久三年〕……九一
巻八〇　二十五代久尚〔元治元年〕……一〇八
巻八一　二十五代久尚〔慶應元年〕……一二六
巻八二　二十五代久尚〔慶應二年〕……一四四
巻八三　二十五代久尚〔慶應三年〕……一五一
巻八四　二十五代久尚〔明治元年〕……一六〇

巻八五　二十五代久尚〔明治二年〕……一七五
巻八六　二十五代久尚〔明治三年―明治八年〕……一九九
巻八七　二十五代久尚〔明治九年―明治十五年〕……二一七
二十六代時丸
巻八八　二十六代時丸〔明治十六年―明治二十二年〕……二三一
二十七代守時
巻八九　二十六代時丸〔明治二十三年―明治二十四年〕……二五〇
二十七代守時
市来文書……二六七
大井文書……三五七
鹿児島神宮文書……三七三
鹿屋文書……三八五
感応寺文書……四〇三
隈元文書……四五三
志布志野辺文書……四七一
永吉島津家文書……五〇三
島津家文書（日置文書）……五七一
日置島津家文書（尚古集成館）……六二五

日置島津家文書（黎明館）……六三九
松原神社文書……七二七
文書目録……七三七

種子島家譜

（表紙）

安政五年

種子島家譜 廿五代 久尚

七十四

○安政五年戊午正月元日、國上村獻二野老一、
○二日、國上村獻二介族一、現和村庄司浦獻レ鰒、
○同日、覽レ馬、名代家老美坐十郎右衞門時敏、馬役上妻雲角、
○同日、八寺獻上、如レ例、
○三日、國老某告曰、　宰相公任二從三位一、
○四日、上之郡庄官・小觸進上、如レ例、
○六日、初狩、組頭渡邊早右衞門兼重・日高源右衞門為德・種子島鉄五郎時加、山奉行前田平八・東嘉助・遠藤才助・美坐織太郎・羽生彦八郎・河内六助・河内覺右衞門、夕狩場、名代家老知覽才兵衞行修、物奉行西村九郎時起、用人平山佐次右衞門友直、西之表庄官獻上如レ例、有馬新次獲レ猪、
○七日、中之郡・下之郡庄官進上、如レ例、
○八日、中西之表宮原之早太妻發レ狂、溺二死于花里濱海中一、搜二其骸一不レ獲、平山佐次右衞門友直・羽生仙蔵能通聞二狀于　官一、
○十一日、甲冑之賀、如例、
○同日、本源寺軍陣・温坐祈念、如レ例、
○同日、蓮勝寺進上、如レ例、
○同日、在郷諸寺進上、如レ例、
○同日、的始、名代家老前田新兵衞宗誠・用人種子島平蔵時宜・射手一番（大牟禮良太郎 河内市兵衞）・二番（上妻惣之丞 下村三左衞門）・三番（羽生惣太郎 八板多平太）、
○十四日、與二俸田一石所于井元新蔵一、賞下學二製弓於本府一善上之也、

○同日、與二俸田二石于宇多津覺右衛門一、賞下其學レ製衛及鎧一而善上レ之也、

○二十一日、與二金子千疋于船匠輩一、賞三向造二厨船日典丸一也、

○點二檢丁夫・病夫・有識者一聞レ官、如レ例、

○納二三狩所レ獲鹿皮一枚于官一、

○官系二継公族家系一、仍下レ命曰、自二寶永元一至二今年一諸家家統授受生死歳月等其他姻姫新疎、悉紀レ之呈二于御記録奉行一云、原書記二于左一、

○ 一 記録奉行覚写

寫覺

諸家中

此節御支族之家々家譜系續被仰付候付、其家々二而、専可相計ヶ条左之通、

一寶永元年家督之者より當年出生之子とも迄不殘書記、初中後之假名・実名可書記事、

一男女兄弟之次第、天倫之通書記、誕生之年号月日、母何某女、其父假名書記、且又死去年号月日法名可書記事、

一何そ二付、御目見被仰付候者者、奏者何某を以何品進上之訳相記、継目・家督・隠居被申付候年号月日可書記事、

一役儀相勤候者者、何年何月何日何役被申付候訳書記、且又退役之年号月日可書記事、

一他家之養子二参り候者者何某、参候者者何某養子と養父之假名・実名書記、又者其家二入來候者、何某何男与相記、実父之假名・実名并母者何某女与父之假名・実名可書記事、

一何そ二付、屹与御褒美又者屹与拜領物等被仰付候者者、何年何月何日、何様之訳二而何品拜領被仰付候訳可書記事、

一寶永元年以後新家二別立候者者、當何某何代之祖何某何男二而別立候訳相記、代々前條之通可申出事、

右應ヶ條相計可申出候、其外右準家之規模二茂可

相成儀者書記、系圖帳面取仕立、無延引御記録所江可差出事、

安政五年午正月　　御記録奉行

○二月二日、按察一向宗聞于　官、如レ例、

○同日、笹河覺太夫・子島友次郎獻征矢、東辰五郎・日高吉次郎・肥後休次郎始謁獻火縄、

○六日、祖母夫人命創建水天宮之石祠于平山村新道決河之邊、

○八日、家老上妻小左衞門定直有レ過、納科錢一貫五百文于　官、

○十一日、家老平山新兵衞友益死、

○十三日、指宿摺之濱之勘左衞門殺害同所之覺蔵出奔、有下可捜索之　官命上

○同日、與俸田一石于林甚五郎、以製レ鞍獻レ之也、

○十七日、因祖母夫人之命、與本源寺射圃故地于柳田意哉、

○二十一日、楢原直之助就藩士隈元猪之助學直心影流劍法得其傳、

○二十三日、以組士故武田善六養子同新太郎為西之表代々郷士、且除善六士籍之名、

○同日、與眞米四斛一斗及錢六貫五百文當衣服料于小田彦太郎、因下為扈從手習方三月命中出府上也、

○二十五日、野間村之長深田岩次郎宅火、即告之締方横目、

○同日、桎平山村之足輕小川源次郎下種子島、因下不レ告而私與僧英存欲上レ奔于上國也、

○同日、以横目西村七郎時義・山奉行遠藤才助・美坐織太郎為松炭焼方掛、

○同日、以河内覺右衞門為高奉行、池野意仙奥醫師、

○國老島津下総・島津伯耆見レ命下作海防論可上レ呈之于　官、開于左、

○　二　島津久福・島津久徴連署申渡書写

寫

當時海防急務論

右造士館之面々其外所存有之人々者、和文漢文無差別、當十四日迄ニ書出候様被仰出候、此旨諸郷私領江可申渡候、

二月　（島津久徴）下総　（島津久福）伯耆

○官以二吾臣醫者白男川隆菴一為二代々郡山郷士一、

○島津左膳臣矢吉（本姓永嶺）・伊集院一代郷士玄龍（本姓本田）、以レ崇二信一向宗一得レ罪來、

○高尾野郷士正右衛門（本姓山本）、嘗以レ尊二信一向宗一見レ謫二此地一、頃日逃歸發覺復來、

○三月三日、使下二日高源右衛門為徳一讀上二法令書一、

○同日、與二艾餅于三寺一、慈遠寺獻二同品一、

○同日、西之表庄官賀二瀬引一獻二酒肴一、

○同日夜、公儀流人太蔵・鶴吉・由松・金吉破レ牢、盜二蜑泊浦之小舟二艘一而出奔、急遣二兵具奉行一率二捕手一索二搜之一、遂獲二之洋中一、横目種子島平蔵時宜・西村休八時乗鞠問而再下二之獄一、聞二状于　官一、

○四日、以二種子島友右衛門時大一為二家老一、與二俸田十五石一且為二改革方掛一、

○同日、河内矢一郎繼二河内覺兵衛之家跡一、其家格隷二代々平士一、

○五日、以二上妻直蔵定理一為二松炭焼方掛一、

○同日、軍役方國老下レ命曰、頃者蘭人貢二蒸氣船于幕府一、幕府即欲レ試二其行一レ船之法一、因使下二目附木村圖書・傳習方惣務勝麟太郎・御小人二人、其餘水梢數輩一乗レ之以巡上二視諸州一、若有レ到則敬接二侍（ママ）之一、爾即以二森休兵衛友習・西村次郎兵衛時知一、為二縣官巡視士接侍（ママ）方一、巡使竟不レ到、

○六日、配二一向宗流人矢吉于増田村、正右衛門于中之村一、

○同日、許下楢原直之助可上レ指二南剣術一、

○十五日、三役覧二武技一、鏡智流槍術師平山藤左衛門・

種子島五郎左衞門代同助之丞、天眞流劍術師日高孝兵衞・遠藤壯兵衞代下村要二、示現流吉良甚助代同六郎・宮浦半之丞、姓一流羽生彦八郎、水野流長野平左衞門・下村要二、金子流鮫島貞哉代同貞節、関口流牧平次、眞影流楢原直之助、無双流足輕大瀬助兵衞、

○二十五日、三役・組頭覧二射于内城之射場一、

○二十七日、徒目附清水源兵衞為レ製二松炭一來、

○國老新納駿河傳レ命、去歳不レ登米價騰踊、故發二常平倉一低價、糶二米千斛諸人一、諸人亦宜レ節二用之一、

○四月一日、降二牧嘉助家格一等一為二代々郷士一、以三嘉助素足輕而今繼二組士故牧嘉平次家跡一也、

○十日、藩士東郷佐太夫授二射傳于吾臣羽生助左衞門一、

○十三日、唐物横目伊勢矢太郎・附役森山幸右衞門・締方横目家村彦九郎・和田彦二帰、

○十七日、創開二諸色方之局于會所一、以平二準物價一、使下三横目一為上二之總裁一、

○十九日、徒目附清水源兵衞歸二于麗府一、

○二十四日、以二田上助十郎一為二馬役一、

○二十五日、異國方用人汾陽次郎右衞門禁三私商二唐貨一、且示二糸荷船漂來之日處置之法一、如レ例、

○二十六日、　太守公從弟本多隠岐守卒、禁樂三日、

○二十八日、美座甚五郎始謁獻二征矢一、田上三次郎・羽生清次郎・鮫島孫右衞門・鮫島有助・河野熊之丞始謁獻二火縄一、名代家老知覧才兵衞行修、

○同日、以二西村次郎兵衞時知一為二物奉行見習一、種子島五郎左衞門政教同官、參二改革座一如本、座有レ議レ事則関二聞之一云、

○國老有レ命、　哲丸公子稱二若太守一且可レ諱二哲之字一、

○五月五日、與二粽二束于三寺一、慈遠寺獻二同品一、

○九日、以二上妻直蔵定理一為二軍役方掛一、田上助市船奉行兼記録方、野間源十郎・種子島助之丞兵具奉行、子島猪右衞門普請奉行、美坐矢太右衞門・河内市兵衞・知覧友次郎馬役、西村七左衞門・八板藤兵衞山奉行、特擢二美座六右衞門一為二馬役一、以下六右衞門多年為二勝手方吟味役一而有上二功勞一也、

○十九日、以二西村次郎兵衛時知一為二藥園方掛一、

○二十日、西町之榎本直太郎寺二入于浄光寺一三七日、以下先レ是直太郎為二博奕一事露、因召二之會所一之日、有二不敬之語一、且平素言行不上レ正也、

○二十二日、下二平山村之源次郎于獄一二百日、先レ是為二博奕之主謀一者也、且當二召レ之而欲レ糺レ事之際一、不レ持二券書一而潛抵二本府一、故及レ之、

○二十三日、平山村之名越惣太郎褫二其役目一、寺二入于本成寺一三七日、坐下嚮因二下中之村岩坪惣太郎變死之事一召二之吏署一之日、就二筆吏一言辞違上二事理一也、

○國老有レ命、　公儀流人松屋清右衛門養女奴伊・西本願寺門徒龍吉・無宿龜吉、見レ配二于種子島一、所置宜レ準二先例一云、

○六月三日、以二上妻直蔵定理・種子島平蔵時宜一為二公儀流人方掛一、

○同日、準二於放光公毎月之費用一定二年中之定費一、開レ左、

○　三　年中定費書上

一錢弐拾五貫八百弐拾七文、
　内七貫七拾弐文、
年中八拾四貫八百九拾五文、
御召料御仕料十二ヶ月割、
　五貫四百拾九文、
年中六拾五貫三拾九文、御常住方十二ヶ月割、
　拾三貫三百三拾弐文、
　右壱詰八拾貫文之割、
一錢六拾貫文、子之十月より丑三月迄、
　合月数六ヶ月、壱月ニ拾貫文ツヽ、
　右者放光院様（種子島久道）御在世中御賦銀、
一錢四百弐拾貫九百三拾六文、
　三斗六合題之高ニシテ四百斛尤三拾五貫文替之米、

○五日、先レ是羽生助左衛門受二射傳于東郷家一、於是命レ可レ教二之門人一、

○七日、遣二森休兵衛友習浪華一監二我島産物諸價出納一、因與二銀拾二枚一以為二路費一、
○十日、以二平山藤左衛門良友一為二和藥方掛一、
○十一日、赦二榎本直太郎一令レ出レ寺、
○十四日、赦二名越惣太郎一令レ出レ寺、
○十七日、責二訶濃田喜八一、坐下先レ是吾下二種子島一之時、為二船長一而記二船中之費一、簿中出納有上二重覆一、責二訶野間村税吏緒方助右衛門一、坐三檢レ簿有二不正之事一也、
○十九日、普請方下吏下村良助寺二入于妙昌寺一三七日、代官所下吏緒方權蔵・吉良甚助寺二入于日輪寺一四七日、坐二計レ簿不レ正也、
○二十五日、國老告紀伊公入為二　大樹公之世子一、
○河野佐助嘗為二島間村製油之吏一、檢レ簿有二不正之事一、罪當二寺入一七日一、然今既死、故告二之其族一、
○桑山惣之進嘗為二船手吏一、檢レ簿有二不正之事一、罪當二寺入一七日一、然今既死、故告二之其族一、
○七月六日、因二　宰相公位階昇進一、見レ赦下高城郷士山元十郎左衛門・島津因幡臣佐々木意圓及所レ放二于喜界島一我池田浦之甚吉上、
○七日、奉二勇猛公戎服于廣間一、家老知覽才兵衛行修拜レ之、
○八日、家老美座十郎右衛門時敏請二于大會寺一、祭二祖先及宗祖・戰死之靈一、
○同日、上中之村鮫島助之進以レ有二不正之行一、褫二其横目役一、寺二入于善福寺一二七日、
○十三日、名代家老岩川十右衛門時行詣二于慈遠寺一、祭二祖先及戰死之靈一、
○十四日、名代家老上妻小左衛門定直詣二于本源寺一、祭二宗祖一、
○十六日、名代家老前田新五兵衛宗誠詣二于本源寺一、祭二祖先及戰死靈於方丈一、
○同日、國老島津登令曰、　太守公不豫、松壽院殿宜レ見レ獻二禱符一、
○十九日、西町之井元彌吉寺二入于本成寺一二七日、坐下以レ米釀二燒酒一鬻上之也時禁米、釀燒酒

○二十日、　太守齊彬公薨、法諱順聖院殿英徳良雄大居士、祖母夫人受忌三日、服七日、國老新納駿河傳レ令禁レ樂等之事、如レ例、

○二十二日、使下二親戚北條織部時昭一上疏請丙捧二祭文一、且僧徒唱二野風經・座風經一弔乙　順聖公、甲

○　四　北条時昭口上覚

口上覺

順聖院様被遊御逝去候付、種子島霰袈裟沙家之儀、御代々様江野風經・座風經迄茂種子島本源寺江為相勤來申候間、此節茂先例之通被仰付度奉願候、尤本源寺罷登候様、飛船を以申越置候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

午七月廿二日　　北條織部（時昭）

○　五　北条時昭口上覚

口上覺

順聖院様被遊御逝去候付、種子島霰袈裟家之儀、御代々様江御中陰中祭文進上仕來申候間、此節茂被仰付度奉願候、尤平供臺・諸膳部・盛物・御菓子等、都而御物御取替を以調へ方被仰付被下度奉願候、是等之段、被仰上可被下儀奉頼候、以上、

午七月廿二日

○二十八日、道具番下西之表大瀬兵七寺二入于蓮勝寺一二七日、先レ是莖永村之直助有レ罪、繫二于普請方一、使下二兵七一監中司之上、兵七不レ施二之縲紲一、而使下二代レ己者一亦傚上レ之、後終至下殆使中二囚者一脱亡上、故被レ坐、

○八月一日、因二　太守公之喪一、除下遣二紙于両寺一之式上、

○同日、以二日高源右衛門為徳一為二慈遠寺々社奉行一、羽生仙蔵能通大會寺々社奉行、知覽覺之丞行義・上妻九郎左衛門宗富用人、組頭笹川九兵衛船奉行、鮫島源蔵馬役、中田圓泰奥醫師、

○二日、道具番安城村之小川仙九郎寺二入于本蓮寺一二七日、嚮莖永村之直助有レ罪賓二之普請方一、使下二仙九

郎一看上二護之一、有レ疾使下二其子仙太郎一代上レ己、直助伺レ間剃レ髭、不三速訴二之廷一、故及レ之也、

○三日、下中之村之瀬戸口貞吉寺二入于善福寺一二七日、以下犯レ禁以レ米釀上二焼酒一也、

○五日、葬二順聖院公于玉龍精舎一、吾僧拾一人、本源寺代智遠院・最成院・永順院・蓮姓坊・感應院・東全院・順亮院・壽圓院・教存坊・宜承坊、因二吾幼弱一、使下二族人北條織部時昭一代レ吾詣二于福昌寺一、祭上レ公、祭文使下二藩士伊知地小十郎（季安）一裁上レ之、開レ左、

○　六　種子島久尚代北条時昭祭文

安政五年戊午八月五日丁未送葬、

邦君順聖院殿故左近衛中将三州太守兼領琉球國英徳良雄源公之靈柩於本府福昌禅寺、種子島主臣平久尚不能以幼送臨窀穸、越十五日丁巳族人臣北條時昭不堪哀慕之情、為其幼孩代登龍山、使島寺本源主僧虔陳薄奠恭陪、

帷下於中陰之日、以敬祭于源公之靈、其辞曰、

於戯源公　性質賢良　世封三國　南跨球陽
劇文練武　以盛以強　士法正名　民服平倉
誰不禱壽　何速匿光

嗚呼哀哉

維威惟徳　逮吾島方　應以變俗　稍化善郷
胡忽背棄　令人失望　精慮所著　貽在遺章
欽風哀誦　永傳無量

嗚呼哀哉

靈柩赴寺　孩童拜行　迎門悉泣　欲送斷腸
惟實近屬　自堪以傷　惟幼託族　恭詣廟堂
奠羞雖薄　敬陳靈場

嗚呼哀哉　尚饗

○祖母夫人奉レ命獻二金二百疋于福昌寺一、

○六日、以二知覽彌兵衛一為二船奉行一、

○十一日、以二下村要二一為二納殿役人一、

○十五日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、如レ例、

○十九日、以二平山藤左衞門良友一為二軍役方掛一、
○二十四日、西町之八板栄右衞門寺二入于妙昌寺一三七日、且免二其船頭職一、嚮為二船長一到二麗府一、及レ歸私將レ載二旅人一、故及レ之、
○二十五日、國老傳レ命、先月八日　將軍薨、禁二剃髭一七日、禁二絲竹及殺生一五十日、禁二營作一七日、
○二十八日、　大樹公之世子宰相公見レ改二名家茂公一、國老島津左衞門告レ之、
○九月四日、以二醫師上妻玄齊一為二軍役方掛一、
○五日、錮二善福寺僧教存坊一三七日、以下驅二前之田元牧馬一之日、不レ恐二諸官一乘レ馬而過二其前一、事大徙上二不遜一也、
○七日、以二年不登一、蠲二大山野之租一、
○九日、以二　太守公之喪未レ除、止レ讀二法令書一、
○十三日、安城村足輕小河新九郎寺二入于本成寺一二七日、以下對二諸有司一而失上レ禮也、
○同日、　官命濃州石津郡安田村之幸七者、傷二父安兵衞一逃去、如有レ來則捕而告二之　官一、
○同日、島間村鐵匠河野市郎、就二本府之鐵匠内野新右衞門一學レ製レ轡而受二其訣一、
○十五日、以二蘭船入港期在レ近、國老桃山伊織・新納駿河傳二長崎奉行之令一、如レ例、
○二十二日、締方横目肝附伊兵衞・塩田十郎來、
○二十三日、由二祖母夫人命一、以二日高伊右衞門圃一為二藥圃一、與二代錢九十貫文下屋敷八畦、弐拾壱歩所一、
○二十四日、締方横目赤松伴次郎歸、
○同日、責二訶洲之崎浦水抄辨太郎一以レ不レ稱二其職一也、先是更代船之過二内洋一、鍼路失レ方誤礒二于神磯、船幾破、時辨太郎適司二羅経一、故及レ之、
○同日、本藩横目片野坂助左衞門監二公儀流人一來、締方横目塩田十郎・肝附伊兵衞、吾横目種子島平蔵時宜・上妻直蔵定理等承レ之、令三配二居于諸村一、女奴伊于野間村、龍吉于油久村、龜吉于坂井村、而使下二里正一監上レ之、
○十月一日、責二訶足輕國上村落合浦次一、以下訴二故落合四郎兵衞家跡之事一而有中不正之言上也、

○九日、名代家老前田新五兵衛宗誠詣二于本源寺一、盛下供二宗祖日蓮一之菓子上、

○十一日、名代家老上妻小左衛門定直詣二于本源寺一、祭二宗祖日蓮一、

○十三日、名代家老岩川十右衛門時令詣二于本源寺一、祭二宗祖日蓮一、

○十七日、西村九郎男龜袈裟元服、名代家老岩川十右衛門時令・家老上妻小左衛門定直、理髪西村次郎兵衛時知、物奉行森休兵衛友習、奏者西村田代時和、用人美座三十郎時資、命二俗字直次郎一、

○二十七日、古田村中宿士上妻傳次郎縊死、締方横目及吾横目西村十郎次時義・日高源右衛門為徳往検レ之、事聞二于　官一、

○二十九日、以二智遠院一為二慈遠寺住職一兼二本源寺鑑司一、

○國老新納駿河傳レ命、　順聖公夫人見レ改二名芳樹院一、由レ是芳字可レ諱、

○官下レ令曰、先月十日芳樹院君薨、自二此訃至一以往、禁二音樂・殺生一五十日、

○十一月六日、以二上妻直蔵定理・平山藤左衛門良友一為二改革方掛一、

○二十日、赦二吉良甚助・緒方權蔵一令レ出レ寺、

○同日、以二西之村之金太郎一為二代々足軽一、且許三世々墾二闢山野一、而且免二其租一、以レ獻二其家所レ蔵（種子島蓮住惠時）公自手筆書一也、又蔵下其祖嘗下中之村郷士而為二古市氏一之證書上、以レ故命復二舊姓一、徙二住于下中之村一、然其徙與レ不レ徙則任二其意一耳、　蓮住公之書挿二入左一、

○　七　種子島惠時願文

南無妙法蓮華經

南無久遠實成釋迦牟尼如來

南無證明法華多寶佛

南無日蓮大菩薩

南無日隆大菩薩

南無代々大上人等

一天四海　廣宣流布
信心増益　道心堅固
三島安全　佛法繁昌
壽福倍増　五穀成就
眞俗如意　子孫繁栄
永禄七年きのへね　平惠時

○二十六日、先レ是流人佐々木意圓遇レ赦、因レ病不レ能レ歸、至レ是病愈而歸、

○二十七日、公儀流人太蔵病二死于獄中一、締方横目及吾横目種子島郷兵衛時加・日高源右衛門為徳檢レ之、事聞二于官一、

○十二月三日、命二種子島郷兵衛時加一、就二本府之土基太村助左衛門一、受二木之上家射初式法道之方傳一、可レ教二導門生一、

○七日、瀬戸口貞吉寺二入于妙昌寺一五七日、而免二其斗人職一、以レ有二不正之行一也、

○八日、以二家老知覺才兵衛行修一為二定府家老一、與二定府俸田二十五石一、行修以二世禄固厚一、辞二役料地十五石一、雖レ然以二旅資多一レ費強令レ受レ之、

○十一日、本府石工藤田次五右衛門・城崎次郎助・四元孫次郎・海老原善之丞・有村藤左衛門・夫仕次郎、來築二下中之村新井手堰一、

○十三日、上妻源左衛門獻二斗搗之餅一如レ例、名代家老上妻小左衛門定直、

○十四日、赦二平山村之源次郎一令レ出レ牢嘗為博奕主謀者、

○十五日、始着袴、

○同日、與二金十両于柳田意哉一、先レ是吾有二脚疾一、使二渠療一之得レ愈、故有二此賞一、

○十七日、以二羽生平左衛門・河内覺右衛門・下村佐一郎一為二近習役一、

○二十二日、前田新五兵衛宗誠男六十郎・肥後渡前男三千代各元服、名代家老美座十郎右衛門時敏、家老上妻小左衛門定直、理髪森休兵衛友習、物奉行西村源五右衛門時弘、奏者平山佐次右衛門友直、用人上妻直蔵定理、命二俗字太郎右衛門一、三千代俗字四郎

左衞門、獻賜如レ例、河野傳次・榎本新太郎・名越仙九郎・上妻市太郎・吉良直次・前田仙次郎・上妻龜袈裟・羽生半次・田上太郎・武田小太郎・遠藤次郎・武田助太夫・桑山惣次郎・田上市太郎・日高仙袈裟・榎本菊次郎始謁、獻二火繩一、

○二十七日、二十人家及三寺・鐵匠進上、如レ例、

○歳暮規式、如レ例、

（表紙）

安政六年　種子島家譜　廿五代久尚　七十五

○安政六年己未正月元日、國上村獻野老、
○二日、覽馬、名代家老前田新五兵衛宗誠、馬役（失姓名）、
○同日、國上村獻介族、庄司浦獻鰒、
○同日、八寺獻上、如例、
○四日、上之郡庄官・小觸獻上、如例、
○同日、官命嚴瀬海守備、
○同日、世子哲丸君夭亡（哲惠院殿玉容霊明大禪童子）、停絲竹・殺生二十五日、停工事漁猟等之事三日、
○六日、初狩、組頭西村田代時和・上妻直藏定理・日高源右衛門爲徳、山奉行東嘉助・前田平八・美座織太郎・西村七左衛門・八板藤兵衛、夕狩場、名代家老前田新五兵衛宗誠、物奉行西村源五右衛門時弘・種子島平藏時宜、西之表庄官獻上、如例、
○七日、中之郡・下之郡庄官獻上如例、家老上妻小左衛門定直、
○同日、沖永良部島代官山口九十郎贈書告、榮虎丸水梢平左衛門（種子島之産）、以戊午十二月廿日客死於永良部島、
○十一日、蓮勝寺獻神酒・粢盛、
○同日、甲冑之賀、如例、
○同日、在郷諸寺進上如例、名代家老上妻小左衛門定直、
○同日、的始、名代家老上妻小左衛門定直・用人日高源右衛門爲徳、射手一番（美座清介河内市郎）・二番（下村源次武田只助）・三番（上妻新右衛門八板多平太）、
○同日、軍陣・温坐祈念、如例、

○同日、　官下ノ命衛ニ枡形柵門ニ、
○十五日、笹川五兵衛免ニ納殿役人職ニ馬役如故、
○十七日、禁ノ令ニ西町松下嘉助止ニ宿旅人於其宅ニ、以下嚮止ニ宿大泊人ニ而爲中不正之事上也、
○同日、罰ニ蜑泊浦之與三太ニ爲ニ砂坂塩戸之伐子ニ三十日、嚮本源寺祈念夜以ノ有ニ不正之事ニ也、
○二十日、國分遠壽寺僧贈ニ書國上只次ニ告ニ見隆寺故事ニ、開ニ于左ニ、

○　八　国分遠寿寺届書

國分小濱村　　末寺　見隆寺
和光山
慶長四年甲寅年、御一之臺様為菩提御建立被遊候、
其時住持興善院日性開山ニ而御坐候、
一貫明存忠庵主、義久公御法名
一圓信院妙蓮尊霊、義久公御前
一喜見院妙隆、
右御三躰様
御位牌御安置
一貫明様、
一妙隆様、
右御石塔二基寺中ニ有之候、
但妙隆様御石塔直御身躰ニ而被遊候、
右者、御一之臺様御存生内より御祈願所ニ而御座候處、御逝去之後、御跡目北條主水殿江被仰付置候處、其後種子嶋次郎右衛門殿ニ而御座候、
一御一之臺様御持高五拾石之内、弐拾石御佛餉高として北條主水殿より永〻被付置、弐拾石高之儀者小濱村之内江有之、高目録之儀者御支配方より直ニ見隆寺江被渡置候處、天保年間之比迄格護有之候處、弘化年間之砌、右弐拾石高種子島次郎右衛門殿何様之所存ニ而高目録被相請取候哉、於今者河南仲次殿支配被致候也、
右者、先達而私出府之砌、御方様御尋之処、右一件相しらべ呉候様被仰付候故、帳面見合申候處、右之通ニ御座候、左様思召可被下候、以上、

午二月　　遠壽寺

國上伴九郎様

御子息様

○　九　鹿児島役所達書

種子島庶流國上系圖

時宜（對馬守時里二男）　大和守

時通　　能登守

出家

女子

奉仕

太守義久公之簾中　号一之臺、

時盛　主水　子孫有鹿府、

天正四年丙子誕生、時盛者伊勢長門守貞清二男也、

一之臺蒙

義久公高免、養育之為嗣子、故系時満兄、

時満　安藝　次郎右衛門

舍兄依出家家督、

文禄四年丁(乙)未三月、渡朝鮮、

慶長四年己亥十二月八日、戦死庄内安永城、

未二月

横切壱通　　遠壽寺

右本文相見得候通御座候、國上只次い細存知之

向候間、書留等茂有之候得者、書記候様被仰渡、

猶又御家譜等ニ茂相知れ居候儀ニ而茂有之間敷

や、御文書方御調之上、何分御掛合被成度存申

候、以上、

未正月廿日

種子島　　鹿児島

御役所　　御役所

○晦日、賜ニ　故太守公遺贈一、久尚花臺（黒髪金縁、又以金粉描雀與竹、）・

祖母夫人銀煙盤（以烏漆塗之、金粉描鶯梅、）以・女兄（波津）短尺掛（以烏漆塗之、描金和歌浦景）・女兄（多計）扇子掛（以烏漆塗之、描金蝶與菊、）

○點ニ檢丁夫・病夫・有職者一告ニ于　官一、如レ例、

○三狩獻ニ所レ獲鹿皮一、

○重富公子又次郎君入爲二　大守侯一、因　官下レ令如左、

○　一〇　藩達書写

寫

此節　御家御相續ニ付、
太守様　宰相様与御順被　仰出候条、此旨表方江致
通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

未正月

○　一一　新納久仰達書

暐姫様御事、今般　又次郎様
御家御相續被仰出候付、此様文字相用、御順之儀者、
宰相様御次相認、追而御婚姻被為整候上、　御前様
と奉称候様、　宰相様御沙汰被為在候条、此旨表方
江致通達、奥掛御勝手方江茂可相達候、

未正月　（新納久仰）駿河

○二月二日、罰二物奉行西村甚五右衛門時哉一、逼塞五
十日、嚮納殿等作二簿書一而不レ正焉、母夫人聞レ之怒
曰、検焉、乃令下甚五右衛門齎中其簿上至二麑邸一、示二
之於會議衆一検レ之、其簿所レ記果不レ正、會議衆多レ
所二詰問一、甚五右衛門不レ能二詳答一、又趣二麑邸一之日、
不レ慮二穀價之貴與一レ賤、私賣二府庫米百斛餘於山川
人一、而較二之本府之米價一則稍低矣、而平日參署甚不
職也、以レ故被レ坐焉、
○三日、令三國上村百姓金助納二科炭拾表一、且褫二其職一、
以下嚮偽稱二同村足軽日高平次二男一爲中道具番殿役上
也、
○同日、中之村足軽日高兵太郎、去年十二月十四日
失レ火、燒二亡手札三枚一、聞二之于　官一、
○同日、按二察一向宗一告二于　官一、如例、
○同日、以羽生平左衛門・河内覺右衛門・下村佐一郎
爲二近習役一、
○六日、赦二下中村瀬戸口貞吉一令二出寺一、
○七日、賜二　芳樹院君遺物短尺箱於祖母夫人一、
○十二日、與二染布各一端於美座源助・美座善兵衛一、

賞下造二本源寺社堂一之功上也、

○二十二日、罰二行司頭羽生次助・榎本鹿之助一、収二其俸田一且褫二其職一、以下嚮以レ三二狩於中嶽山一、召二二人者一、皆託レ病而不レ至、後問二其状一則二人亦潛入二獵場一而欲上攘二其獲一也、又罰二西町船匠榎本休六一、収二其俸田一褫レ職且除二野町人之籍一、下西之表百姓周藏納二科炭拾苞一、桑山權之允・榎本權七寺二入于隆興寺一二七日、羽生喜十次・武田甚之允寺二入于本成寺一二七日、皆與二次助・鹿之助等一共入二獵場一者也、

○太守侯以レ稱二修理太夫一、人名禁二修字及同聲字一、

○三月三日、令三用人種子島郷兵衛時加讀二法章一、

○同日、與二艾餅於三寺一、慈遠寺獻二同品一、

○同日、西之表庄官獻上、如例、

○七日、赦二武田甚之允・羽生喜十次・桑山權之允・榎本權七一令二出寺一、

○十日、母夫人與二女兄波津多計浴二于指宿温泉一、

○十三日、唐物横目南郷覺太郎・締方横目池田仲左衛門・附役馬場新太郎來、

○同日、下二一向宗流人仲次郎坂井村居住者于獄一、以レ有二不正之行一也、

○同日、罰二西町之船匠直太郎一、収二其俸田一、坐二其父休六被レ罪也、

○二十二日、與二篠巻一端於西町之船匠桑原與市一、賞下爲二大匠之輔一而造二日典丸一之功上也、

○二十四日、締方横目今村金次・肝付伊兵衛・塩田十郎・附役折田十藏任満而歸、

○二十五日、三役・組頭覧二諸家武技一、如レ例、

○同日、赦二西村甚五右衛門時哉先是逼塞一、

○川口多十嚮爲二普請方下吏一、至レ是検二其所レ記之簿書一、則傭錢過レ度、其他多レ過矣、今也雖レ可レ罰レ之既死、故召二其家族一而責レ之、

○四月八日、異國方用人川上右近禁三私商二唐貨一、示二糸荷船漂來之日處置之法一、

○同日、三役・組頭覧二射于内城一、緒方善藏・上妻藤八・羽生六次郎雙箭命中、家老・物奉行與二鷲羽一、用人・組頭與二弦五掛一而賞レ之、

○十七日、與二山畑及米一斛八斗于妙久寺僧一、以レ令下司中降福權現之祭祀上也先是令山之寺司之、以米二斗、至是除之、

○　一二　妙久寺番僧宮守料書上

一山畑壱畦拾歩　伐明大豆四合　勘兵衛
一右同拾八歩　右同大豆三合　直四郎
一右同壱畦　右同大豆五合　直四郎
一右同弐拾四歩　右同大豆四合　直四郎

右四行妙久寺番僧江宮守料として被仰付候、

○十八日、種子島加次右衛門・種子島休藏・新納休右衛門・村田治左衛門、書二府庫貨植（殖）之事一獻レ之、記二于左一、

○　一三　村田次左衛門外三名連署覚

覺

一御改革被仰出候而より最早拾ヶ年餘りニ相成候得共、差而御蔵方御立直り之廉不相見得、我々共ニ茂適々御世話申上事候間、其詮有之候様、何そと氣を寄候得共、凶年災殃、且者御産物等茂存之候出来兼候上、御吉凶事ニ付而茂、是迄御物入有之、那（将カ）又平日之御失費何分入増候方ニ相向候間、只今躰ニ而者、　御内沙汰被為在、御改革被仰渡候儀詮立兼候ニ付、若哉
被聞召上不行届之段
御沙汰共被為在候而者、別而不都合之儀ニ而、何共申上様茂無之、恐入次第ニ候間、發起笑（調所広郷）左衛門殿其外より被仰渡候御趣意ニ基き、此涯御取縮第一之儀と存候、就而者、以前より之習俗流れ不取締之儀共有之候而者、甚如何之事ニ而、第一御改革之御趣意不相振候間、則相改候様被取計度存候間、此涯猶又御取締向吟味筋可承候、
一差登ニ相成候米、近年直成下落之時分相届候間、宥々御損失ニ相成候、海上之事故、不順且者遠方御蔵より差廻し方旁隙取候故障筋有之やニ相承り

候得共、御當地より者実熟も早き由候間、摺拵方等致催促、年内差廻ニ相成候得者、格別御利益も可有之候間、當年より者屹与仕登せ方被差急度、就中赤米之儀者、年内早目相届候様吟味有之度、尤御米廻し方ニ付、故障之廉茂候ハヽ、弁利之手都合茂可有之事ニ候、此儀も後年之為ニも相成儀候間、致吟味度候、勿論米入実無之處より直段茂相劣、決而煩筋可有之候付、稠敷取締之趣法を付候儀者右同断、

一御當地并御島元年中入拂、総本是迄不届候間、遐逅御世話申上事候間、年々入拂増減不存候而者、其詮無之候付、是以此節吟味之上、年中之総取仕立方いたし被差出度、尤年々其通有之度候事、

一御當地者勿論、御島許御蔵方等取拂相勤候面々、御勘定相遂候上者、自過不足有之筈与存候得共、是迄不足上納等何様取扱相成居候茂分り兼候処、此節近年之不足引付被仰付候分者、取しらへ被差出候得共、此以前より之不足不納之人数も可有之、是亦早々取しらへ有之度候事、

一御改革以前より者御島許栄労何様有之候哉、田畠手入等之儀者、御改革發起より分而御達ニ相成候間、掛役々差はまり、諸下知為在之筈候間、百姓共ニ者潤立候哉、是又村々栄労、右同断、

一前文通、拾ヶ年余之御改革、詮立兼候付而者、一統御立直り之処を懸心頭、少事たり共御物入無之様ニ被取扱可被申之處、此比ニ至候而者、勤方ニ付拝借等申出候向茂有之、漸御差繰之御所帯、右之通有之候而者、御改革不守之筋ニ相當、如何之至候付、折角倹約相用、拝借等申出候儀者、御改革中差扣候筋、一統江被申渡度致吟味、且又此以前之拝借、御改革後拝借、又者無故取込等有之候面々、委敷取しらへ、右之内年符(賦)且利銀返上之株茂有之候ハヽ、其訳相記、是又右同断、

一御當地詰役人等之内、間ニ者親子之間見聞役ニ而罷登候儀茂有之候得共、身近き者ニ而者差支之訳茂有之候付、以来別段人柄致吟味被差登候様取計

有之度候、

一御當地御蔵取納方又者拂出等之節者、是迄物奉行・見聞役立會、出入等之取扱有之候得共、以来者、役人・物奉行・見聞役立會之上、取扱有之度、尤都合次第、我〻共ニ茂不時可致見聞候、

一御島元御蔵方之儀、二・八月両度、役人・物奉行・見聞役立會之上、米錢諸雑物等厳重相改、現物改、證文見聞役より同案為差出、壱通者御島元御改革江さし出、壱通爰許御役所江差登候様取計有之度候、

一御當地御蔵之儀、以来壱ヶ年ニ被仰付、御蔵改之儀茂前條之振合を以、役人・物奉行・見聞役・我〻共之内立會、現物相改、見聞役より證文御役所江為差出候様有之度候、

一御嶋元御蔵元江有米差出為致、夫〻米賦等いたし、同案を以爰許御役所江茂さし登せ候様取計有之度候、

一御島許取拂役之儀、是迄同所ニおひて御勘定相遂来候得共、以来勘定帳并諸帳面等、勘定奉行・勘定役より持登り、御物御勘定役を御頼入、夫〻御作法通勘定相遂、過不足等相究、萬一不足相立候ハヽ、早速致上納候様、取扱有之度候、

一諸所御修甫方之儀、作事方役〻者勿論、役人・物奉行・見聞役・我〻共之内立會、見聞之上、為致抜書、右ニ基き入具等御買入を以召仕、成就見分之上、萬一殘所茂有之、本立いたし候様取扱有之度候、

一御島許御改革方掛役〻之儀、金銀米錢等専引受、何篇精微ニ尽吟味を、少事たりとも御不益不相成様取計有之度候、左候而、以来者混与御勝手方江致日勤、屹与近年中、御改革之詮相立候様取計有之度候、

一御改革中拝借取込等可致遠慮之處、是迄役〻等之内、過分之拝借取込等も有之面〻者、上納相済迄之間持高差上、所務米を以差引上納ニ而目成候上被返下、纔計之上納分者、早速上納有之度候、

一御改革方江出勤之面々星帳相調、壱日飯米三合程被成下候ハヽ、猶又一統精勤可仕候間、是又吟味有之度候、

一米蔵取納之儀者、三ヶ所江出勤いたし、拂帳ニして擧有米帳面しらへ方有之度候、

一砂糖代・枦代・種子代無滞相渡候様、帳面等見聞有之度候、

一運賃米之儀、御改革ニ付而者取締向厳重手を付度候、

一百姓共種子米拝借申出候付、以来毎秋取納之節、地方検者より切封為致度候、

一近年赤物地江真を植付(米脱カ)候段相聞得、其通ニ而者、作得茂薄く候付、以来夫々相定候通植付有之度候、

四月十八日　　種子島加治右衛門
　　種子嶋休蔵
　　新納休右衛門
　　村田次左衛門

御役所

○政府諸司所レ議、告ニ之族人・用頼一、原書記ニ于左一、

○　一四　役人・物奉行連署届書

一金蔵代官・米蔵・船手・作事方入拂取締之儀者、専物奉行・見聞役引請取締仕申事御座候得共、倉役下代迄茂人撰ニ而人数被相定、右人数之内より壱人宛輪番を以繰廻し召仕申候ハヽ、乍此上取締行届可申哉ニ吟味仕申候、

一勝手方商賣之儀、大分之儀御座候得者、表方江不混様引分、初發本手米等取納米之内より右考を以相渡置、産物仕登船脇船ニ而候ハヽ、勿論蔵方船者表方江運賃差引共仕、産物大坂ニ而拂ニ相成候上、表方を算用詰仕不申候而者、利潤何程之處相分り兼可申候、猶又鹿児島より為替金ニ相成候金子、表方江仕込ニ無之様、差出有之度吟味仕申候、

一鹿児嶋詰見聞役之儀者、側用人より兼務ニ而、側勤多端之節者、見聞之儀者間ニ合ニ而相済申事御

座候間、向後者見聞役壱人・書役壱人被召登、混与掛置、諸向取入物之儀、直ニ取入方為致、品物ニ而場所〳〵江引渡申候ハヽ、乍此上行届可申や与吟味仕申候、

一島元島間倉より府元迄小廻し運賃米壱斛ニ付弐升ツヽ、鹿児嶋四升ツヽニ而廻し来申候、然處、始抹不行届、俵形悪敷、夫丈斤目等茂引入、御拂之節茂直段進ミ兼申事御座候、就而者、運賃米不足之処より、船頭・水主迷惑筋茂有之、船落多き様取扱いたすやニ相聞得申候、依而此涯より運賃重被仰付、積卸者勿論、船中見覚護至極入念、船あゑ等一切無之様、始抹方船頭・水主共江為請合、其上ニ而茂取納之節欠米等有之候船ニ者、無運賃可被仰付旨堅申渡、精〻取締仕申度吟味仕候、

一蔵〻下代日記勘定之儀、翌春三月比より取付之御法ニ候得共、其内日記上納仕事候得共、先年御下島涯、御用向取紛、其砌より勘定及延引、専我〻緩怠、第一蔵方不締之基、今更驚入申候故、向後者右下代日記八月限、船手・普請方・蠟燈・油燈・勝手方日記十二月限、又翌正月金蔵、米倉翌二月限上納為致、前條御定之通、三月より勘定取付旁取締仕申度、左候而勘定相済候上者、壱紙を以御届可申上候、

一諸人并村〻拝借取込米銭、私共催促緩怠之處より返上納相滞申候、依而厳敷催促仕、返上納不相調者者、持高并家財等を以御差引被仰付度吟味仕申候、

一役所書役并物奉行所書役、壱ヶ年詰被仰付、三月・九月そぎ次ニ交代被仰付候ハヽ、諸事連續可仕吟味仕候、

一蔵役之儀、是迄之通壱ヶ年詰被仰付何様可有御座哉、

役人中

物奉行中

○二十日、以二美座源助一爲二物奉行一（改革方、掛如故）

○同日、以花里之山野十助爲一世郷士、以多年爲母夫人僕也、

○二十一日、令西町樋口勇吉納罰錢五百文、以除所許之雜角十丁餘復伐取數丁也、住吉村長野平七罰錢三百文、以因勇吉請而采材於其山也、

○二十二日、罰東町之小田原孫次寺入于本成寺二七日、且納米三斛六斗、上中村之善助罰錢一貫文・米四斗、以鬻賣米於屋久島人也、

○同日、令上中村大川之岩太郎納罰錢五百文、以因屋久島人請而運致其所買之米於大川也、熊野浦之市太郎罰錢三貫文、以竊買增田村之庄之進者馬皮也、竹崎浦之善之丞罰錢二貫文、且禁旅行二年、以趣瀬戸内賣牛馬皮也、濱津脇之平太郎納罰錢五貫文・牛馬皮七枚、以竊買野間村之屠者作治者之牛馬皮、作治亦納罰錢一貫文、以竊賣牛馬皮七枚於平太郎也、令増田村之庄之進（一向宗流）人、住増田、納罰錢一貫文、且収其馬皮、以竊賣牛馬皮也、

○廿六日、貶西町之榎本休六爲西之表浮面百姓、

○五月五日、與粽各二束於三寺、慈遠寺獻同品、

○同日晡時、祖母夫人及女兄（波津）下島、入濱亭、

○七日、以渡邊勘右衛門爲兵具奉行、西村七左衛門・美座織太郎高奉行兼郡奉行、遠藤健太郎・日高平次山奉行、

○十一日、自昨九日大雨、鷗川有水橋壊、其他上中・西之表及住吉村各有水害、多損田地、

○十六日、召三役及諸奉行等於廣間、示麗府改革方掛者所贈之書（原文、在前）、

○十七日、罰野間村庄官石堂休右衛門・横目鎌田彦左衛門・石堂新助寺入于妙昌寺一七日、坂井村庄官古市源右衛門・横目池山喜藤次・古市八百右衛門于本隆寺一七日、莖永村横目柁原八兵衛・古市五次兵衛于善福寺一七日、以各一村之長而不能禁一村牛馬皮之奸闌也、

○同日、伊關村告有水害而損田地、

○十八日、罰増田村庄官牧瀬十郎太・横目牧瀬彦太

郎一寺二入于日輪寺一一七日、以二各不レ能レ禁二其村之牛馬皮奸闌一也、

○同日、罰二上中村之足軽河野喜兵衛一寺二入于浄光寺一二七日、以下因二小田原孫藏請一而賣中其米於屋久島人上也、

○廿二日、罰二納官村故庄官古市權左衛門・故横目徳永儀左衛門・牧瀬彦左衛門一寺二入于清浄寺一一七日、以二各不レ能レ禁二其村牛馬皮之奸闌一也、

○二十三日、安納村告下有二水害一而損中田地上、

○二十四日、罰二莖永村横目古市三之丞・日高九助一寺二入于善福寺一一七日、以二各不レ能レ禁二其村之牛馬皮奸闌一也、

○二十六日、罰二増田村横目馬場休八・同嘉助一寺二入于日輪寺一一七日、各罪状如レ前、

○同日、野間村告、昨二十五日、流人縫瓢簞町松屋清右衛門娘自溺二長濱之洋一、使二人求レ之、得二屍於納官尻一、締方横目失姓名・吾横目種子島郷兵衛時加・同平藏時宜往検レ之、聞二于　官一、

○二十七日、罰二坂井村横目河内六郎左衛門・古市半助一寺二入于本隆寺一一七日、以レ不レ能レ禁二其村牛馬皮之奸闌一也、

○二十九日、罰二野間村横目日高周左衛門・同善五右衛門一寺二入于妙昌寺一一七日、以レ不レ能レ禁二其村牛馬皮之奸闌一也、

○按二察一向宗一聞于　官、如レ例、

○六月一日、罰二納官村横目日高五右衛門・春田仙左衛門・長深田五平次一寺二入于清浄寺一一七日、以レ不レ能レ禁二其村牛馬皮之奸闌一也、

○二日、女兄波津往遊二馬毛島一、祖母夫人屬官藤田喜次郎・四元圓龍・納殿役人緒方善藏・庖人西田多市從、其餘不レ遑レ記、

○六日、女兄波津自二馬毛島一歸、

○七日、與二米一斗於大山小太郎一、賞下嚮営二本源寺社堂一之時、爲二其下吏一而善辯二其事一又有レ暇則預中粉工之事上也、

○八日、與二米二斗於西町之濵田勘太郎一、賞下築二塢於

島間村一解二鯨於某處一之労上也、

○十一日、油久村足軽徳永權助發レ狂自縊、締方横目往検レ之、聞二于　官一、

○十二日、祖母夫人及女兄波津詣二熊野權現宮一、屬官藤田喜次郎、侍醫四元圓龍・柳田来鳳、物奉行代西村藏多、無役西村休八、納殿役人緒方善藏、納殿一人、庖人林治右衞門・西田多市・僕二人從レ焉、其餘不レ遑レ記、

○十六日、西之表告二近日大雨田地水害大多一、

○同日、河野彦太郎自刄、先レ是罹レ病家居、每憂二其病不レ可レ癒而鬱悒矣、遂發レ狂今日竊入レ殿而自刄、舉家驚駭、雖レ療レ之不レ及遂死、故締方横目及我横目美座三十郎時資往検レ之、事聞二于　官一、

○十七日、　官以レ有二密事一、使下兵具方足軽淵邊仙藏者來中居吾島上、

○十八日晡時、異舶自二南洋一而來、下二碇於住吉村能野之洋一、距レ陸七八丁、其状似二将レ上レ陸者一、故遣二異國方掛平山藤左衞門等一、既而異人等八輩棹二脚船一而上レ陸、中有二邦人政吉者一、曰、吾則淡路國之産也、昨年與二同輩二人一漕レ柑過二某洋中一、颶風忽起舟将レ覆、遂放二北洋一不レ得レ港者三十日、食盡啖レ柑、同輩二人皆餓死、余獨得レ不レ死、幸而漂二到北亜墨加一、彼地有二譯者一、善二和語一、聞二吾言一見二吾状一而憐レ之、與二衣食一以慰レ余矣、居数月、又或與レ錢以爲二旅資一、其待レ吾無レ不レ至矣、爾又指二本舶一謂曰、是則亜墨加國之測量船而官人駕レ之也、今也所三以抵二于此一者、亦欲三以測二量此地一也、非下敢有禍心者上也、諸君許レ之、若拒レ之則彼亦有レ備矣、乃許レ之、異人等則到二塩戸邊一、出二如レ鏡者一、一人對レ之而發レ語則一人把レ筆而記レ之、其所レ爲雖レ不レ知レ爲二何等事一、蓋是爲二測量一也、既而入二人家一啜レ茗而去、少頃而再牽二怪獣一來曰仁久、其状似レ狗而有レ角、欲二以與レ之、就二政吉一而雖二屢辞レ之不レ肯而去、蓋酬二前所レ喫之茗一也、時既酉時、以二異舶未レ去報二之於府一、府内諸官相議發二三信銃一、諸士悉至矣、乃遣二家老知覧才兵衞行修及一番組一、夜将レ半、急使復至告、淡路人曰、異舶

以二明日一而去、於レ是賜二暇於二番組・三番組一、

○十九日、異人九輩復上レ岸、政吉亦俱レ焉曰、船中不レ堪レ暑、故来而納レ涼、君等勿二必疑一、因布二筵於樹下一坐レ之、及レ将レ去請二鶏一・螺吹貝一、乃與レ之、喜而去、及二未牌一而開帆、沿レ陸而北去、抵二大野崎之洋一而轉旋南來、直来二于波戸洋上一而下レ碇、乃令下三組士交番而衛中慈遠寺及濱亭上、少頃異人八輩相伴上陸、或趣二築地一而測量焉、入二慈遠寺一而納涼焉、如レ是者皆請二于我一而爲レ之也、非下敢漫二侮我一者上也、時有二某者一、揣二其渇一而與二茗及水一、則彼亦出二二小瓶一令レ酌レ之、其味甘美矣、彼令二政吉問一曰、此地亦有二如レ此者一乎、因令下寺僧出中焼酒二瓶上、異人等小酌レ之、而奇二其二瓶一而請レ之、乃與レ之、入レ夜而復趣二築地一、暫爲二測量一而去、

○二十日巳牌、異人九輩復来、携二小銃一、曰二六眼銃一又曰二六挺眼一、併二藥鑵一而與レ之、蓋報二我遇レ彼之厚也、就二政吉一雖レ辞レ之不レ肯、政吉曰、亜墨國法與二物於人一、而人不レ受レ之則捨而不レ取、況於二報レ恵者一乎、不レ得レ已遂受レ之、異人等又欲レ教二其發レ銃之法一、因趣二築地一試レ之、一器六發、不レ施二細藥・火縄一而發、極可レ謂二利器一也、及二未牌一而皆辞去、猶レ有二戀戀之意一、到二未牌後一而開帆、遂不レ知レ所レ之矣、因賜二暇於慈遠寺及濱亭之諸士一、

○同日、営二茅屋於花里崎一而爲二淵邊仙藏旅舍一、

○二十三日、祖母夫人及女兄波津駕レ舟從二坂井村屋久津一歸二于濱亭一、

○二十五日、令下鉄匠等擬二異人所レ與之六挺眼一而製上レ銃、

○同日、與三金子百疋於前部三十騎三十人駈付之士與二濱亭諸士一、以下異船来二於住吉村及府本浦一之時、皆有中奔命之労上也、

○同日、與二金子百疋于日高杉右衛門一、賞下雖レ爲二老人一、尚加中三十騎上也、

○二十六日、納官村之休市者失レ火、締方横目及吾横目名失姓往検レ之、事聞二于　官一、

○晦日、以二山奉行河内六助・馬役河内十助一爲二改革

方掛、

○同日、夏越之規式、如レ例、

○七月二日、以二島内痢病大行一、令二三寺僧誦レ経祓レ之、

○八日、名代家老上妻小左衞門定直詣二于大會寺一、祭二先祖・宗祖及戦死之霊一、

○九日、自二八日一至二今日一、修二清孝院殿妙瑞日光大姉三十三回忌於本源寺一、家老種子島友右衞門時大代二久尚一進レ香、祖母夫人親詣而祭レ之、物奉行西村源左衞門時民代二母夫人及女兄一波津、用人種子島平藏時宜代二姑姉一久美、用人種子島郷兵衞時加代二女兄一計多各進レ香、法事奉行西村七郎時義・平山藤左衞門良友、霊膳奉行肥後渡前・牧平七、僧徒三十五人、

○同日、赦下池村五右衞門(衞寺入于某寺)・八ヶ代半助、海泊(ママ)之善吉(衞禁旅行)、安城村郷士鮫島喜與助・中宿士牧矢之助・足軽上妻平吉、東町之山下五後右衞門、現和村之吉太郎・源太郎・勘次郎(衞於安城村以斧断帆檣帯、當罰者)、安城村之四郎太・森助・伊十郎(與喜與助等、爲五人組者)、同村横目・庄官(上以不戒村人犯禁、當罰者)、是以レ修二清孝院夫人三十三回忌一也、

○同日、先レ是國上村足軽芝平助・芝伊太郎・榎本十市・松下新之助・八板仲吉・百姓善五郎・仲一等、夜中結レ黨入二同村源助者宅一、而喧嘩蹈藉、事大渉二不正一、同村横目以レ不レ戒二村人結レ黨逮坐、吉良市次郎・吉留貞右衞門・上西之百姓袈裟次郎亦有二小過一者也、此輩雖二各當レ罰而以下修二清孝院夫人三十三回忌一之故上各赦レ之、

○十三日、名代家老岩河十右衞門時令詣二于本源寺一、祭二先祖・宗祖及戦死之霊一、

○十四日、名代家老前田新五兵衞宗誠詣二于本源寺一、祭二宗祖一、

○十六日、名代家老種子島友右衞門時大詣二于本源寺一、祭二先祖及宗祖・戦死之霊一、

○二十一日、以二西村次郎兵衞・羽生仙藏一爲二物奉行一、羽生伊兵衞小姓兼二手習方一、

○廿六日、公儀流人喜助病死(上里村住居者)、聞二于官一、

○按二察切支丹一聞二于官一、如レ例、

○八月朔日、與二中紙各二束於慈遠寺・大會寺一、二寺獻二同品一、
○五日、以二西村七郎時義・平山佐次右衞門友直・種子島平藏時宜・種子島郷兵衞時加一爲二改革方掛一、
○十三日、　官流二善十於吾島一、信二一向宗一者也、
○十五日、罰二下西之表羽生善吉一寺二入于隆興寺一、以レ有二小過一也、
○同日、古田村蓮勝寺進上、如レ例、
○同日、　官郡奉行黒葛原源助・書役川田甚四郎等、因二祖母夫人請一、自二恵良部一来而量二吾島諸子瀬港口之濤勢難易地形廣狹一、以レ將レ築二波戸一矣、
○十八日、祖母夫人及女兄波津觀レ漁俗謂瀬引之、
○二十四日、以二河内市郎一爲二小姓一兼二手習方一、前庖人牧瀬新之助・秋山金太郎復二旧職一、嚮有レ罪褫二其職一者也、
○二十七日、罰二納殿牧半太郎・羽生勇太郎・下村權六・牧平次・宮浦半右衞門・遠藤早太一、禁錮百五十日、且令下之償中其負償上、以下嚮在二麑邸一而簿書所レ記不上レ正也、同僚河内助次以二其既死一、唯令三家人償二負債一耳也、
○同日、貶二納殿役人笹川九兵衞一爲二納戸奉行一免二船奉行一、坐丙平日不レ能レ矯二納殿等一、且使乙其至二簿書不甲レ正也、且罰二庖人小川平次・柁原兵藏・日高休助・上妻助之丞・牧瀬新七一、禁錮一年且収二其俸田一、以下嚮在二麑邸一而簿書所レ記不上レ正也、
○二十九日、締方横目伊勢矢太郎・附役關田万藏來、
○按二察一向宗一聞二于　官一、如レ例、
○九月二日、祖母夫人贐二塩鰒一斗・炭五苞・砂糖十五斤於黒葛原源助・河田甚四郎一、金子各二百疋於附役三人、小刀一口於源助僕一、以三皆歸二本府一也、
○八日、諸村以二穀不レ登減賦有レ差、
○同日、罰二船手筆吏池村孫七一寺二入于妙昌寺一三七日、以二簿書不レ正也、
○九日、令下用人知覧麑之丞行義讀中法章上、
○十二日、田布施之桶匠助次郎客二死于吾島一、乃告二訃於其家屬一、

○十五日、　前太守宰相公病将レ革、祖母夫人獻二禱符一、時祖母夫人在二種子島一、在レ邸家老急艤レ船告レ之、
○十六日、本源寺祈禱、名代家老岩河十右衛門時令、
○十七日、　宰相公薨、法諱金剛定院殿明覺亮忍大居士、仍停二音樂・殺生一三十日、工事十五日、漁獵七日、足軽以上停二剃額一三十日、至二陪臣・市人一皆不然、祖母夫人受レ忌廿日、服九十日、二姉受レ忌十日、服四十五日、以三吾未二七歳一無二忌及服一、在邸家老自二大泊一艤レ舟告二之祖母夫人及女兄波津於種子島一、
○十八日、祖母夫人及女兄波津首途、
○十九日、與二米二斗於三寺僧徒一、以下祖母夫人及女兄欲レ趣二本府一、因使丙之禱乙便風甲也、
○同日晡時、　宰相公病革之信至、祖母夫人益欲三急趣二麑府一、乃命、今夕中辨二理諸事一以艤レ船、
○二十一日、與二俸田十五石於納殿役人緒方善藏一、以下從二祖母夫人一役中于麑邸上也、
○二十二日、祖母夫人及女兄還二于麑邸一、
○同日、一向宗流人覺右衛門古田村住居者病死、告二之于官一、
○同日、遣二僧智恩院・最成院・教藏院・禱圓坊・要寛坊・泰源坊・宜須坊・貞了坊・春了坊一、會二　金剛定院殿之葬一、
○二十四日、與二米二斗於飛船船長清次郎及水工等一、賞下不レ逾二七日一而往中来于本府上也、
○二十五日、以二西村休八一再爲二用人一兼二塩濱方掛一、
○二十八日、以三納殿役人下村要志一爲二定府一、
○同日、田上休助始謁、献二火縄一、
○同日、赦二池村孫七一令レ出レ寺、
○二十九日、葬二　金剛定院殿於福昌寺一、以二吾島僧徒未レ到不レ能二會葬一、而久尚亦幼故不レ能二從行一、使下族人北條時昭一代二久尚一以臨中窀穸上、
○同日、罰二納殿鮫島直一郎一禁錮百五十日、且令之償二其負債一、坐下嚮在二麑邸一簿書所レ記不上レ正也、
○晦日、以二種子島平藏時宜一爲二寺社奉行一、西村城之介・美座半兵衛船奉行兼町奉行、野間静圓・牧瀬玄貞軍役方掛、

○罰二普請方下吏河野佐助一寺二入于日輪寺一四七日、坐簿書不レ正也、又責二訶檢者阿世知仲五郎一、以四平日不三矯二正下吏一也、

○唐物横目南郷覺太郎、締方横目池田仲左衛門・永山休兵衛、附役馬場新太郎任満而歸、

○十月二日、列二西村藏多家格于世世役人組一、命爲二物奉行一、且兼改革方掛及平山村新田塩濱方掛、曩日藏多爲二慈詮公之近習一勤労多年、今般祖母夫人所レ創平山村決河及塩濱亦與有力焉、故有二此命一、

○六日、家老上妻小左衛門定直・物奉行森休兵衛友習爲二塩濱方掛一、物奉行西村次郎兵衛時知母夫人内用方掛、

○同日、與二米三斛於濱津脇之仁吉一、以下當レ造二米倉一獻中其宅地上也、

○同日、　官自二今日一至二十日一修二　金剛定院殿之中陰一、以二吾島僧徒未レ到、使下正建寺代レ之誦中野諷経・座諷経上、至二九日一獻二祭文一、藩士伊知地小十郎（季安）製レ之、記二于左一、

○　一五　種子島久尚代北条時昭祭文

安政六年九月念九日送葬、

老君金剛定院殿故三位宰相守薩隅日兼領琉球國明覺亮忍源公於本府福昌禪寺、時種子島主臣平久尚年尚幼童不能從行親臨窀穸、又方中陰不得趨祭、是以族人臣北條時昭不堪痛慕、代候其席、使島僧本源寺謹以清酌之奠恭陪法筵、敬祭于　源公之靈、其辞曰、

嗟公性靈　自備於身　惟誠敬先　惟明崇神
日隆其徳　月輝其仁　恵霑封域　恩被國民
高官顯爵　承寵紫宸　方　公捐館　涕皆霑巾

嗚呼哀哉

迨尊輀去　雖欲從行　惟幼惟哭　叵陪葬場
臣也承託　代登寺堂　候中陰日　洩哀鄙章
使島寺僧　陪筵上香　恭陳薄奠　虔薦靈牀

嗚呼哀哉尚享

○九日、名代家老岩河十右衛門時令詣二于本源寺一盛二菓子一、

○同日、罰二普請方下吏榎本喜齋一寺二入于妙泉寺一一七日、以二簿書不正一也、

○十日、下中村之平太郎・平山村之善四郎、爲二祖母夫人輿丁一而能稱レ職、且有レ労二于藥園之灌培一矣、故一世免二其課役一、

○十一日・十三日、名代家老岩河十右衞門時令詣二于本源寺一祭二宗祖日蓮一、

○十五日、以二遠藤健太郎一爲二納殿役人一、

○十九日、以二年不レ登減二山野租額一、

○二十二日、僧等歸、嚮以葬　金剛定院殿雖レ遣レ之、風潮不レ便、期過而到、故不レ能二會葬一而歸、

○十一月十六日、祖母夫人憂下虎狼痢大行中於島内上、與レ藥以令レ治レ之、記二于左一、

○　一六　松寿院内意書

ふらすこ　壱ツ
キナエン入

右者、先達而より流行之病氣ニ妙藥之由、右ニ付、此節御隱居様より御下ニ相成候間、申請ニ相成候様掛向江御渡被成度、何時ニ而茂申請不仰付候而不叶事御座候故、夜中ニ而茂申請相済候處江御下置被成候様可申越旨御沙汰御座候、入物も當時御拂底ニ而、壱ツニ御入付御下しニ相成候間、其御許醫師之面々持合茂有之候ハヽ、数々ニ御入付、田舍江茂御遣置被成度、代料之儀者御隱居様より御施ニ被仰付候間、上納ニ不及旨致承知候、委細之儀者、羽生平左衞門より申出候様申付置候、以上、

未十一月十六日

御役所

○二十日、令下池田浦太助納中罰錢五百文上、以下遣二却政府之要書一而趣中于本府上也、

○按察一向宗聞二于　官一、如レ例、

○十二月二日・三日、於本源寺修二慈詮公之七年忌一、名代家老前田新五兵衞宗誠、祖母夫人名代物奉行西村九郎時起、母夫人名代物奉行時任丈左衞門時喜、

二女兄波津多計名代用人西村七郎時義、法事奉行平山佐次右衛門友直・西村十郎次時義、靈膳奉行平山一右衛門・種子島十郎左衛門、僧三十五人、

○同日、赦二納殿牧半太郎・羽生勇太郎・下村權六・牧平次・宮浦半右衛門・遠藤早太・鮫島直一郎一嚮禁錮之者、以レ修二慈詮公之七回忌一也、

○五日、島間村漁人十太郎、嚮有レ罪流二沖永良部一、頃日以下　又次郎君重富公子立爲中　太守公上赦之而歸島、

○十三日、上妻源左衛門獻二斗搗之餅一、如レ例、

○二十一日、罰二上中村足軽河野清作一、手鎖而下二之於種子島一、坐下在二魔邸一竊盜二山口周八副刀一而鬻中之古金屋上也、

○二十六日、姑姉久美羅レ産卒、邸中禁レ樂五十日、吾以レ未二七歳一遠慮一日、祖母夫人受レ忌十日、二女兄波津多計二十日、濱亭納殿等停二剃額一十日、又除二魔邸正月之規式一、

○二十七日、三寺及鍛冶・二十人家進上、如レ例、

○二十八日、江豚二頭漂二到庄司浦一、乃遣二物奉行署筆吏西村九左衛門一召二村人一令レ斫レ之、

○二十九日、　官使使番弔姑姉久美之喪於祖母夫人、

○同日、與二俸田一石所於庖丁林次右衛門一、賞丙平日能勤二其職一且當下祖母夫人奔中　金剛定院殿之喪上命急役不乙敢辞甲レ之也、

○歳暮之規式、如レ例、

（表紙）

萬延元年　種子島家譜　廿五代　久尚　七十六

○萬延元年庚申正月元日、國上村獻二野老一、
○二日、國上村獻二介族一、現和村庄司浦獻レ饅、
○同日、覧レ馬、家老美座十郎右衛門時敏代レ吾、馬監河内勘十郎、
○同日、八寺獻上如レ例、家老美坐十郎右衛門時敏代レ吾、
○四日、上之郡庄官・小觸獻上、如レ例、
○同日、　官命レ嚴二邊備一、以下近年洋夷伺上レ釁也、
○六日、初狩、組頭平山藤左衛門良友・西村十郎次時義・知覽覺之丞行義、山奉行東嘉助・前田平八・羽生彦八郎・日高平次・八板藤兵衛、夕狩場、家老種子島友右衛門時大代レ吾、物奉行時任丈左衛門時喜・用人日高源右衛門為徳、西之表庄官獻上、如レ例、
○七日、中之郡・下之郡庄官獻上、如レ例、
○十日、與二金百疋于故八箇代半助妻一、先レ是虎狼痢大行、多二轉染而死者一矣、半助在二下之郡一而患レ之、人皆避而不レ視焉、其妻扶持不レ懈、無レ幾而死、亦晝夜護二其屍一而葬レ之、故賞レ之、
○十一日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、
○同日、甲冑之賀、如レ例、
○同日、在郷諸寺獻上如レ例、家老種子島友右衛門時大代レ吾、
○同日、的始、家老岩河十右衛門時令代レ吾、用人西村十郎次時義、射手一番（美座清助・河内市郎）・二番（上妻半助・國上亀太郎）・三番（鮫島甚五郎・八板多平太）、
○同日、軍陣・温坐祈念、如レ例、

○同日、嚮修慈詮院公七回忌、因多所赦、故船匠休六亦在赦中、有司奏曰、先是休六以破禁私獵被罪、而近日復潛入土人某等獵場而攘其獲、既至発覺而多出遁辞、将自免焉、言大渉不遜、況平日好弓銃博賭、不供其職、其僚悪之、其所為多此類也、於是近日復貶放于西之村上瀬田、故獨至休六則臣等不敢奉命、

○同日、以萩永村足輕馬場藤蔵為一世郷士、以下多年僕于母夫人能服其勞也、

○十五日、祖母夫人患近来鹿豕蕃衍大傷稼穡、下命曰、夫竊為田獵也雖累代之所禁、所害於民者亦不可不除也矣、況今公尚幼未堪逐驅當其間、則宜下人人縱為田獵以攘鹿豕、山奉行奏曰、國上・安城・古田・納官四山則古来稱為鹿倉、公初按部之日、大狩於安城、謂之小立、如國上則以鹿肉供牲以祭山靈、舊典不可廃、故不可不禁焉、祖母夫人不聽曰、雖小立不獲鹿不損於舊典、如祀山靈則豫買鹿肉以供之可矣、於是下令于島中、遍知祖母夫人之意、以許人人縱田獵、

○十五日、以前田新五兵衛宗誠為軍役方掛、

○十六日、官命停樂三日、以幕府大吏大久保加賀守卒也、

○廿一日、以渡邊勘右衛門・西村城之助・美坐平兵衛・野間源十郎并為組頭、下村佐一郎為高奉行、命馬役緒方吉兵衛與聞改革方之事、

○廿七日、先是長野善之進為普請方下吏也、頃日檢其簿書、所記大渉不正、故罰之為小普請入、

○點檢丁夫・病夫・有職者聞之官、如例、

○奉升形守衛之命、

○二月四日、慈遠寺御坊累代墓石、文字漫滅不能辨某墓、則為某公之墓者數基、唯口碑傳某公某公之墓在於此耳、祖母夫人恐其逾久而逾失其眞、於是文字粗存與口碑所傳、則採之、其餘邈乎不可知據者、則令本源寺日因司監掣籤於墓前、採其籤所中而稱為某公之墓、又命記録所作塋域之圖而藏焉、今撮其略以記于

左、所籤卜者、則加圈於諡下以分之、

○　一七　慈遠寺御坊塋域之次第

御坊塋域之次第

東

受封院殿日開大居士　初代信基公

温良院殿日恭大居士　二代信式公

泰山院殿日仰大居士　三代信真公　一番

天遊久長大禪（ママ）定門　四代真時公

四公不知葬處、萬延二年辛酉四月、創立石一基合祀之、

道圓大禪定門　二番

五代時基公、文和元年壬辰正月廿九日、

妙圓大禪定尼○　三番

時基公之室、九月三日薨、不記年、

春林時榮大禪定門　四番

六代時充公、慈遠寺舊記云、應永二乙亥不記月廿八日薨、葬于慈遠寺、奉木主祖師堂、

妙本大禪定尼○　五番

時充公之室、應永十九年壬辰六月廿六日、

清運大禪定門　六番

七代頼時公、貞治五年丙午四月十六日、肥州日岡之戰殉難、

世尊院殿日恕大居士　七番

十六代久時公、慶長十六年辛亥十二月廿七日、

妙宥大禪定尼　八番

頼時公之室、應安六年癸丑七月八日、

松林崇藤大禪定尼○　九番

清時公之室、慈遠寺過去帳以三月十四日為忌日、

法性院殿日勝大居士　十番

十四代時堯公、天正七年己卯十月二日、

妙持大禪定尼○　十一番

幡時公之室、享徳元年四月十四日、

隆尊大姉○　十二番

惠時公之室、天文元（ママ）年己酉九月廿九日、

貞心院殿妙悟大姉○　十三番

十六代久時公之側室、元和九年癸丑(ママ)九月十九日、

照圓大姉○　十四番

清時公之女公子、為尼創妙法寺、應永三十二年正月十七日、

本隆院日惠大律師○　十五番

清時公第六公子、歸釈住持於慈遠寺、自律宗入法華宗、明應二年癸丑十一月十五日寂、

叙性院殿日莖大居士　十六番

久基公第四公子、佐平太時純公、享保十五年庚戌八月二日、

閑詮院殿妙真日淨大姉　十七番

久基公第二女公子(於麻佐君)、寛延三年庚午三月十二日、

寶光院殿一心崇有日輪大居士　十八番

二代信式公第六公子、左近信時公之裔、貞和二年丙戌三月十八日、

西

○七日、　官許レ築二波戸一、實祖母夫人請レ之也、吾種島孤二立南海一、風潮險悪暗礁羅列、無下好港可三以便二(歟)渇泊一者上、官船航二琉球及諸州一者、雖二洋中遇レ颶不レ得三来維以免二於難一焉、吾厨船亦頻頻破壊、貨物耗損不レ可二勝計一、古来雖レ知下築二波戸一之為上レ利、而費用許多、非下吾府庫財力得而所上レ辨也、祖母夫人患レ之有レ年矣、至レ是陳二公私之便一、以請　官築二波戸於諸子瀬港口一且賜二傭直一、周旋懇到　官遂許レ之、於レ是乎、祖母夫人念下藩之地方検者練二於吏務一而足二以托レ事者上、野元三之助盛敏其人也、乃復請二于官一使下盛敏一為中之總裁上、盛敏奉レ命、近日将三従事二於此一、先贈二書於種子島政府一、使下諸司一知上レ之、且禱二成功島中神祇一焉、以二家老前田新五兵衛宗誠・物奉行西村蔵多時措一為二波戸築方掛一、亦為三祖母夫人所二識拔一也、事記二于左一、

覺

○　一八　鹿児島役所覚

波戸築方付、金千弐百両、一ヶ年ニ三百両ツヽ、四ヶ年ニ御拝領と申處、御都合成立、来十一日御下金相成申候、就而者、爰許よりも功者成地方検者又者功者成夫御傭下ニ可相成候間、折角手抜無之様下地有之候様可申越旨被仰出候、

一右御普請ニ付而者、帳面取扱いたし候者者、利分有之様ニいたし候様有之者之由候得共、此節之儀者、左様之儀共無之様、折角明白ニ可取計、自後以迷惑ニ不相成候様、御心附可被仰付候間、此段も申渡置候候様(衍カ)と之　御沙汰ニ而候、

一御先祖様、
　但　御坊御廟所者勿論、

一御伊勢様、

一蒲田大明神様、

一住吉大明神様、

一真所八幡様、

一寶満様、

一御崎様、

一熊野權現様、

一三ヶ寺、

一岩立水神様、

一蜑泊大野山様、

一諸子瀬神様、

　此處ニ而者、大龍王・水神・山神・海神・火神・風神、

一若宮様、

右、此節波戸築方御打立ニ付而者、山野海川ニ至迄、障をなし候儀ニ候得共、右之御神々御尊慮ニ不叶儀も有之候半、就而者、御用人より　御隠居様御代参ニ而、此節之普請ニ付而者、定而御尊慮ニ不被叶儀茂可有之候得共、専ら國益之一筋を相考、後世之為ニ仕置度、深思慮を以打立申事候間、宜敷御推免被下、用夫其外一統災難無之様御守被下候様との趣を以、御願申上置候様可申越旨、承知いたし候、猶又蜑泊大野宮様近邊茂右抔御取可被成事ニ候得者、此神様江者、右形行委細可申上置候、左候而、御礼ニ

者、成就之上社堂御作替御上可被遊との御沙汰ニ御座候故、此段も申上置候様、御用人江申渡可被成候、諸子瀬邊江も、定而水神様被為居候半、就而者、右場所江者出家より差越、御祓等茂いたし、前文之趣を以御願可申上候、猶又上様方御息災延命且御武運長久・國家安全・五穀成就等之儀迄も、御守被下候様可奉祈旨申渡、御代参之御用人江茂同断申渡被成候様掛合いたし候様　御沙汰御座候、

一若宮様御事、當時者妙泉寺江被為居事候得共、箱崎之邊江御縁被為在神様之由候間、白石之邊なと、又者大野山様御同居欤、其外何方ニ而茂御直り被遊度場所茂被為在間敷哉、御籤御取らせ被成候而、何方御望之事候哉、御望之場所江降福權現様御振合を以、御取立被成候様可申越旨致承知候、

一御代参之節者、御願文相調差上置候方可被宜　御沙汰御座候故、其外宜取計候様御申渡被成度、尤旨趣者矢張前文同断之事御座候、

右条々御掛合申越候、以上、

二月十日　　鹿児島御役所

○十一日、官賜二金于祖母夫人一、事記二于左一、

○　一九　川上久美達書

金千弐百両

但當申之年より来ル亥之年迄四ヶ年ニ相掛、三百両宛、當年分之儀者、此涯御下渡、来年より者年末ニ御下金相成候様被仰付候、

右者、種子島之儀船掛之場所不宜候付、波戸築立方之儀、松壽院殿御存付ニ而、早々評儀為相成由候得共、蔵方御繰合ニ而其儀不相調、御同人より御内願之趣有之、無余儀御訳合之事候付、別段之訳を以、骨粉會所風袋方御余計金之内より本行之金高、但書之通ニ而、年々御内々より被成進候様、此旨種子島靏袚裟親類江申渡、金子之儀者御趣法掛より可相渡候、

二月　　（川上久美）式部

○十三日、使丙在邸諸司一賀乙　官賜二金于祖母夫人一即資甲レ築中波戸上也、

○十七日、以三遠藤健太郎・吉良太郎一為二波戸築方検者一、

○十八日、下西之表鋸工權蔵・休之進有二不正之事一、籍二収其俸田一、且褫二鋸工之職一、

○二十一日、先レ是東市人篠河源左衞門流二寓鹿子島一、至レ是命三歸而治二其産業一、且禁二旅行一、實其兄元右衞門請二之于政府一也、

○二十三日、與二米于納官村一、先レ是造二米倉于濱津脇一也、屢累二村吏及庶人一、故及、

○二十五日、急使自二安城村一至、報下夷舶一隻抵二立山屋栖洋下一レ碇、夷人可二二十輩一駕二脚船一艘一上上レ岸、及遣二軍役方組頭西村休八時乗・平山藤左衞門良友、兵具奉行種子島十郎左衞門、船奉行上妻源左衞門、船功者楢原孫之助、其餘諸士三十人、視二其動静一、且以備二不虞一、時舶中有二清客一、頗善二筆語一、曰、船主為二英吉利人一、同舟者二十名、為二英吉利紅毛・阿非加・南京上海縣人一、昨十六日発二上海縣一、将下之二日本横濱一驛中其所載上、會風潮不レ便、故来以碇泊、薪水菜蔬無レ所レ乏、唯賜二甘藷一則幸甚矣、乃與以二甘藷一、嬉々萃食、亦以二其所レ携牛酪一烹二獸肉一而食レ之、其夜露二臥于屋栖郊一、翌十七日張レ帆東去、頃刻不レ見、後數日使下組頭西村七郎時義一聞中状于　官上、

○二十六日、魔人塩田徳太郎・森元平左衞門帰、

○訶二責僧智遠院・最成院・大源坊・智寛坊・教存坊・貞了院・要寛坊・宜順坊・壽圓坊・春了坊一、嚮　宰相公薨之日、遣二智遠院等一班二列祭儀一、及三船泊二山川一、不三直陸行赴二本府一而遲緩留滞、遂後二于祭期一、其罪雖レ重然以二國忌未レ除之故一宥レ之從レ輕、

○納二三狩所レ獲之鹿皮于　官一、

○按二察一向宗一白二于　官一、如レ例、

○三月朔日、以二白男川隆次郎一為二小姓兼祐筆見習一、

○同日、與二米四石于見聞役西村七郎時義、五石七斗于近習下村佐一郎、四石一斗・錢六貫文于小姓河内一郎一、以三今春各祗二役魔邸一也、

○三日、令三種子島三七時習一讀二法令書一、
○同日、與二艾餅于三寺一、慈遠寺献二同品一、
○同日、瀬引之賀、西之表庄官献レ物、如レ例、
○五日、以二中村小平太・安藤桑之丞一為二波戸築方筆吏一、濵田喜八・濵田勘兵衛・井元彌吉為二夫仕役一、實祖母夫人識二拔之一也、
○六日、中西之表一世足輕岩重彦七為二世世足輕一、賞下自レ創二製糖一至レ今與二其事一而有上レ功也、下西之表故甘蔗見舞牧瀬善五右衛門免二其伐明畑之租一、賞下嘗能供二其職一不上レ怠也、
○十日、與二金五百疋于遠藤壮兵衛、二百疋于日高杉右衛門、三百疋于羽生十太郎一、先レ是使下麑之石工等一修中上中之村新井手堰上也、壮兵衛等多事周旋、監視不レ怠、遂能濟レ功故賞レ之、亦屢累二下中之村人一、因與以二米三石一焉、
○十一日、坂井村足輕橋口五作宅失火、不レ燒二宗門手札一、
○同日、責二訶安政四年癸巳(ママ)麑邸普請方筆吏八板藤八一、以三其簿書所レ記渉二不正一也、
○十三日、　官捕二吾平山村百姓清吉一、繫二于下町會所一、
○十五日、先レ是令下銕匠柳田直助・阿世知市蔵・平瀬新助・平瀬新太郎一擬二阿墨利伽人所レ贈之六眼鳥銃一而造上レ之、及レ成辞二其工價銀一、而制作亦精工可レ觀矣、故賞以二金一圓二方一、
○十五日、以二知覧麑之丞行義・上妻九郎左衛門宗富一為二軍役方掛一、平山寛蔵為二船奉行一、
○十六日、以二岩河作左衛門・牧平七一為二學校所講談役一、
○十七日、與二俸田二斗二升所于圉人下西之表榎本太平次一、賞下嚮夷舶泊二安城洋一之日、先レ衆至二吏署一辨中達庶務上也、
○十九日、以二西村休八時乗一為二物奉行見習一、塩濵方掛如レ故、
○同日、　幕府教書到、曰、本月三日改二元萬延一、
○二十一日、三役覧二武技於廣間之庭一、諸流師家皆造

焉、

○二十四日、以柳田齋榮為奥醫師、

○同日、先是族人北條織部死、至是使其嗣子十左衛門與聞吾家政、

○同日、三役覽射儀於内城射埒、緒方助右衛門雙箭命中矢、賞以鷲翎、

○二十五日、在邸諸司自大泊僦舟遣足輕山口周太齎簡来告曰、昨二十三日急使自江戸至告、本月三日　幕府大老彦根侯井伊掃部頭将登　營儀衛過櫻田門前、有賊突起、戕侯於輿中、取其髑骨而逃、賊凡十七名、中二名為薩人、其餘為水府浪士、江戸擾乱、薩府亦戒嚴、太守公将覲　幕府、本月十三日発鹿子島、昨至筑後松崎驛、遽稱病而帰、報至之夕、町田式部為宿直、急奉命赴江戸、不及省家而上途、其餘東上者絡繹相継、輿論紛紛、人心危懼、兵機既動吾種島亦宜繕修器械、以備不虞、且自今春以往、表詰常員之外使郷士二人更番役邸云（謂之守衛方）、

○二十六日、祖母夫人賜金十両于故濱崎納殿役人河東祐兵衛、賞能奉其職也、

○二十七日、　官令、頃日　将點検船員、如種子島則令締方横目司之、一従舊規、

○二十八日、與米五石于柳田齋榮、賞學醫于京五年而善其業也、

○二十九日、褒詞濱津脇之常吉、以獻金十圓也、

○懸官下命、物色亡人伊三郎者索之、

○四月三日、以家老上妻小左衛門定直為改革方掛、

○同日、唐物方横目南郷覺太郎・附役深見七之丞来、

○同日、本藩地方検者野元三之助盛敏来、石工及役丁十餘人従、為以築波戸也、

○十一日、唐物方横目伊勢矢太郎・締方横目入佐五次右衛門・附役關口伴蔵帰于覺府、

○同日、　官下令禁商唐貨、且示糸荷船漂来之日處置之法、

○十五日、嚮祖母夫人就　官請鬻塩于屋久島、官令屋久島奉行決其可否、至是　官許之、且

示下屋久島奉行所レ上二于　官二之書上、挿二入于左一、

○　二〇　屋久島奉行届書

本文調被仰渡承知仕候、種子島之儀、産物塩出來増、地方表江被差廻候而者失脚被相重候付、屋久島之儀者先年より抜木相取企有之、別而御取締被仰渡所故、互ニ通船差留被置候得者、松壽院殿取計ニ付、別段之御取訳茂御座候ハヽ、種子島之儀、先年より由緒有之、依願米八石積船壱艘ツヽ、年々取仕立屋久島江諸木申請、島許届免許御座候ニ付、右船荷輕ニ而出帆之由相聞得申候間、別段船取仕立無之、便船を以塩積入、上乗役々宰領、種子島詰見聞役送状を以被差遣、着到之上、手形所江届申出、左候而、在島より村役人江相場を以配當申付取計申候ハヽ、何そ差支之儀無御座候、本八斛米船尤島元到着ニ付而も、船中人数陸下等茂無之様、別而嚴敷御取締被仰渡置候間、右之通於被仰付而者、不締之廉有御座間敷、於其儀者、願年数被相減、為御試三ヶ年程も御免被仰付方ニ而も可有御座哉与吟味仕申候、御沙汰次第御座候、此段申上候、以上、

申四月十五日　　屋久島奉行

○二十日、以二馬役美坐矢太右衛門・知覧友次郎一為二牛馬皮方掛一、

○二十七日、先レ是稲木覺兵衛等負二債於府庫一、至レ是事露、罰レ之有レ差、覺兵衛米二百二十九斛五斗六升六合、除二其士籍一貶為二西之村足輕一、収二宅地及伐明畑・杉木場・櫨木場一、西村哲衛米九十八石四斗三升四合・錢七十二文、貶為二下中之村一世郷士一、収二杉木場・櫨木場一、羽生清賀米七十八石・錢四十四文、貶為二下中之村一世郷士一、収二杉木場・櫨木場・伐明畑一、以各使レ償レ之而免二其不足一、此輩雖二處可レ以レ法、祖母夫人有レ所レ思、以二特恩一宥レ之、其罰従レ輕、

○同日、放二徳永小矢太于西之村一五年、上妻市助・川野休庵于二下中之村一各四年、大山小太郎・上妻源兵衛・上妻良齋于二莖永村一、羽生才之丞・牧平次于二上

中之村一各二年、有留孫八・上妻惣之丞于二島間村一各三年、山崎半太・山崎林右衛門于二増田村一各一年、先レ是此輩負二債于府庫一、雖下頃日漸償上レ之、然原三其情一頗有下渉二不正一者上、雖レ宜二處以二嚴法一、然祖母夫人有レ所レ思、以二特恩一宥レ之、其罰従レ輕、

○官下レ令、禁レ上二匿名書一、

○官以二吾醫柳田意哉一為二郡山郷士一而為二祖母夫人侍醫一、

○按二察一向宗一告二于　官一、如レ例、

○五月五日、與二粽于三寺一、慈遠寺獻二同品一、

○九日、褒二詞羽生伊兵衛一、以下継二其祖業一習中禮于伊勢氏上也、

○十日、油久村百姓傳七・十太、野間村小吉・甚吉、坂井村四郎太・岩助・市蔵、莖永村兵太郎・蔵市・休六、下中之村岩吉各科仕五七日、油久村常次郎、平山村太市・源作・太郎次・貞吉・仙五郎・勘太郎、坂井村三吉・勘太郎、莖永村喜三次・仙吉、上中之村伴四郎・甚吉各四七日、増田村甚吉三七日、貞市・新次、野間村喜之次・平四郎・喜作・源助・紋太郎・甚吉、油久村小太郎・一太郎・徳之丞各三七日、平山村善之助、坂井村徳次郎・淺次郎・伊三次、莖永村新六・喜三次・權四郎・茂三次・甚十郎・孫吉・喜助・新助・甚五郎、下中之村甚助・仁助・庄太郎・休助、西之村五作・八百次・宗助各三七日、野間村勘太郎・勘吉・喜市・四郎次・勘七・宗助・繁右衛門・太助、坂井村覺助、莖永村長左衛門・半太郎・嘉助・平市・仙次郎・休助・十助・兵左衛門、上中之村友吉・平助・稲吉・龍吉各七日、油久村番僧壽圓坊納二罰錢五貫文、妙久寺僧玉成罰錢三百文一、以三破レ禁而為二博奕一也、原レ情定レ罪、故罰各有レ差、

○同日、野間村百姓安次郎・才之進有レ罪下二于獄一各百日、以下破レ禁而為二博奕一、且安次郎借二才之進之金一而不レ還、才之進怒責レ之、讒詈交発相毆擊上也、

○同日、野間村百姓惣助・四郎太各納二罰錢八貫文一、以下使博奕之徒一借二己之金一而収中其息上也、坂井村百姓市之進之孀婦并上里村番僧壽泉坊各納二罰錢五百

文、亦以レ令レ為下博奕於其宅與中其寺中上也、
○同日、流人金兵衛・彌吉各科仕五七日、以下身不レ省レ為二流人一恣為中博奕上也、
○同日、坂井村故横目河内六郎左衛門寺二入于善福寺一、以下禁二博奕一之令不上レ嚴也、
○二十七日、上中之村足輕河野清作科仕一七日、以下先レ是役二于魔邸一之日、竊借二山口周太副刀一而質二之市肆一而借レ錢為中博奕上也、安納村土民周吉科仕二七日、亦以下役二于魔邸一之日為中博奕上也、
○按二察一向宗一告二于　官一、如レ例、
○罰二莖永村横目日高休右衛門・古市五次兵衛・日高九助・日高長蔵一令レ寺二入于善林寺一、西之村横目濱田藤太郎・濱田桐助・名越覺左衛門・名越宗四郎、下中之村横目鮫島七左衛門・遠藤仁兵衛・河野甚助于二本妙寺一、平山村横目鮫島十左衛門・徳永善太郎・山口七左衛門・羽生十兵衛于二遠妙寺一、坂井村横目古市谷右衛門・古市半助・柳田清五郎于二善福寺一、野間村横目日高周右衛門・鎌田甚兵衛・日高善五右衛門・馬場嘉左衛門于二妙昌寺一、油久村横目羽生金兵衛・下村新四郎于二日輪寺一、増田村横目馬場嘉助・同彦太郎・牧瀬十太郎于二某寺一各七日、以下禁二博奕一之令不上レ嚴也、爵之有前後、故赦之亦有前後、
○與錢三貫三十五文・米一斛七斗・篠巻十五把于故納殿役人、
○六月三日、坂井村足輕古市周之進縊死、締方横目逸姓名及吾横目上妻直蔵定理・渡邊早右衛門兼重往檢レ之、乃召二家族隣保一問二其状一、皆云、渠平日患レ癲近来病甚、故鬱悶而自決レ死者乎、乃聞二状于　官一、
○五日、責二訶莖永村庄官古市三之丞・横目日高長蔵・日高九助・日高休右衛門・古市五次兵衛一各褫二其職一、令下屏居待上レ罪、先レ是有下百姓數輩不レ納レ租者上三之丞等奏其家籍已絶莫下復所上レ可二督責一、請レ免レ之、既而糺レ之、皆有二兄弟或族人者一也、故及焉、
○同日、赦二西之村横目濱田藤太郎、坂井村横目古市八百右衛門、油久村横目下村悦左衛門・日高喜兵衛、

莖永村横目日高九助・日高長蔵一、令レ出レ寺、
○二十三日、莖永村古市三之丞・日高長蔵寺二入于善福寺一、日高休右衛門・古市五次兵衛・日高九助于二本善寺一各七日、罪状詳二于本月五日一、
○同日、使下莖永村郷士小川與五郎之族人權助・百姓甚吉之兄新六・多三次之兄太吉・善五右衛門之弟權次・甚七之甥甚太郎一各納中罰炭五表上、當二與五郎等死一、此輩陰管二其田一而不レ輸二租于府庫一、故罰レ之、
○晦日、夏越之賀、西之表庄官獻上、如レ例、
○七月二日、蠟燈方下吏羽生清賀寺二入于妙昌寺一七日、普請方下吏河野休庵于二日輪寺一四七日、島間村蠟燈方下吏牧平次于二妙昌寺一一七日、各下以簿書所レ記渉中不正上也、
○七日、拜二勇猛公之鎧一、如レ例、
○八日、家老上妻小左衛門定直詣二大會寺一、祭二先祖及宗祖・戰死之靈一、
○十日、下二僧知教坊・慶成坊于獄一百日、以レ毆二擊慈遠寺僧貞山一也、
○十三日、家老岩河十右衛門時令詣二慈遠寺一、祭二先祖及戰死之靈一、
○十四日、家老種子島友右衛門時大詣二本源寺一、祭二宗祖一、
○十六日、家老失姓名詣二本源寺一、祭二先祖及戰死之靈一、
○二十一日、　官流二十左衛門于吾島一、乃配二之西之村一、使下横目一監上レ之、
○二十四日、壽光院君凶計到、服忌記二于左一、

○　二一　川上久運申渡書

松壽院殿

右者、壽光院様御死去付、御姉之御續柄二而忌廿日・服九十日被相受筈候得共、忌日相過候付、一日遠慮、右可申渡候、

七月廿四日　　（川上久運）但馬

○　二二　川上久運申渡書

種子島鶴袈裟

右者、壽光院様御卒去付、父方御甥姪御續柄ニ而忌廿日・服九十日被相受筈候處、父他家養子ニ而半減之忌服被相受筈候得共、忌日相過候付、一日遠慮可申渡候、

七月廿四日　　（川上久運）但馬

○二十六日、以二種子島三七時習一為二記録方掛一、美坐三十郎時資為二定府側用人一、

○八月朔日、慈遠寺・大會寺各獻二中紙一、與二同品于二寺一、

○五日、政府遣二書魔邸一議曰、當二放光公之時一、定府側用人賜二俸田十五石一、又時時有レ所レ給以資二旅費一、如二慈詮公之時一則俸田十五石・俸米十二斛歳為二定額一、方今物價高騰、宜下参酌以議上レ之、答書云、從二慈詮公舊規一可矣、

○八日、牧二馬于中之郡・下之郡一、家老種子島友右衛門時大赴焉、

○十五日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、

○十八日、平山村・莖永村以二稲不レ登請一レ減レ租、政府相議、遣二物奉行・高奉行一検レ之、

○同日、藩士山田市郎左衛門之妻山田氏（宇多）死、先レ是其夫市郎左衛門有レ故官賜レ死、為流二其妻山田氏（宇多）于吾島一、有レ所レ諱、陽以レ求レ婚為レ名、祖母夫人愍下山田氏（宇多）之志操貞正而罪非中其罪上、使下市人柳田休五郎第二子休助一母中事之上、至レ是而死、乃命二休助一稱為二其嗣一、厚葬二之雲之城一、與二休助一以二其舊住宅地一、以為二喪主一、

○二十一日、先レ是祐筆市来喜兵衛攘二武庫所レ蔵刀及諸品一以鬻レ之、至レ是事露、在邸諸司告二之種子島政府一、原文記二于左一、

○　二三　鹿児島役所達書

先達而より、

御先君様御持下り御諸道具并御腰物類御改、御帳御改相成、押川乙五郎殿・本田弥右衛門殿・池田三十郎殿御頼入ニ而御改相成、御道具之分者相済、翌十

七日より御腰物御調之筈候處、市来喜兵衛不審之廉有之、御側御用人美座三十郎より内々相糺候處、御腰物・諸道具盗取、古金賣之武右衛門・石原岩次郎方江相渡金子かり入候段白状いたし候段、三十郎承り届、當座江申出候、依而盗取候品々受返し、今日中差出候ハ、、内々ニ而相済候様可取計、何方江何品々々差遣申居候哉申出候様、三十郎より申付候處、石原方江者何品々、武右衛門江者何品々と申出候、然共、別ニ相隠居候品茂有之候半、萬一切腹又者欠落共いたし候而者御手抜可相成、依而召捕、番人相附置、相糺候方可然吟味いたし

御前江御伺申上候處、其議一先見合呉候様　御沙汰ニ付、不得已親類預り申渡、早速より御腰物取調方いたし候處、　御傳來之御腰物并御持下り之御腰物盗取候分、別紙之通引抜候と相見得、見覚有之候御腰物御帳ニ不相見得、御持下り御腰物御帳ニ茂隠岐守様江御遺物被遊、又者美濃守様江被進候抔、朱書朱消いたし候所有之、墨消之所も有之、根帳右様扱候儀ニ付而者、重畳不届之至ニ候、御披露等も取究難申上、心配此事御座候、左候而、織衛様・加次右衛門様・城左衛門様ニ茂御出會被下、城左衛門様ょり上廻方衆江御訴ニ相成、十八日七ッ後、即御口問等有之段致承知候、何分ニ茂前条之通、御腰物御拵書根帳不正、氣之毒之至御座候、依而御傳來之御腰物帳書写別冊差下申候間、

御先祖様御側江相勤候者抔、宮浦藤九郎・平山藤助其外　御先君様御側江相勤候者相覚居候人茂有之間敷哉、御腰物帳写為御見被成、覺之形行申出候様被仰渡度、左候而委敷相覚居候様なる人茂御座候ハ、、早々出府被仰付度、尚又御腰物帳写居候人茂有之間敷哉、是又手廣御穿鑿有之度、将又本源寺江　御奉納ニ相成居候御腰物此元御帳留分り兼候處茂有之候間、御拵書委敷御書寫、早便より御上せ有之度、最早御口問之事ニ而、折角早目御しらへ之形行、且委敷者茂御座候ハ、、一日茂早く出府無之而者、是迄御傳來之御腰物類此節迄相失候儀、誠ニ以奉恐入居

候間、返す〳〵早目之處御取計有之度存申候、此旨
御掛合申達候、以上、
八月二十八日　　鹿児島
御役所

○十九日、一向宗流人正右衛門死、横目知覽覽之丞行義・日高源右衛門為徳検レ之、告二于　官一、

○二十八日、赦二庖丁小川平次・梶原兵蔵・日高休助・上妻助之丞・牧瀬新七先是有罪、而被禁錮、

○官下レ命磔二上中之村土民金六者之女餘支一、事記二于左一、

○　二四　島津久福申渡書

種子島上中之村浮免
百姓
金六娘
よし

右者、獨身者ニ而、種子島靏袈裟足輕下中之村居住岩坪惣五郎弟岩坪惣次郎呼入、多年夫婦之會釈いたし居候處、不埒者ニ而度〻申争、不法之儀有之、村中妨ニ相成候ニ付、惣次郎儀者本村江引取候様、よしニ者先年脇方江縁與いたし居候節出生之子共方江差越候様、所役共より申付候處、右よしより所役共江申含、右之通取計候与惣次郎別而立腹、可討果抔与色〻申掛候付、身存命之程難計、致殺害度存念差起、惣次郎寝入候を引木ニ而面躰等致打擲候處、相果候付、死躰隠置候段申出ニ付、於種子島仕置申付度旨、種子島靏袈裟幼少故、親類より申出趣有之、よし事多年夫婦之會釈いたし居候付而者、相嫁候茂同然、別而不届之仕形ニ付、右之通自分仕置可被申付候様可申渡候、以上、
八月　　（島津久福）伯耆

○奉レ命検二戸口一、以告二于　官一、記二于左一、

○　二五　種子島役人連署届書

種子島

惣人躰六千七百四拾人

但

二千八拾三家部

内

一四百八拾六人　六拾歳以上

一弐千百五拾九人　拾五歳以上

一四百六拾三人　長病・片輪

一九百拾四人　極貧者・他所稼等ニ而御軍役難相勤者又御咎被仰付候者、

差引

現人数二千七百拾八人

内

千五百六拾人　弐拾歳以上

右者、御用見合相成ニ付、可申上旨承知仕、右之通御坐候、以上、

萬延元年申八月　種子島役人連名

御軍役衆

○嚮就レ官請下製ニ樟脳一而鬻中諸大坂上、至レ是　官許レ之、原文記ニ于左、

○　二六　島津久徴申渡書写

寫

種子島之儀、近年風災打續、蔵方不如意成立、於島許樟脳焚方之上、上方表江賣出御免候、右ニ付而者、樟脳焚方之趣法他國江相洩候儀御禁制之事候ニ付、其段厚相心得、公儀流人樟脳方江一切不入様、屹与取締可有之候、尤一所ニ過分之斤高積出し相成候而者、故障之訳有之候ニ付、一ヶ年五六十斤位焚備、右を両三度ニ積出候様可致候、尤長崎邊江樟脳差廻候儀、屹与不相成候、左候而、積出之節者、詰締方并唐物締方横目等相改筈候条、此旨種子島鬻袈裟親類江可申渡候、

八月　（島津久徳）左衛門

○九月六日、家老上妻小左衛門定直其餘諸司檢二下之郡豊歉一而帰、平山村・上中之村・下中之村・島間村減レ租有レ差、

○九日、令下上妻直蔵定理一讀中法章上、

○十一日、與二米四斛于見聞役種子島平蔵時宜一、以三今秋更番祇二役麑邸一也、

○同日、與二米四斛一斗・錢六貫五百文于小姓兼手習方小田彦太郎一、以三今春祇二役麑邸一也、

○同日、女兄波津與二島津又六郎一有下結納之約一、女兄多計與二鎌田杢之丞一結納之約上、

○十五日、以二西村彌七郎・高崎吉十郎一為二納戸奉行一、中田市蔵・羽生伊兵衛・山崎彦兵衛・河東專之進・宮浦源太左衛門馬役、

○同日、西村彌七郎・河内市兵衛・中田市蔵久為二講談役一、日高直五郎・吉良孫次郎・武田小太郎・鮫島周八善レ射、牧藤十郎・笹川覺太夫・東辰五郎善レ槍、美坐清助・吉良宇角・石黒小四郎・岩河勇八郎・尾形小吉・長山甚蔵・猶原直之助善二擊劍一也、以レ故各褒二詞之一、

○十日、嘗姑姉久美夫人之幼也、西市濱田彌三次之母進レ乳焉、夫人每念レ報レ之未レ果而卒、祖母夫人哀レ之、至レ是継二其遺志一、以二彌三次一為二二十人格一、

○同日、以二川口六郎一為二樟腦山掛一、

○十六日、家老種子島友右衛門時大代レ吾詣二本源寺一、如レ例、

一

○十七日、與二米五石七斗于近習國上只次一、以下三今秋更番祇二役麑邸一、米四斛一斗・錢六貫五百文于小姓川内一郎、今秋亦不二更番一而留中役于麑邸上也、

○同日、與二俸田十五石・米十二斛六斗于定府側用人美坐三十郎時資一、

○二十日、以三物奉行西村休八時乗・山奉行日高平次・遠藤健太郎一為二樟腦山掛一、

○二十一日、締方横目新納十郎・藥丸源之丞、唐物横目今村金次・附役失姓名来、

○二十五日、水戸前中納言公凶訃至、停レ樂七日・工事一日、
○二十八日、以二岩川嘉兵衛一為二納戸奉行一、
○同日、與二米二斗于永徳丸船長池村宗助一、先レ是航赴二鹿児島一也、會二洋中颶起一官物及衆人所レ托之物無レ所レ失而達レ之、以レ故被レ賞、
○以二尾形善蔵一為二船奉行一、納殿役人如レ故、賞下多年奉二其職一而不レ怠、且今秋不二更番一而祗中役麑邸上也、名越只次為二一世郷士一、以下嘗為中祖母夫人之僕上也、
○十月九日、家老岩川十右衛門時令詣二本源寺一、祭二宗祖一、
○十日、以二川内市兵衛・中田市蔵一為二記録方掛一、
○十一日、家老上妻小左衛門定直詣二本源寺一、祭二宗祖一、
○十三日、家老種子島友右衛門時大詣二本源寺一、祭二宗祖一、
○二十七日、磔二上中之村浮面百姓金六者之女餘支一、倒二載罪人馬上一而過二東西市一至二石寺下之濱一而行レ刑、横目平山佐次右衛門友直・日高源右衛門為徳、物頭長野平左衛門・渡邊勘右衛門往監レ之、道具番數名從焉、
○以二特旨一擢二定府納殿役人下村要志一為二普請奉行一、職事如レ故、以下多年祗二役麑邸一能供中其職上也、
○官命二常平倉一之事、記二于左一、

○ 二七 川上久封申渡書

常平倉之儀、給地高所務米并諸郷作得米之内より、米穀豊熟之年柄御買上被仰付、當分御當地并諸郷御蔵凡一萬六千斛餘之御圍高ニ相及、右之内より凶年之節者申請等被仰付得者、毎秋新米ニ而圍置候儀者當分之穀料限ニ而、以來者諸郷作得籾御買入を以御圍被仰付候条、凶年之節者、籾摺方之上、可致拂方候、於其儀者、當秋之儀茂米穀豊熟之由相聞得候ニ付、給地高所務米御買上之儀者引取、諸郷御年貢米済之上、作得米受持郡奉行取調へ届申出候上、見聞役差出御買上之上取寄、常平倉江圍置候様可取計、

此旨可致承知向〻江可申渡候、

十月　(川上久封)筑後

○十一月十三日、萩永村日高金次有レ罪、除二其組入士籍一為二代々郷士一、褫二其横目職一、納二罰銭二十貫一、以下先レ是破レ禁竊採中材于松原山上也、連逮使二百姓茂三次一納罰銭一貫文、十助五百文、以下為二今次一所レ托伐レ材且運中輸其宅上也、譴二庄官日高休右衛門・横目日高九十郎・梶原八兵衛・岩坪伴五郎・山役日高七左衛門・馬場友次郎・古市太郎吉・梶原儀助一、以下施レ令之不上レ厳也、

○同日、萩永村故庄官日高九市寺入寺及日数不詳、且納二罰銭一貫百文一、去夏奉二祖母夫人之命一、求二羅漢栢材一不レ得、不レ告二于山奉行所一而竊採二之松原山一而獻焉、以二其餘一充二假屋屋材一、馬場宗助就二九市一、謀以二椎材一換レ之、九市許レ之、其餘賣二于今次者一而収二其價一、至レ是事露、故及焉、連逮馬場宗助寺二入于善福寺一一七日、且収二其材一、故山役日高七左衛門・古市太郎吉・池龜八百右衛門于二善福寺一、古市五次兵衛・古市三之丞・日高九助・日高長蔵于二本善寺一、作見舞石堂喜角・馬場善右衛門于二善林寺一各一七日、

○同日、先レ是飢饉、禁レ鬻二穀于他州一、濱田喜八借増田村市助者之商船蜜載二米二十石一商二于屋久島一、至レ是事露、因使納二罰銭三百二十貫文一、籍二没米二十四石一、連二逮喜八之伴當次助一罰銭一貫文、赴二屋久島一司二販鬻一者也、水梢増田村庄市三百文、船主市助一貫文、

○同日、使下住吉村曽平次一納中罰銭五貫文上、以下竊載二材木一不レ乞二券書一而航中西方上也、連二逮市次郎・吉次郎一、各納二罰銭三百文一、

○十四日、以二羽生助左衛門一為二馬役一、中田市蔵・河内市兵衛為二小姓兼手習方一、

○十五日、西村直千代加二首服一、家老種子島友右衛門時大代レ吾、家老上妻小左衛門定直、理髪西村甚五右衛門時哉、物奉行西村段左衛門時起、用人種子島郷兵衛時加班列、獻二太刀・馬代銀一、命二俗字直之

進、

○二十一日、先レ是造二土蔵一也、斗人彦次助二工事一有レ勞、至レ是與二以米二斗一賞レ之、

○以下嚮磔二上中之村浮免百姓金六女餘支一之事上告二于官一、

○ 二八　種子島時大・上妻定直連署覚

磔

種子島上中之村
浮免百姓亡金六娘
よし

右者獨身者ニ而種子島靏袈裟足輕下中之村居住岩坪惣五郎弟岩坪惣次郎呼入、多年夫婦之會釈いたし居候處、不埒者ニ而度々申争、不法之儀有之、村中之妨ニ相成候ニ付、惣次郎儀本村江引取候様、よし者先年脇方江致縁付居候節出生之子共方江差越候様、所役共より申付候處、右よしより所役共江申含、右之通取計候半と惣次郎分而致立腹、可討果抔と色々申掛候付、自身存命之程茂難計、殺害いたし度存念差起、惣次郎寝入候を引木を以面躰等致打擲候處、相果候付、死躰隠置候段申出、多年夫婦之會釈いたし居候ニ付而者、相嫁居候茂同然、別而不届至極之次第、依願右之通被仰付、去月十七日檢使として横目両人平山佐次右衞門・日高源右衞門、物頭長野平左衞門・渡邊勘右衞門差越、右之通仕置申付候、此旨可被申上候、以上、

十一月　　上妻小左衞門（定直）
　　種子島友右衞門（時大）

前田新五兵衞殿（宗誠）
知覧才兵衞殿（行修）

○十二月三日、國上村配所公儀流人福蔵病死、告二之官一、

○十日、以二平山寛蔵・遠藤健太郎一為二記録方掛一、

○同日、現和村百姓次郎宅失火、焼二宗門手札四枚一、

○十三日、上妻源左衛門獻二斗搗餅一、家老種子島友右衛門時大代レ吾、

○二十六日、使下家老西村段左衛門時起・物奉行時任丈左衛門時喜一與中聞改革方之事上、

○二十七日、鍛冶及三寺・二十人家獻レ物、如レ件、

○歳暮式、如レ例、

（表紙）

文久元年　種子島家譜　廿五代久尚　七十七

○文久元年辛酉正月元日、國上村獻二野老一、
○二日、國上村獻レ蝗、庄司浦獻レ鰒、
○同日、覧レ馬、名代家老種子島友右衛門時大、馬役田上助十郎、
○同日、八寺獻上、如レ例、
○四日、上之郡庄官・小觸獻上、如レ例、
○同日、　官命レ可レ嚴二瀕海之守備一、以二近来洋夷窺レ覦也、
○六日、初狩、組頭平山佐次右衛門友直・上妻九郎左衛門宗富・渡邊勘右衛門利、山奉行東嘉助・前田平八・遠藤健太郎・日高平次・八板藤兵衛・河内六助、夕狩場、名代家老岩河十右衛門時令、物奉行西村次郎兵衛時知、用人平山藤左衛門良友、西之表庄官獻上、如レ例、
○七日、中之郡下之郡庄官・小觸獻上、如レ例、
○九日夜、下西之表之郷士榎元宇平次宅火、焼二宗門手札五枚一、人馬無レ恙、我横目平山佐次右衛門友直・西村七郎時義検二察之一告二于　官一、
○十一日、甲冑之賀、如例、
○同日、蓮勝寺獻神酒・粢盛、如レ例、
○同日、本源寺軍陣祈念、如レ例、
○同日、在郷諸寺獻上、如レ例、
○同日、的始、名代家老岩河十右衛門時令・用人失姓名、射手一番西村九十郎・河内市兵衛・二番上妻新右ェ門・下村平太・三番日高直五郎・八板多平太、
○同日、奉二桝形柵門守衛之命一、
○十九日、與二俸米五斛七斗於近習下村佐一郎一、以レ

祗二役于麑邸一也、

○二十五日、使三麑府市人前田清右衛門権二島中之牛馬皮一、以三其姉津麻爲二久尚之乳母一也、

○點二檢丁夫・病夫一告二于　官一、如レ例、

○麑府市人江口直之助・馬場傳太郎請レ鬻三合藥于二島中一、許レ之、

○二月朔日、與三眞米三石於二牧瀬玄貞一、以下學三醫于二京師一而能通中其術上也、

○二日、　官命レ可レ鬻三筋干藻於二濵崎太平次手傳嘉兵衛・甚五郎・休兵衛・太郎一、

○五日、與二染地一端於東町之牧瀬伊助一、賞下嚮使レ製二祖母島津氏所獻　太守公茂久公銃架及吾銃架一而不中受其價上也、

○八日、使二坂井村之庶民一納三罰錢一百五十貫文、先レ是本村溝洫壞矣、吏、檢二其損處素計役夫之多少一、定二傭直之額一、使二庶民一取役乃與二券書一焉、既而所レ受之米不レ滿レ所レ言、庶民意二村吏等爲レ姦也、遂訟二之吏署一、署将召二村吏一訊二問之一、村吏聞レ之曰、會二吏舍一以檢二其計簿一、蓋欲二清算而呈レ之也、庶民復以爲、彼別爲二僞簿一而紊二其實一者也、乃集黨而逼二吏舍一、擧動不レ正、故坐レ之、檢者河野林藏・日高幸内・鮫島嘉右衛門・高尾野甚助・牧傳之助寺二入于妙泰寺一各三七日、坂井村前横目德永只右衛門・上浦孝太郎・古市彦九郎・柳田清五郎・河内六郎右衛門・日高平次・横目古市半助于二善福寺一各七日、横目古市源右衛門于二本成寺一五七日、前横目古市八百右衛門・庄官古市十郎・横目池山喜藤次于二妙昌寺一各三七日、此輩與下司補二溝洫一之事上者、各以二計簿出納不正一而大爲二吏署之累一、故被二逮坐一、檢者古市甚次郎已死、故告二罪状於其族人一、

○十日、輿丁平山之浅次郎・西之村周次郎・坂井村之喜四郎、各免二伐明畑之租一、以三能奉二其職一也、

○十二日、高奉行知覧彌兵衛寺三入于二本善寺一、美座平兵衛于二遠妙寺一各三年、以下嚮補二坂井村溝洫一之日有中不正之事上也、

○同日、八板藤八寺二入于本因寺一三年、嚮吏署使下二坂

井村之村吏呈傭米出納之計簿、簿中遣息米銭於藤八者多矣、召村吏訊之、村吏曰、自故僚某等之時既然、吾曹不知其何故而借之、乃召藤八問之、不能詳對、亦無券書之可以證者也、於是使藤八悉償之且坐之、

○十六日、福山郷士是枝彦右衛門以崇一向宗被放来、

○二十五日、上書請使波戸築方地方検者野元三之助預聞島中勧農之事、官許之、

○按察一向宗告于官、如例、

○三月朔日、以莖永村足軽馬場藤蔵為代代郷士、以為母夫人之僕而勤労有年也、

○同日、下村三左衛門・名越仲兵衛為平山村掛地方検者、池村孫七莖永村掛、宮浦半之丞・緒方權藏下中之村掛、年與俸米各二斛、

○同日、與艾餅于三寺、慈遠寺獻同品、

○同日、西之表庄官賀瀬引、如例、

○四日、先是、平山村鹵田歳中經費、祖母夫人以其私蔵之金償之、至是請于府庫、令出二分之一、塩價亦二分而各収其一、

○八日、與米四斗於石黒小四郎、以醸造土倉之日、為之下吏而奉職之直也、

○十一日、與俸米四斛於見聞役平山佐次右衛門友直、四斛一斗・銭六貫五百文於扈従兼手習方河内市郎、各以祗役于麑邸也、

○同日、西町濵田彌三次為二十人家、先是、祖母夫人有所思而為二十人家格、至是八ヶ代半助死而無後、故代之、

○十四日、用人西村七郎時義・高奉行日高杉右衛門為石炭方掛、以官頃日探石炭于島中也、

○同日、波戸築方野元三之助及石工等来、

○十五日、以馬役鮫島源藏為樟脳山掛、

○同日、三役閲諸士之武技于廣間之庭、事畢與褒章於師家、

○十九日、幕府詢書至、曰改元文久、

○二十日、使物奉行西村藏多時措屬野元三之助

而司中島中勸農之事、上

○二十一日、　官下二我臣市来喜兵衛于レ獄先是置評定所、今日徙於谷山牢、

○二十四日、田上玄隆・牧瀬玄貞爲二奥醫師一、與俸田各一斛所、

○本藩市人池田九兵衛来請下伐二松木一以爲上レ板、許レ之、

○四月四日、以二牧傳之助一爲二莖永村掛地方檢者一、

○八日、　官示二糸荷船来之處置一、如レ例、

○同日、以二上妻七左衛門一爲二近習役一、與二俸米五斛七斗一、以レ祇二役于魔邸一也、

○九日、伯母鎌田要人政（ママ）之室婦美卒、法号賢相院殿妙德芳心大姉、久尚忌二十日、祖母夫人十日、二女兄於初於雄各二十日、停二殺生・音樂一二十日、

○十二日、家老美座十郎右衛門時敏致レ仕、

○十五日、以二河内市郎一爲二定府扈從一、

○十八日、使丙醫師河東三折種下牛痘於在二魔邸一者上、而歸施乙諸島中甲、

○同日、樟腦山釜居市来之新助来、

○二十四日、　官命二猥不レ可レ賣二島中之紙一、

○同日、用人種子島平藏時宜雜紙方掛、

○同日、島津周防君太守茂久公之御父也改二名和泉久光一、以故諸人俗字禁レ用二和泉光三字一、和泉二字和訓同音亦諱レ之、光字不然、

○同日、遠妙寺僧宜承院縊二死于松原山一、不レ知二其由一、締方横目失姓名、我横目種子島平藏時宜・渡邊早右衛門兼重檢二察之一聞二于　官一、

○二十五日、　官返二賜市来喜兵衛所レ盜之諸品一、原文記二于左一、

○　二九　盜品書上並達書

一身刀壱本　正近在銘

一赤銅牛細工目貫壱具

一身脇差壱本　無銘

一拵脇差一腰　祐定在銘

一身刀壱本　永光在銘

一赤銅二ッ茗茄細工目貫壱具

一同桜花切上鍔二
一身刀壱本　無銘
一同　壱本　祐定在銘
一同　壱本　正清在銘
一同　壱本　無銘
一銀鳩丸陣太刀拵具壱通
一身脇差　無銘
一赤銅地弐疋獅子居物小柄一
一身刀壱本　越中守正俊在銘
一赤銅筋立鳩丸拵刀一腰　無銘
一同小柄・笄二具
一同鍔二
一柄廻り大小
一身脇差壱本　正幸在銘
一金龍目貫二具
一拵脇差壱本　無銘
一身脇差壱本　正幸在銘
一小刀　壱本　元平在銘

一拵脇差壱腰　兼歳在銘
一獅子金目貫壱具
一拵脇差壱腰　無銘
一赤銅鍔二
一身刀壱本　兼光在銘

右者、種子島靏袈裟所持之品ニ而候處、先達同家來市來喜兵衛盗取質借又者賣拂候を取揚、同役人江被預置候得共、此節無御構被返下候事、

○二十九日、褒二詞岡留六助一、以三勉習二示現流劍術一也、
○同日、用人種子島郷兵衛時加兼本源寺寺社奉行、
○家老岩河十右衛門時令、物奉行森休兵衛友習・西村次郎兵衛時知・西村休八時乗爲二樟脳山掛一、
○魔府市人田中仁兵衛・深川森右衛門来請二松五百株一、許レ之、即納二其價一（失其數）、
○五月五日、與二粽各二束于三寺一、慈遠寺獻二同品一、
○七日、以二牧藤十郎一為二馬役兼納殿役人見習一、侍二於祖母夫人一、

○同日、渡邊早右衞門兼重・西村七郎時義爲二勸農方掛一、
○十三日、與二俸米四石一斗・錢六貫五百文於定府扈從兼手習方河内市郎一、
○同日、唐物方横目今村金次・附役川畑甚兵衞・締方横目藥丸源之進任滿而歸、
○十三日・十四日、修二放光院殿日悟大居士三十三回忌于本源寺一、家老上妻小左衞門定直代二久尚一、物奉行西村源五右衞門時民(ママ)代二祖母夫人一、時任丈左衞門時喜代二母夫人一、用人西村十郎次時義代二二女兄初・雄一、取次各進レ香、法事奉行平山藤左衞門良友・種子島郷兵衞時加、靈膳奉行種子島十郎左衞門・西村彌七郎、祭儀如二旧典一、
○十六日、官命、使麑府市人山岡貞助權二島中所レ獲龜魚皮甲一、
○二十八日、與二米二斗於飛船船長大木嘉太郎及水手一、賞下不レ滿二七日一而往中来于麑邸上也、
○二十九日、使下二家老種子島友右衞門時大一致レ仕、且収中安納之櫨圃上、
○家老岩河十右衞門時令為二宗門方掛一、
○六月六日、修二聞法院妙覺大姉日悟公之實母之四十九回忌于本源寺一、
○十日、以二西村段左衞門時起・森休兵衞友習一爲二家老一、與二俸田各十五斛所一、
○十一日、本源寺鑑司智遠院、應レ召住三持于二本藩妙顕寺一、
○十四日、使二用人種子島三七時習一監二油久村一、
○二十一日、使下二三寺之僧一禱丙雨于乙本源寺甲、三日而雨、
○二十三日、以二西村休八時乘一爲二物奉行一、與二俸田十斛所一、
○二十四日、家老西村段左衞門時起・森休兵衞友習爲二改革方掛一、
○二十五日、市来之長次郎者夫妻来烹三塩于二大浦鹵田一、
○馬越徳島村之百姓新右衞門、以レ崇二一向宗一被レ放来、

○幕府教書到、曰、先是居夷人於高輪東禅寺、去月二十八日之夜、水府之浪士有賀半彌・岡見富次郎・前木新八郎・森半蔵・矢澤金之助・渡邊剛藏者、竊逼東禅寺而兵夷人數名、既而逃去亦不知其所在也、郡國如有異色人、則宜留之而告于官、

○官使我西町之濵田彌三次納罰錢一貫文、爲官船船長自大坂歸薩之日、官載罪人八郎者于其船、八郎脫而逃匿索搜不得、故及茲、

○官下令曰、若有洋船来泊、則鎮静不動待令發而後從事云、

○二十九日、國上村急使来報曰、火輪船一隻来於浦田港云、即使所司赴之、又遇急使於途、報曰、夷船已去、所司乃還、而夷船復来泊府下港、去岸四町計、諸士悉會於城中以備不虞、於是使華音譯者上夷船、問其本國與薪水之有無、言語不通、唯英吉利・江戸・長崎等之語可解耳、因知其爲英夷也、夷船之入港也、海底有廢纜、

繫火輪而不轉、渠搖手以爲請解之之状、乃使我水工佩刃蹈海而解之、潮深不輙解、會日暮而止、此夜、使小舟數隻衞夷船、翌七日蚤、復使善水者解之、夷人謝以金一圓一方（我國之一歩銀）、既而開帆、向西南而去、後數日告狀于官、

○同日、夏越之式、如例、

○七月朔日、物奉行羽生仙藏能通爲藥園方掛、

○四日、與金一圓於河野三好、賞嚮赴大坂而受製藥之訣也、

○同日、緒方權藏・緒方助右衞門寺入于妙昌寺、各三七日、以爲濱津脇米倉之下吏而計簿不正也、

○同日、責呵長野專之助、以爲西之表村下吏而計簿不正也、

○七日、平山寛藏武肅爲用人兼組頭、美座半兵衞軍役方掛、

○同日、安日深公之戎衣于廣間、家老拜之、

○同日、祖母夫人下島焉、

○同日、赦羽生才之丞・牧平次（各放于上中之村者）、上妻惣之丞・

有留孫八（各放于島間村者）、以レ修二放光院殿日悟大居士三十三回忌一也、

○十日、祖母夫人詣二于三寺一、

○十二日、使下二物奉行西村休八時乗一司中祖母夫人及女兄下島之事上、

○二十日、物奉行西村次郎兵衛時知・平山村横目羽生十兵衛・山口七左衛門為二塩濱方掛一、野間村之石堂休右衛門・石堂新助為二樟脳山掛一、

○同日、與二米二斗於飛船船長西町之長蔵及水手一、賞下不レ滿二七日一而往中来於魔邸上也、

○二十二日、物奉行西村蔵多時措為二母夫人之内用方掛一、

○二十四日、與二青銅百疋於島間浦之船主清兵衛一、以丙嚮赴二魔府一之日、因下府庫之事上使乙レ之滞府甲也、

○二十六日、物奉行西村休八時乗・船奉行上妻源左衛門・筆吏八板矢右衛門爲二造船方掛一（吉徳丸）、

○物奉行西村源五右衛門時弘・時任丈左衛門時喜為二米倉掛一、

○八月朔日、與二中紙各二束於慈遠寺・大會寺一、二寺亦獻二同品一、

○五日、一向宗流人古田村配所之孫左衛門・増田村配所之彌吉下二于獄一各一年、岩屋口浦之甚太罰銭三貫文、喜助・甚次郎各一貫文、西町之榎元清次一貫文、先レ是孫左衛門至二増田村一、使下二彌吉一買中甘藷上、使下二甚太等一假二榎元清次商船一而竊鬻上二諸於指宿一、以故被レ坐各有レ差、孫左衛門・彌吉殊爲二流人一故罰尤重、連逮古田村庄屋深田周左衛門、横目榎元新吉・渡邊新太夫等本成寺寺入各七日、増田村庄官馬場休八、横目日高藤次郎・馬場嘉助・遠藤藤右衛門日輪寺寺入各七日、以下監二司流人一之不上レ嚴也、

○十五日、八板十郎・武田太郎始謁見、獻二火縄一、

○十八日、禁二錮遠藤清五郎・鮫島新藏一各五十日、嚮清五郎與二新藏一爭鬪、事渉二不正一、故及レ茲、

○同日、與二小筆各二本於學校所之諸生一、

○二十七日、西之村之百姓太郎吉宅火、燒二宗門手札一、締方横目（失姓名）、我横目上妻直藏定理・渡邊早右衛門

兼重検二察之一告二于　官一、

○二十九日、與二俸米四斛於見聞役種子島郷兵衛時加、五石七斗於近習上妻七左衛門、四石一斗・銭六貫五百文於小姓兼手習方中田市藏一、以三各祗二役于魔邸一也、

○平山村之百姓清吉病二死于谷山之獄中一、嚮以四爲二竊盗一之故三、　官執而下二于獄者一也、

○九月五日、女兄初雄下レ嶋、

○七日、森休兵衛友習爲二軍役方掛一、物奉行西村休八時乗・西村次郎兵衛時知・羽生仙蔵能通、用人日高源右衛門為徳・上妻九郎左衛門宗富改革方掛、平山寛蔵武肅記録方掛、

○八日、以西村七郎時義為二物奉行見習一、前田太郎右衛門・西村直次郎・肥後四郎左衛門番頭、岩河嘉兵衛普請奉行、西村九左衛門馬役物奉行所筆吏如故、

○九日、使下二用人上妻九郎左衛門宗富一讀中法章上、如レ例、

○十三日、祖母夫人及女兄初・雄詣二於熊野宮一、

○同日、久尚與二母夫人一如二加治木一浴二于温泉一、

○十五日、本源寺祈念、名代家老上妻小左衛門定直、

○二十二日、與二前家老美座十郎右衛門時敏米一斛八斗一、以為二養老之資一、

○二十七日、唐物方横目伊勢矢太郎、附役甲斐伴次郎、締方横目津留八左衛門・入佐五次右衛門来、

○官許諸士以下上疏言事、

○晦日、與金三方岩河作左衛門、賞下為二産物方掛一而多年勤労上也、

○藩士原田傳之丞請下以二其族人銭屋茂太郎一時在大坂者也為中我大坂船問屋上、許レ之、

○(十月)六日、祖母夫人召二家老森休兵衛友習一授二自手筆之令一、原文記二于左一、

○　三〇　松寿院内意書

女更事新敷出過候様ニも存候得共、此方事幼年より参居

御両親様御叮嚀ニ被遊　養育いたし　御厚恩之程筆

紙ニ尽しかたく、猶又御家法等あらましは案内之事候得者、今度存慮之程書附を以三役以下役々末々迄申置度候、前方永々　御名跡、何かと差向之相談等ニも相加り、然處、追々弾正殿相續被致、此上者一先安氣と存居候折柄右之仕合、しかれ共霜けさ殿成長育方不輕儀肝心可致、何事も此涯一統静謐之上無之、猶以御役人中得心いたし、万事無緩怠政事向取扱おしはまり、等閑之考ニ而も屹与不相済儀當然之事ニ候、物奉行儀、第一出入取締向無緩疎、用人之儀、賞罰等見聞者勿論、若き面々文武之はけみ、禮義正敷方申論、此外諸役場ニ而も、高奉行専勸農方引受、年々取納等不引入様精勤肝要之事、何れ各役場無怠正道相守、御為筋を可奉存候、殊更御家之儀者御先代より厳重成御家法、此期ニ至り猥りかま敷成立候而は、是迄役々之勤向も詮無之、此方ニも氣之毒相考候、左候而、前条之通御恩沢ニも相預候此方ニ而候得者、何か往々御家之為手印を残置度、先達手元失脚を以平山村川直し并同所塩濱等建立いたし候、其上不容易なから御上江御下金等願出、地方檢者野元三之助殿を相頼、石工夫方多人数頼下し、前ヶ浦波戸築普請取企、ひたすら三之助殿并かゝる役々を初め骨折にて、思通成就ニ相及、旁安氣此事ニ候、是等之ヶ条、何そ我身之勲功申立致ニ而者無之、厚恩報ふはしニもと永年相傳り候を冥加まてニそんし候、彼是ニ付、兎角役場之儀得与致順熟、自侭成立候振舞かつて無之方申入候、猶又當分者織衞殿・加次右衞門殿内外被頼儀、其上先年御上より思召を以改革被召入、御役々をも被召掛候砌、弛立候而ハ申訳も無之次第、兼而精微に吟味を尽し、用聞衆江も相談相達、近年中御所帯方立直り無之而者不叶儀、何篇ニ茂最通全備可被致、尤砂糖・生蠟其外産物直組宜敷と之事仕合之至、是又掛之役々無油断都合有之度、何分ニも三役并諸役場ひたすらおしはまり一簾精勤可致、此外諸士末々迄競立、奉公方無緩疎上下相圓め、一統静謐之儀第一肝要可致、聊取違無之様申聞度存候得共、女之事ニ而心ニおもふは

かりニ而、跡先書様もわかりかね候間、何とそ宜敷
汲取、夫〻取計候様存候、

松壽院

文久元年辛酉九月

役人中江

○九日、名代家老森休兵衛友習詣レ于二本源寺一、祭二宗祖日蓮一、

○十一日、以二西町之井元彌吉一爲二二十人家一、先レ是以乙彌吉之宅爲二産物方之局一、且使下二彌吉一司中其事上而奉職直甲矣、故有二此命一、

○同日、名代家老上妻小左衛門定直詣二于本源寺一、祭二日蓮一、

○十三日、使二用人一名失姓讀丙祖母夫人自手筆之書于乙廣間甲使下二諸奉行・諸士一拜中聽之上、

○十四日、収下嚮所レ與レ於二柳田意哉一本源寺射場故地上以乙意哉應二官命一爲二一代郡山郷士一而居甲レ于下本藩上也、

○十五日、贈三金五圓於二野元三之助一、贐下于前浦波戸築成而歸上レ于二本藩一也、

○二十二日、唐物方横目東郷源吾、附役松脇勇助、締方横目家村彦作・川上榮之丞歸、

○十一月二日、用人平山寛蔵武肅為二下西之表村掛一、

○五日、鮫島村右衛門為二樟腦山掛一、

○十五日、以二下村要二一為二代々小頭一、與二刀一口隅州種子島定行作・金三十圓一、賞下嚮製二戎服一領經費府庫出之及副兜一以獻二先考慈詮公一、今亦製二一領經費府庫出之以獻中於吾上也、

○十八日、使下二鎌田氏之有司一椎中我島中之海草上、賢相院殿於文在世之日曾請レ之、未レ果而卒、於レ是祖母夫人哀レ之、因以二其海草之價一供二賢相院殿祭資一云、

○十九日、與二染布各一端於家老前田新五兵衛宗誠・森休兵衛友習一、以下為二産物方掛一而多年勤労上也、

○二十一日、與二金各一方於上中之村之河野七次及極樂寺、各二朱於河野伊三次・上妻源助・百姓與吉一、嚮以下築二新井手一之日、使丙諸有司及麑府石工等止乙宿其宅甲也、

○二十二日、東郷藤川村之百姓仙兵衛以レ信二一向宗一被レ放来、

○二十三日、祖母夫人及女兄初雄自住吉村歸于府下前巡視中之郡・下之郡、

○二十五日、本妙寺請レ移小坊・寶屋于小平山、下之坊于中之町、上之坊于田尾、許レ之、

○二十九日、物奉行西村休八時乗為二軍役方掛一、美座半兵衛・羽生平右衛門・日高孝兵衛船奉行、河内六助・八板藤兵衛高奉行、牧平七・河内勘十郎・知覧才太郎山奉行、

○同日、鹿籠浦之商船船頭友吉等逢レ颶破二壊于上西之表大崎一、

○按二察一向宗一告二于　宮一、如レ例、

○官許二其兵具所附足輕淵邊專蔵一歸二本藩一嚮有故来住花里崎者也、

○加世田之長太郎来為二大浦塩濱之焚子一、

○十二月十日、頃日以レ修二放光公三十三回忌・梅顔院夫人三回忌一、祖母夫人降二特旨一赦二軽罪者一、徳永小彌太・上妻市助・河野休庵・大山小太郎・上妻源兵衛・上妻良齋・長野善之進・知覧彌兵衛・美座平兵衛・八板藤八・下中之村郷士上妻仁右衛門等在二赦中一、嚮各有レ罪身在二譴中一者也、

○十三日、上妻源左衛門献二斗搗之餅一、如レ例、

○十四日、祖母夫人有レ所レ思、復使三島中建二盆卒都婆一前有故禁立之、

○十七日、　官徒目附禰寝彦助来、使三我鐵匠製二鳥銃八匁目肱付臺五十挺一、督レ之大急、蓋重富公子将レ覲二于幕府一、所三以途中備二不虞一云、

○十八日、用人上妻九郎左衛門・普請奉行子島猪右衛門為二鐵炮製方掛一屬二禰寝氏一、

○二十七日、三寺及二十人家・鍛冶献物、如レ例、

○同日、官戮我臣市来喜兵衛于谷山境瀬戸、罪状記于左、

○　三一　川上久封申渡書

種子島鶴袈裟

家来　市来喜兵衛

於境瀬戸死罪　むくろためし

右者、小姓役ニ而祐筆致兼務居候處、借財等追屯、去巳六月以來不筋儀と者乍存、兼而致取始抹主人刀箪笥入付之拵刀大小六腰・身刀大小拾三本・赤銅縁頭三具・同鍔六枚・四部一鍔一枚・金目貫五具・赤銅目貫三具・同小柄・笄五本・小刀弐本・金地金拾弐匁六分・銀地金三拾壱匁、時々透を計取出、自物之筋を以賣拂、又者質借等いたし候、都而之錢五百拾六貫九百文餘におよひ、仕捨候旨問付之上致白状、幼少之主人江致扈従候付而者、一涯正道取締社可致之處、右次第別而不届之仕形候付、右之通被行死罪候、

右之通明後廿七日、御仕置申付候条、如例可申渡候、

十二月廿五日　（川上久封）筑後

○二十九日、高奉行西村七左衛門為二塩濱掛一、

○官使下領國中正二什伍一且呈中名籍上、原文記二于左一、

○　三二　川上久運申渡書

諸郷并私領何人組合之儀、治乱共取締向旁ニ付而者専要之事候處、當時古來之作法相行候場處も有之、間ニ者名目計ニ而其実相紊も有之哉ニ相聞得候間、以来屹与組合相立、互ニ救合御用筋無滞相勉候様可心掛候、左候而、組合之名前御軍役方御用候間、早々帳面取仕立、御軍賦役江可差出候、右ニ付而者、郷士年寄其外戦兵難相勉役場并拾八歳以下五拾八歳以上、又者病者・他郷中宿御雇者等ニ而御軍役不相調者者、名前帳面外書ニ銘々其訳可相記候、尤替候役者、毎年正月初其訳無相違可申出候、此旨可被申渡旨、地頭・領主・大番頭江申渡、郡奉行江可申渡候、

十二月　（川上久運）但馬

○祖母夫人欲四曽開三鹵田于二平山村之大浦濱一、而未レ知二其地氣之可否一也、安政丙辰之冬、使二市来之商客平川某者来閲レ之、平川曰、可矣、翌年丁巳之夏、

使三同邑之井上良盛坊修験者来築二堤防一、自二六月一至二九月一而成、所レ費通計錢百七十五貫九百十九文・米七石九斗四升三合餘、即自二本月一使二塩子烹レ塩、至二本年十一月一而止、翌年丙午「戊午」復自二三月一至二十月一而止、如レ期「斯」者凡三年、然而鹵田狭小得レ塩不レ多、於レ是乎祖母夫人慨然曰、如レ此則非二吾素志一也、乃益墾二開鹵田一、亦別求二好製法一乃聞本藩、故國老調所某者所レ創出水鹵田製法太可、曰二之防州傳一、於レ是安政己未、使下二臣西村休八時乗一赴二出水一、就二鹵監禰寝彦右衛門・椎原彌兵衛者一學レ焉、時乗粗得二其訣一而歸、翌年庚申三月、復使下二時乗一赴二出水一傭二塩子慶八・庄次郎及石工等一而歸上、即「自」至二本年六月一益築二堤防一至二翌年辛酉之冬一而成、鹵田有二内外一、内鹵之廣凡三町八反計、此役所レ費錢通計千八百四十七貫九百十九文・米五十八石八斗八升六合餘、於レ是烹レ塩数月而所レ得二百二十四石五斗餘、乃使下藩士後醍院某者一作二國文一章一刻レ石以傳上三于不朽一、

國文記二于左一、

○ 三三 後醍院真柱誌松寿院顕彰碑文

種子島に塩焚事ハ、古へより有つらむを、六代左近将監殿の御時、更に事起し給ひ、海邊におひて山野一里餘方の地を塩焚者ともに賜ハり、其地の年貢を輕くして、塩をもて納しめ、其餘を一嶋の用分となさしめ給ふ、是より衆人御恵ミを蒙る事久し、凡その塩屋二十餘ヶ所、名つけて大塩屋といふ、其釜大なる竹あしろを白灰もて塗こめ、火に乾かす事六七十日にして、潮を汲入て煮る事の法にして、是を鎌倉流といへり、然るにこは薪の費おひたゝしく、人手間を取る事甚し、且釜を一たひ損なひつくろふに至れハ、月日を重ね、徒らに業を止事故に、時としては年貢を欠に及ふ、又平山村の内に纔に塩濱ありといへ共、何はかりの事にもあらす、されハ年〻他國より塩を入る事数百石、こゝをもてもし塩舟の通ひ不順なる時は、大に塩の乏しきに苦しめり、こゝに今の

殿いまた幼くましますにより、

松寿院君萬つの事おきて給ふとして、あまねき御いつくしみ、いたらぬくまなくおはしまし、又この御家におさなきより入らせ給ひ、いとおしミかしつかれ給ひし、その御むくひのしるしをは、後の世にいちしるくしたまはむとの御心せちにて、農桑の事は申も更なり、港の波戸築・川直しなとの事に至るまて、深く御心にいれて御手をつけさせられ、何事もたやすからぬわさなるを、あまたのこかねを御手許より出され、事よくおさめ行ひ給ふかなかに、わきて塩の足ハぬを歎きおほしめし、大きに塩濱を開きて、もろ〳〵を救ひ給ハむとす、されと御物入いやましなるへけれハ、いかにやなと申す者も有けるを、長く久しく一島の潤ひになるへからむには、今の費をはいとふへき事かはと、雄〻しくも思ひたゝしつゝ、いにし安政三とせの秋、大浦におひて、新たに塩濱を御取起しあり、市來郷より製法に精しき濱師を二人、数十金にて雇ひ來らしめ、御内なる西村時乗・羽生道則におふせて事執しめ給ふ、其法簡便にして薪を費す事古法の十か一、塩を増事数倍なり、これをあしろ焚といふ、然れ共、其法いまた尽さゝる所ある事をおほしめし、こその夏、遙〻出水郷より濱師二人を召呼せ給ひ、ことさらにこかねをなけうち給ひて、再ひ事をあらためかへ給ふ、こはいはゆる他國傳の法にして、又はるかにあしろ焚に増れり、これを本釜焚といふ、時乗らひたすら力を尽申、堤を築き井樋を通し、濱のひらけぬる事凡四十反餘、大概塩を得る事年に千石許に及ふへし、されハ一嶋の用分にも餘りぬへけれハ、上に乞申し給ひて、年〻渡され來れる八石米船に積入るゝ程を屋久嶋に賣り遣ハさるへき御ゆるしをさへ受給ひぬ、今よりハ、塩のしろ手をおひて御蔵の内に積重なり、是までの御物入をも遠からすして補なひ給ふへし、はた衆人日用の乏しきをも忘るへし、さて此御わさにつきてハ、神も人も相うへなひて、永く濱のさかゆかむ事を、誓をかけてねき給ふとそうけたまはる、かゝる御仁愛のたふとさを、なとかは神も守りたまはさら

む、世の人誰かハ仰き奉らさらむ、此事の由を後の世〻に傳へ、限なき御仁徳の光りをいやとこしへに照しゆかしめむか為、御内のつかさ〳〵相計りて、かく石ふミを建るになむ有ける、

萬延二年辛酉　月　日

後醍院真柱慎誌

○歳暮規式、如レ例、

（表紙）

文久二年　種子島家譜　廿五代久尚　七十八

○文久二年壬戌正月元日、規式、如レ例、
○二日、國上村獻上、庄司浦獻上、如レ例、
○同日、覽レ馬、名代家老岩川十右衛門時令、馬役緒方吉兵衛、
○同日、八寺獻上如レ例、家老岩川時令、
○四日、上之郡庄官・小觸獻レ物、如レ例、
○同日、以二西村小龜一為二児小姓一、
○六日、初狩、組頭種子島才七郎時習・種子島平藏時宜・平山寛藏武肅、山奉行東嘉助・前田平八・遠藤健太郎・牧平七・河内勘十郎・知覽才太郎、名代家老森休兵衛友習、物奉行西村藏多時措、用人西村十郎次時義、西之表庄官獻上、如例、
○七日、中之郡・下之郡諸庄官獻上、如レ例、
○八日、頃日将レ修二放光公之十三年忌一・梅顔院夫人三年忌一、因以二祖母夫人特旨一赦二輕罪者一、包人小川十次・牧瀬新七・上妻助左衛門、莖永村之日高休助・柁原兵藏等在二赦中一、嚮有レ罪錮二之某寺一者、
○十一日、本源寺軍陣・温座祈念如レ例、祖母夫人及女兄波津多慶有二所レ禱一、通宵侍二佛前一、
○同日、的始、祖母夫人及女兄波津多慶私臨之、名代家老森休兵衛友習、射手一番西村善太郎河内市兵衛・二番日高直五郎下村三左ヱ門・三番吉良孫次郎八板孫兵衛、
○同日、甲冑之賀、如レ例、
○同日、蓮勝寺進上及在郷諸寺獻上、如レ例、
○同日、奉二桝形警衛之命一、
○二十一日、西之表長七宅火、宗門手札無レ恙、締方

横目及我横目往検レ之、

○二十二日、上西之表福永庄藏・新園善助、百姓金助・今之丞・清吉納二罰銭一各有レ差、以レ伐二花里崎植木場枯松一也、

○二十四日、官御徒目附禰寝彦助歸二于鹿府一、

○同日、獻二八匁銃十口于　官一、

○二十五日、以二増田村遠藤藤右衞門一爲二樟脳山方掛一、

○二十七日、命二六郷諸生一講二經於學校所一、家老岩川十右衞門時令・前田新五兵衞宗誠・上妻小左衞門定直・森休兵衞友習臨焉、

○二十九日、下二池田浦喜助于獄一百日、嚮鹿府市人森永才次郎来鬻二衣服一、及レ歸托二金二十両・銭二百貫於喜助一而去、喜助以二其所レ托償二己債一、且買二杉木場一而爲二己有一、送二書於才次郎一詭辞欺レ之、以欲レ蓋二其蹤跡一、故被レ坐焉、

○同日、西市人濵田源兵衞納二罰銭二百緡一、嚮鹿府市人前田清右衞門権二牛馬皮一之日、以下對二前田一有中不正之事上也、

○同日、使下二鹿府市人村山次郎右衞門一納中罰銭五百緡上且収二材木一、住吉村山役深田甚助・上妻清吉・長野村右衞門・上妻藤次各二百緡、貶二寺僧感應院一爲二庶人一、連逮責二訶西市人牧瀬仁次郎・松下嘉右衞門一、以下嚮仁次郎・嘉右衞門請レ伐二材木於住吉山一、許レ之、次郎右衞門聞レ之、私謀二仁次郎・嘉右衞門一而陽稱二仁次郎等之材木一欲レ買レ之、山役等及感應院亦偸二藩士新納氏買而所レ置材木一、以鬻中於次郎右衞門上也、住吉村山役田上藤市・上妻新助・長野彌吉・阿世知源市・羽生仲市寺二入于蓮勝寺一各七日、責二訶同村庄官・横目等一、以二平日施レ令之不レ厳也、

○同日、西之村横目濵田藤太郎・名越覺左衞門及名越宗四郎・濵田桐助寺二入于本善寺一各一七日、旧冬同村某宅火、坐レ不三速聞二之于政府一也、

○重富公子忠教徙二居二之丸一、實　太守公　之父也、故有二是命一、　官下二　詢書一告二之國中一焉、

○官、囚二我足輕國上村芝平助于鹿府之會所一、先レ是入二衣肆一而竊攘二衣服一、事露及レ此、

○貸二知覽才兵衛行修金三百圓一無息、多年役二于魔邸一、
今春亦命役二于浪華一、故以レ之爲二旅資一焉、
○自今春以往、使下二家老若物奉行一役中于大坂上、而檢二
産物販鬻之事一、俸金各有レ差、與二金十三圓于家老、
十圓于物奉行、六圓于筆吏一、家老・物奉行之僕一日
俸錢各百文、
○點二檢病夫・丁夫一告二于　官一、如レ例、
○使下二醫者一輪中役于魔邸上、與二俸米四斛一斗・俸錢十
貫文一、以往爲二定額一、
○二月十日、西之村庄官鮫島九右衛門寺二入于遠妙寺一
二七日、旧冬同村某宅火、坐レ不三速聞二之于政府一也、
○十九日、岩川龜千代加二首服一、獻賜如レ例、命二俗字
彦左衛門一、上妻小左衛門定直代レ吾臨焉、西村源五
右衛門時弘爲二理髪一、
○同日、下村源兵衛・日高新藏初謁、獻二火縄一、
○二十七日、御徒目附禰寢彦助再来製レ銃、
○三月朔日、使下二西村休八時乗・平山佐次右衛門友直・
上妻九郎左衛門宗富一與中聞禰寢氏製砲之事上、

○二日、使下二家老上妻小左衛門定直、物奉行西村休八
時乗、用人上妻九郎左衛門宗富、山奉行寄河内六助、
筆吏武田只助、醫者中田圓泰、射手上妻矢七左衛門・
平山一右衛門・田上助十郎狩中于馬毛嶼上、
○同日、御兵具所足輕淵邊仙藏歸二于魔府一、
○三日、令三平山寛藏武肅讀二法章于廣間一、
○同日、與二艾餅于三寺一、慈遠寺獻二同品一、西之表庄官
瀬引之賀獻物、如例、
○同日、唐物横目税所蘇之助、締方横目鎌田源八・木
原壮之丞、屬吏森山幸右衛門来、
○五日、與二普請奉行日高平右衛門金二百疋、大匠阿
世知半右衛門染布一領、牧瀬新助金五十疋一、賞下造二
営魔邸内玄關一等之労上也、
○七日、與二高奉行遠藤壮兵衛・日高杉右衛門米二斛一、
賞二多年奉職不怠一也、
○二十日、本藩地方檢者野元三之助来、以レ築二波戸於
諸子瀬一也、
○二十三日、以二渡邊勘右衛門一爲二船奉行一兼二町奉行一、

○同日、串木野丁夫十七人従二野元三之助一来、
○二十九日、以二岩河十右衛門時令一爲二禰寝氏所製鉄砲方掛一、
○晦日、以二上成傳左衛門一爲二塩濱方掛一、
○官命二　軍役之事一、原書挿二入于左一、

○　三四　軍賦方家老座達書

私領備壱組

一物主　壱騎
一昇　壱本
一昇預　壱人
　但小銃相携
一談合役　壱騎
一什長　六人
　但銘々小銃相携
一戦兵　六拾人
　但拾弐人伍長
一貝　壱口
一大鼓　壱挺
一醫師　壱人
　外ニ
一玉薬方　壱人
一兵糧方　壱人
一普請方　壱人
一人馬方　壱人

右之割を以幾組も可差出候、御軍賦之儀者、百斛弐人出役ニ而候間、現立不足者追而軍役可被相掛候、右者、先年御手當被改置候處、猶又今般御軍賦被相定候条、依時宜私兵を以出陣可被仰付、若病氣幼少之砌者、親類等陣代相立、何篇堅固ニ致手當、至急変之御用無滞可被相勤者也、

文久元年酉十二月

御軍賦方

御家老座印

○ 三五　川上久運・喜入久高連署申渡書

御備組壱組人数賦帳壱冊ッ、

右者、御軍役御備組人数賦此節御改正被仰付、右之通銘々致格護置、猥ニ不相散候様可被相心得、左候而、先年被仰渡置人数賦帳并繪圖壱面等都而可被差出旨、領主江可申渡候、

但所中江申渡相濟候得者、其段届申出候様、是又可申渡候、

三月　（喜入久高）摂津　（川上久運）但馬

○ 三六　川上久美外二名連署申渡書

御軍役御備組人数之儀、是迄九拾人を壱組、四拾八人を壱手与被相定置候得共、思召之訳被為在、此節六拾人を壱組、壱手三拾人与被仰付候条、此旨可承向江申渡、諸郷・私領江も可申渡候、

三月　（喜入久高）摂津　（川上久運）但馬

（川上久美）式部

○四月朔日、三役覽二武技於廣間庭一、師家如レ常、事畢各褒二詞之一、

○四日、河邊郷士深田良右衞門以レ信二一向宗一被レ放来、

○同日、與二鶴田新次宅地一、賞下多年為二政府筆吏一之勞上也、

○官、以二異舶入津之候一傳二長崎鎮臺之令一、如レ例、

○六日、三役覽二射禮於演武館一、日高直五郎雙箭命レ中、賞レ之以三鷹羽三葉・弓弦一條一、

○七日、以二用人平山佐次右衞門友直・平山藤左衞門良友・知覽覽之丞行義一爲二種痘方掛一、

○同日、使二知覽小右衞門女一権二島中胡麻一、以三多年爲二保姆一也、

○九日、以レ修二賢相院（日悟公女公子）一回忌一、赦二僧感應院（故住吉番僧）及休六（本姓榎元）、流人孫左衞門・彌吉（両人有罪、被繋囚者）、感應院再爲レ僧、休六爲二野町人一、孫左衞門・彌吉配二于古田村一、各如レ故、

○同日、與二西村彌七郎・鮫島源藏・羽生伊兵衞・高崎吉十郎・笹川覺太夫・緒方直十郎各金一方一、以爲二學校所助役一也、

○十二日、唐物横目伊勢矢太郎、締方横目津留八左衞門・入佐五次右衞門、屬吏甲斐伴次郎歸二于本府一、

○十三日、與二物奉行羽生仙藏能通米三斗一、以下嚮監二米倉一之日辞中俸米上也、

○十九日、修二祖師日典四百回忌於本源寺一、家老上妻小左衞門定直代レ吾詣焉、祖母夫人・女兄波津多計身親祭レ之、

○同日、下二野間村滿足山百姓安次郎于獄一三年、嚮使二西市人濱田庄五郎・東市人大山善藏一作二妄書一、僞稱二滿足山之戸首一、乞二砂糖價金二圓及錢二十貫文于勝手方一而攘レ之、至レ是事露、故及レ茲、日高新藏・百姓與助亦被二逮坐一焉、

○同日、增田村包人西田大市爲二世々鄉士一、賞レ善二其職一也、

○同日、與二慈遠寺僧誠守院・最成院金各一方一、賞二寺務不レ怠也、

○二十八日、下二上西之表百姓休吉于獄一百日、坐レ盜二東市人榎元猪之吉錢貳拾貫文一、

○五月三日、赦二國上村足輕芝平助一出レ獄、

○五日、慈遠寺獻レ粽、與二同品於三寺一、如レ例、

○八日、三役覽二稲留流銃術於大野崎一、

○十二日、三役覽二赤井流・天山流礮術於城之濱一、

○同日、以二西村甚五右衞門時哉一再爲二物奉行一、美坐半兵衞大會寺寺社奉行、西村直之進番頭、笹川九兵衞納戸奉行、國上只次・東嘉助普請奉行、平山十右衞門・梶原伊左衞門・鮫島真左衞門並山奉行、

○十六日、祖母夫人與二女兄多慶遊二于馬毛嶋一、

○同日、與二池村新助米四斗一、以レ使下其商船屢漕中運府庫之貨物于他州上也、

○同日、鬻二松板于長崎一、遣二物奉行美坐源助一監二其出納一、

○二十一日、與二八板矢一兵衞金五十疋・火縄二十曲一、本月十二日、三役之覽二砲術一也、矢一兵衞年七十、

入レ場放レ砲、氣力勇健不レ減二少年輩一、故有二此賜一、

○二十三日、以二山奉行八板藤兵衛一監二西之村・住吉二村一、河内勘十郎現和・安納・國上三村、平山一右衛門安城・増田二村、梶原伊左衛門油久・坂井二村、知覽才太郎上中・下中・島間三村、

○二十六日、祖母夫人・女兄自二馬毛島一帰、

○官告下今和泉忠教自二近衛公一賜上二字三郎一、

○與二長野源藏染布一端一、以レ獻二小銃一挺一也、

○按二察一向宗及耶蘇宗一聞二于　官一、如レ例、

○六月朔日、與二羽生十助金百五十疋一、以下嚮狩二馬毛島一也、使中二十助一剝二鹿皮一且補上二祖母夫人所レ舎之漁屋一也、

○二日、増田村百姓市之助者女亡匿、索レ之不レ獲、

○五日、以二山奉行日高平右衛門一為二産物方掛一、

○十二日、祖母夫人・女兄波津多慶詣二于熊野一、

○十三日、使三醫師鮫島玄心一役二于麑邸一、以二麻疹流行一也、

○十六日、下二油久村足輕日高清吉于獄一、嚮役二于麑邸一之日坐レ偸二焙藥一也、

○同日、　官告二祖母夫人之叔母柔正院夫人前月十六日卒一、服忌期已満、故心喪一日、

○二十一日、祖母夫人及女兄自二熊野一歸、

○二十六日、與二石工金二圓一、丁夫金一圓、以レ補二莖永村溝洫一也、

○二十八日、先レ是請レ鬻二塩于屋久島一、至レ是期満、復重請レ之、　官許レ之、原書記二于左一、

○　三七　種子島役人森友習願書

種子島之儀者、近年打續凶作勝二而、蔵方不繰合相成、無據出産塩之儀二付去々申四月御願申上趣御座候處、是迄通行之八斛米船便之序上荷積送り候様、誠二以難有次第奉存候、則差送り申候處、兼而屋久島二も塩不自由之場所之由御座候得者、殊之外重寶二相成、右之上荷迄二而者聊之事二而餘勢二相成丈無御座候、就而者、追々者過分積送り方仕呉候様、精々承事御座候、只今之振合二而、島元用分之外餘

計ニ出來塩有之事候得者、右塩濱之場所、模寄違遠方ニ而、御當地ニ積出申ニ付而者、西之村廉之御崎与申難瀬を乗廻、先書申上候通、殊之外船運送之失脚者勿論、塩濱興起趣法立ニ付者、品合旁之吟味ニ而、専播摩・周防之傳法ニ基キ取仕立ニ相成、土手并がんぎ普請其外之取拵方至極念入、御當地より日雇濱子男女數十人頼入ニ相成之處、本手銀等者手本銀内より被差出候處、存外之失費ニ相及、出來塩之儀者得捌方不仕、徒ニ相成向ニ候、就而者、適取仕立之産物出來候而も其詮無御坐、　松壽院殿ニも只今在嶋中殆當惑被致儀御座候、右ニ付、當御時節柄近頃恐入奉存候得共、八斛米船便より積送御免年限も當年迄ニ而筈合申候ニ付、乍此上重而御訴訟申上兼候得共、當年より先十ヶ年、嶋元用分之外不残時々積送り方御免被仰付被下度奉願上候、尤直段之儀も商人共より先から先ニ賣渡与者訳も相違、自然下直ニ可有之賦候得共、其上ニも尚々吟味仕、先方勝手能方相渡可申候、彼表元來過分獵方之場所御座候得者、御當地遠方より塩買下候付而者、不圖切間有之、適取得候者も看々腐敗損亡仕事毎々有之、右様之節者、誠ニ心配仕段も追々承り、種子境より差送り候付而者、彼表餘程仕合之由御座候、左候而、屋久島船出入之儀ニ付而者、以來島元掛役又者締方・御横目衆御改等有之儀御座候得共、猶又御手厚御取締行届候様被成下候得者、難有仕合奉存候、誠重々恐入奉存候得共、産物取仕立之御取訳を以而、願通御免被仰付被下度奉願上候、種子島鶴袈裟幼少ニ付、親類北條織衛被承届候間、是等之趣被仰上可被下儀奉願上候、以上、

戌
六月廿八日　　種子島役人
森休（友習）兵衛

○晦日、與二醫田上玄隆金二両一、以四數回令三急役二于魔府一也、

○同日、西之表庄官夏越獻上、如レ例、

○買二寺尾市兵衛宅地一而與二之族人北條織衛時有一（價九十両）、

因祖母夫人之命也、

○七月朔、問私領兵賦之法于　官、原書記于左、

○　三八　私領兵賦之法伺書

萬一急変之儀有之、私領備壱與被差出候節者、物主始人馬方迄皆同私兵ニ而相勤可申哉、又戦兵六拾人之分私兵ニ而、物主・玉薬方・什長等者御上之御人数御座候哉、

萬一直出馬被仰付候ハ、、當分幼少故、自然親類より陣代可被相勤候、其節も矢張御定人数壱組ニ而出馬可被致候哉、又別段御賦相替申儀御座候哉、

○二日、野元三之助巡視上五村勧農、家老西村段左衞門時起従ヲ焉、

○同日、與西村佐太夫流心影・岩河勇八郎流天真・笹川覺太夫流鏡智・吉良宇角流示現・日高直五郎流日置弓・東辰五郎流鏡智・吉良孫次郎流示現・鮫島周八流天真金各一方、賞ヲ嗜武技也、

○同日、官頒行陣之圖一巻、

○牧平次負債於府庫、以故収其稽古所一宇、雖然以ヲ嗜武技故返與之、

○七日、奉日深公戎服于廣間、家老失姓名拝ヲ之、

○八日、家老前田新五兵衞宗誠詣大會寺、祭先祖及宗祖・戦死之霊、

○十三日、家老西村段左衞門時起詣慈遠寺、祭先祖及戦死之霊、

○十四日、家老上妻小左衞門定直詣本源寺、祭宗祖、

○十六日、家老西村段左衞門時起詣本源寺、祭先祖・宗祖及戦士之霊、

○十七日、責訶納官村田上喜市・梶原喜右衞門、坐ヲ伐路傍列松也、

○官下問書、賀　幕府賜剣于三郎公、嚮三郎公之朝　京師也、會浮浪之徒将ヲ有ヲ事于　京師、幕府使ヲ公鎮ヲ之、事速平、　幕府褒ヲ之、故有是賜、

○十九日、因祖母夫人之命、修謫者島津大膳二百回

忌、追號生祥權現宮、新立石于葬處古田村、

○按察一向宗聞于　官、如例、

○二十八日、是月前港波戸成矣、安政庚申四月興役、至是凡閲三年而功竣、乃使後醍院真柱以邦語撰碑文、刻石建之、如祖母夫人之意與其功勞勲藉則後醍院氏言之、故不贅焉、其文曰、

○　三九　後醍院真柱撰赤尾木浦新波戸記碑文

赤尾木浦新波戸記

種子島赤尾木浦ハ、島々の船のひとの國に渡るも、ひとの國なる船とものこの島に至るも、其者ら此浦をなん出入のみなととし、また南の島々の往來ハ更なり、おほやけわたくし地方の船々のさかしまなる風にあひ、あらき浪にたゝよふも、此浦を便りに汐かゝりする處なりける、其みなとの御備、陸より申酉のかたにむかひて、諸子瀬といひて南北五十間余の瀬かたあり、船津なれハ石をたてたり、戌亥の方に陸に續ひて築立たる波戸の三十間余りなるかありて、築島と名付、諸子瀬と築島の内に船すへのみなとにはありける、然るに風波強きおりは、諸子瀬につなきたる船につなをかけ添んとしても、船の往かよひは更なり、水に馴たるものといへとも、渡る事のかたけれハ、みす〳〵陸へ打寄揚て難破に及事あまた度なり、今種子嶋の大うば君　松壽院殿は故宰相君のまさしき御はらからにて、おさなき御時より種子の御家ニ入おわまし、親君達の御慈しミを受給ひ、数多の年を經給ふニ付て、今はた幼き御うまこ殿の御うしろ見をなし給へれは、如何て御家の為、いみしからむ御いさをしなり、行て昔の御恵に報ひ給ひなんとの御志深くましまして、さき〳〵平山村田地障の汐入御直しの御事あり、又あたらしき塩濱を興し立給ひ、あるひハ藥園を開き給ふなと、何事もたやすからむ御わさなるを、惣て御自分貯へ給ふところの若許のこかねを出して事なし終給ひ、一嶋の民草永々其御恵ミを仰奉らむハなく、さてま

た近年

大殿に御願あり、赤尾木浦船かゝり宜からす、去により、波戸築立むとをもほすを、いかに御心付を賜なむと申上たまひしかハ、いにし未の年の八月、郡奉行黒葛原源助を遣わされ、諸の入目とも見賦ありて、明の春、忝しけなくもこかね千弐百両、内より恵ミ給はせたり、御自らハ申もさらなり、嶋中末々に至るまて、よろこひかしこみ奉り、則築立方取付の事ありて、地方検者野元三之助盛敏を　大殿ニ乞ひ給ひて、是か惣裁たらしめ、御内の司人夫〳〵之事執行ひて、諸子瀬を地盤にして築方相始り、又彼の築島の波戸にも築添あり、盛敏人となりこゝろさとく身すくやかに能其道に堪たるうへに、身を以而是に先たち、ミな月の照る日の焚かことくなるをも厭はす、[ママ]にいそしミいたつきつゝ、次々の司々はたおとらすいそしミ物するほとに、終によろつ足らぬ事なく築終たり、諸子瀬の新波戸、長四十弐間餘・横拾弐間・高さま其瀬の高低ニより、或ハ壱丈六七尺、或ハ壱丈なるもあり、築嶋の波戸、長八間半・横弐間・高壱丈九尺餘、石工・大工・木挽・鍛冶・水主・夫方ニ至迄、凡其数弐萬三千百三拾壱人、石を運す事四千七百七拾六艘に及へり、誠ニ旁慥なる事云へくもあらす、今よりハかきはに常盤にかけす崩れす、永く船つなきの憂もなかるへし、さ而ハ種子嶋のミならす、諸出入船の幸にして、千尋の海の底よりも深き御恵ミにそありける、あなかしこき哉あな賢哉、

文久二年壬戌五月

後醍院真柱慎誌

○同日、建二石於水天宮祠前一、記下築二波戸一者姓名上、家老前田新五兵衛宗誠、物奉行西村藏多時措、検者遠藤健太郎季行・吉良太郎氏章、筆算役中村小平太良恭・安藤桑之丞正行、丁夫長濱田喜八・濱田勘兵衛、小野石工權左衛門・權助・傳助・新太郎・良次郎・喜助外七人、串木野丁夫三之丞・甚藏・長右衛門・

三左衞門・新兵衞・小左衞門・與兵衞・伴次郎外二十六人、

○同日、野元盛敏・前田宗誠・西村時措・遠藤季行・吉良氏章・中村良恭・安藤正行建二石碑於諸子瀨一、其文曰、

○ 四〇 新波戸竣功碑文

恭奉　松壽院君德旨、爲見詒海港永世之利、築此波戸、以庚申三月經始、到今茲七月凡歷五百四十日、終功成之日、標石建焉、

○按二察一向宗一聞二于　官一、如レ例、

○八月朔日、二寺獻上、如レ例、

○四日、以三美坐平兵衞時止一爲二軍役方掛一、

○七日、與二濱田喜八染布一領・金七百疋一、濱田勘兵衞金七百疋爲二二十人格一、賞四築二波戸一之勞三也、

○同日、　官告、出水鄉士高牟禮助四郎盜レ馬逃去、索之不獲、

○八日、以二安納村横目鎌田助兵衞一爲二勸農方掛一、

○十二日、以二家老岩川十右衞門時令・物奉行西村藏多時措一爲二勸農方掛一、

○同日、下西之表山役野間孫市・川迎兵市各納二罰錢一貫文一、以レ伐二大野山之松一也、

○同日、錮二島間蠟燈屋下吏八板矢一兵衞于妙泰寺一、責二訶普請方下吏長野專之助一、各坐三簿中所レ記涉二不正一也、

○十三日、締方横目木原壯之丞歸二于麑府一、

○十四日、祖母夫人與二濱田彌兵衞金千疋一、賞下多年爲二附衆用聞一之勞上也、

○同日、藩士禰寢彦助歸二于麑府一、

○十五日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、如レ例、

○同日、以二家老前田新五兵衞宗誠一爲二役人上席一、與二川崎永作地一所及挂幅一軸一、中村小平太爲二代々小頭・馬役一與二金千疋一、賞下築二波戸於諸子瀨一之勞上也、

○同日、以三武田平藏・最上孫左衞門・古市杢兵衞・猶原直右衞門・鮫島村右衞門・下村爲右衞門・牧傳

之助一爲二田畝丈量筆算役一、大山小太郎地方檢者、

○十八日、與二浦星于日典丸船長樋口嘉吉及水夫等一、以三速往二来于麑府一也、

○二十日、下西之表催子岩吉納二科炭十五俵一且免二其職一、以三嚮滯二締方廻勤之用書一也、

○二十四日、濱津脇之平太郎・孫吉・休助納二科銭各十緡一、先レ是有レ故命漕二致其商船于府元浦一、僞稱下發二濱津脇一之日會中風水不上便、而竊至二于山河一販二其所レ載以射レ利、至レ是事露被レ坐、

○二十五日、地方檢者野元三之助及石工・丁夫等二十四人歸二于麑府一、

○閏八月朔日、以二遠藤健太郎一爲二普請奉行一與二挂幅一軸及金千疋一、吉良太郎代々小頭・兵具奉行、與二金千疋一、賞下築二波戸於諸子瀬一之労上也、

○六日、使下二物奉行西村甚五右衞門時哉・物奉行見習西村七郎時義一監中米倉之出納上、

○九日、以二安藤桑之丞一爲二地方檢者一與二金千疋及府元屋敷一區一、賞下築二波戸一之勞上也、

○同日、物奉行美坐源助時貞解レ職、

○同日、以二前田六郎右衞門宗成一再爲二用人一、遠藤健太郎・八板藤兵衞・河内九郎右衞門近習、日高平右衞門納殿役人、侍二母夫人一、

○同日、與二納殿日高十郎金五両一、嚮女兄波津多慶将レ下レ嶋也、使四三十郎一往迎三レ之、故有二是賜一、

○十日、以二山奉行河内勘十郎・平山一右衞門一、馬役上妻七左衞門・山崎彦兵衞爲二葛方掛一、

○同日、以二山奉行梶原伊左衞門・鮫島眞左衞門一爲二油木方掛一、

○同日、唐物横目大田休左衞門、附役川畑甚兵衞、締方横目知識半助・山口五郎兵衞来、

○同日、市来之善右衞門来、製二樟脳一者也、

○十三日、與二下西之表長吉金一両一、賞二先レ是數十年與レ製レ蠟也、

○十五日、以二西村藏多時措一爲二役人格一、而與二之金三両一、酹(酬カ)四向築二波戸一之勞三也、

○二十二日、　官布告曰、三郎公之在　レ京也、議奏

衆傳二　内旨一令二入朝一、本月九日、關白某卿於二近衛第一賜二烏帽子・直垂等一、乃服而入　朝、天勅懇到、且賜二　御劍一口一云、

○二十八日、行二首途之禮一、以三祖母夫人及女兄波津多慶将レ赴二魔邸一也、

○九月三日、祖母夫人與二學校所之書生筆墨一、

○四日、奉二安梅顔院・賢相院木主于本隆寺一、於レ是以二平山村之水田川崎一反九畦一、爲二之祭田一、祖母夫人之所レ命也、

○九日、令下二用人美坐平兵衛時止一讀中法章于廣間上、

○十日、以二醫者柳田喜碩一爲二牛酪製法掛一、

○十一日、以二家老岩河十右衛門時令・物奉行見習西村七郎時義一爲二水車方掛一、

○同日、祖母夫人與二西村藏多時措金五百疋・挂幅一軸一、賞下補二平山村佐山新田之溝洫一之労上也、

○十二日、以二用人種子島才七郎時習・西村城之助時樹一爲二學校所掛一、令レ教二授生徒一、

○十四日、以三普請奉行美坐治右衛門一爲二水車方掛一、

○十五日、祖母夫人買二大日本史百巻一、賜二之於學校一、

○同日、祖母夫人建二如意觀音石像於本源寺門下一、嚮築二波戸于諸子瀬一也、采二石於山下寛齊・濵田新兵衛宅地垣下一、適得二白骨數片・錫笄一枝一、祖母夫人命埋二之故處一、使下二上行寺一司中香花之事上、因與二之金一圓一方一以爲二祭資一、歳々以二九月十六日一爲二祭日一、及立二石像于其上一、

○同日、繫二下西之百姓權次男於室牢一、

○十七日、與二赤米二斗于飛船々長某一、賞三速往二来于魔邸一也、

○十八日、以二物奉行西村甚五右衛門時哉・醫師田上玄隆一爲二牛酪製法掛一、物奉行見習西村七郎時義爲二葛方掛一、

○二十二日、以二五穀不登一減二諸村大山野之租一、各有レ差、

○二十四日、以二日高平右衛門・緒方吉兵衛一爲二本出米方掛一、

○山元彌吉者詣二魔邸一、請丙納二價金許多於府庫一而權島

中生蠟甲身自到島而製乙之、其法用二輜車一人力省而功多矣、政府許レ之、

○十月五日、偸児盗二米倉銭一百六十貫文一、捜索不レ獲、

○同日、由二母夫人特旨一、除二坂井村百姓半助丁役一、賞三多年爲二輿丁一也、

○六日、魔人山元彌吉・田布施之權四郎等来、創二水車製蠟之法一、

○七日、祖母夫人使下二東市人榎元新藏一権甲唄貝上、賞二多年公務不レ怠也、

○九日、名代家老西村段左衞門時起詣二本源寺一、盛下祭二宗祖一之菓子上、

○十一日、名代家老上妻小左衞門定直詣二本源寺一、祭二宗祖日蓮一、

○十二日、名代家老前田新五兵衞宗誠詣二本源寺一、祭二宗祖一、

○同日、以二小田宗助一為二勝手方吟味役一、

○十九日、與二家老知覽才兵衞行修金十五圓一其僕與金二両・筆吏猶原直右衞門金十圓、以レ遣下二両人大坂一而監二嶋中産物價銭之出納一且買甲女兄嫁装上也、

○同日、褒二詞坂井村足軽上浦小太郎一、本月十四日、母夫人詣二正建寺一、有二一士人一、摩二母夫人之儀衞一、騎而過小太郎直前、挽二回其馬一乃叱而令レ下、後士人身親詣レ邸謝レ之、當日使下二士人一不レ失甲禮于我上者小太郎之所レ致也、故有二此賜一、

○二十一日、以二日高杉右衞門・遠藤壮兵衞・緒方善藏・羽生半左衞門・美坐織太郎・河内覽右衞門一爲二田畝丈量掛一、

○二十六日、以二下村佐一郎・河内九郎右衞門一爲二田圃丈量掛一、

○同日、與二材木船永徳丸船長新原次平及水夫浦星一、以レ運二送魔邸長屋造営之材木於魔府一也、

○晦日、魔府市人木村喜四郎・伴當川邊之長兵衞・新助来、以レ賣二合藥一也、

○官告三　三郎公更二諱久光一、

○官権二嶋中死牛馬皮一、原文挿二入于左一、

○ 四一　新納休右衞門達書

其許牛馬皮之皮剝等不行届、捨皮過分有之段相聞得、格別成品物、今形ニ而者御國損之事候間、屹与御吟味ニ相成、此節伊集院町之清兵衞江皮取始末等ニ付、穢多四人召列致下島候様被仰付候、全躰種子島之儀、已前より穢多無之、自然皮剝方不頓着候聞得有之候、試同前ニ被差下、折角行届候様との御趣意ニ候得者、往々右之者共仕付第一之事候、然者、右地茂不相馴所江致下島候ニ就而者、何事も丁嚀申諭、おのつから作式等も可致者共ニ而候間、作場地位好可有之、善悪ニ依、夫々ニ仕付治定も可致訳も候間、得与場所柄致吟味、先キ〳〵居付相成候處見合、引入方可有之、追々者家内迄も引越候様可相成候、尤右之者共、着涯より不如意差見得、飯料等申受可申出儀可有之候間、相當之直段を以而、迷惑不致候様何篇氣を付、程能取扱可有之候、且種子嶋之儀、年中高直之由、御當地より買下諸人一統不勝手之訳ニ付、蔵方計水車取仕立、油製法有之ニ付者、嶋中菜種子作繁栄不致候而者不相成事候得者、穢多被差下候儀者幸之事候間、いつれ肥者建を不相用候而者、存分作得も有之間敷候間、是分者馬骨取扱方人々難渋狩候由候得者、穢多共致取扱置候而、入用之者江相當之直段を以賣出候得者、作人者勿論、穢多家業ニも可相成事候間、心得違致自侭差支之儀共有之候得者、不差置唐物締方并拙者方江も可被申出候、以來牛馬皮之儀ニ付分兼候儀者、時々唐物締江差圖を得、手抜無之様可致候、荒々拙者よりも分而申越候様致承知候間申達候付、屹与不行届無之様可被取計候、以上、

琉球産物方掛
御徒目附勤
新納休右衞門

戌十月
種子嶋
牛馬皮掛

○十一月三日、以二中村小平太一為二近習役一、

○同日、與二國上只次米二斛一、以三側用人美坐七郎右衞

門時資歸二省親一、使下二只次一代上レ之、故及レ焉、

○官下二議書一、原書挿二入于左一

○ 四二 川上久封達書

一年頭御式・初而之　御目見・諸御禮事等、是迄長袴用來候面々、素袍・烏帽子、

一素袍之節迄熨斗目、

一半袴之節、以來服紗物、

一元服之節、奏者都而素袍・烏帽子、

一七夕・八朔、白帷子無用、重陽、青之物茂同断、

一御祭礼并御法事等ニ付、

御名代迄素袍・烏帽子、其外御代参又者詰々之面々半袴、

但　重立候御祭礼ニ付、御家老御代参ニ而長袴用來候分者素袍・烏帽子、

一足袋不及願、勝手次第相用、奏者之節同段、

一月次御礼之節、御一門方・島津圖書殿(久治)名披露ニ不及、御禮着坐之上、御家老御取合是迄之通、

一獨礼之面々、奏者名披露ニ不及、

一若菜之御祝儀、登　城ニ不及、以使者可被申上候、

一初而之

御目見被仰付候節者、冬計足袋可相用候、

一御一門方其外、屹与立候御礼之節者、是迄之通奏者名披露、

一御一門方継目御礼等之節者、家來之内三家并差次三家、御大刀進上ニ而御礼申來候者、長袴ニ不及、以來半袴、

一毎月廿八日、月次御礼不被為請候、

一十二月廿七日、御一門方・嶋津圖書殿・嶋津又六(久明)郎一列、以使者歳暮之御祝儀被申上ニ不及、廿八日登　城、歳暮之御祝儀被申上、出仕無之面々者以使者被申上、大目附以上茂廿三日歳暮之御祝儀可被申出候、

但　十二月晦日、大目附以上歳暮之御祝儀申上ニ不及、

右之通、來春正月より被相替旨被仰出候、此旨向

江不洩様可被致通達候、

十一月　（川上久封）筑後

○　四三　藩達書

一御軍政之儀者

（島津斉興）金剛定院様御深慮を以、慶長以前

御三代様之御藩法被為基、西洋之砲術御採用ニ而、

御変革相成候処、

（島津斉彬）順聖院様分而御心志を被為碎、調練等時々御指揮被

為在候得共、未半途ニ者不至事ニ而、実以遺憾不少

次第ニ候、然處、近年外夷愈猖獗之姿致増長、漸危

急切迫之世態相成候付而者、軍役向一涯嚴重無之候

而者不相濟事勿論ニ候、於當國者、毎事西洋人之擧

動ニ傚ひ候儀者、菟哉角人心氣受薄ク、迚茂十分之

境ニ至リ難ク、別而令心痛候、依之猶亦致熟考、慶

長以前之御旧制ニ随ひ、軍備改革申渡候間、軍役方

之面々、綿密令評議、趣意致貫徹候様可取計候、尤

攘夷之儀、今般

勅使を以而關東江被仰進候由致承知候、若夷賊掃除

之台命相達候節者、其通速ニ被行候様、手當不行届

候而者、奉對　天朝・幕府無申訳事候条、此旨厚心

得、聊緩怠之儀有之間敷事、

但

臺場備之大砲等者、是迄之通、西洋之規則ニ

基可申候、乍併是迄萬事彼法制を學候而者、

我國力ニ不應儀も可有之候間、右等之處深く

相辨、成丈簡易ニして行れ安き様可致折衷候

儀専要与存候事、

戊

十一月

○十六日、錮ニ納官村足軽日高新右衛門于本法寺一月十二、

前爲ニ庄官一之日、偸ニ用米四石九斗四升九合四勺四

撮・用銭二十四貫九百九十四文一、雖下到ニ今年一而

納上レ之、以ニ其跡渉ニ不正一故及焉、前横目日高五左

衛門于善林寺、長深田五平次于遠妙寺、徳永儀右衛

門于本妙寺、春田仙左衛門于善福寺、牧瀬彦右衛門

于浄光寺、春田甚左衛門于本隆寺、春田休左衛門于某寺各三七日、且褫二彦右衛門・甚左衛門・休左衛門横目職一、坐二計簿不レ正也、

○二十日、流人頴娃松元名頭仙藏病死、吾横目日高源右衛門為徳・美坐平兵衛時止検レ之、聞二于　官一、

○二十日、　官遣下二伊集院町之萬助・休太郎・良八等一権中島中之馬皮上、

○二十四日、與二東町之喜太郎米二斗一、賞三前締方横目大田氏臥病之日、喜太郎夫婦善視二其病一也、

○二十五日、葛根山方清右衛門・五郎助等来、

○按二察一向宗一事聞二于　官一、如レ例、

○十二月十一日、修二本光院殿日瑞大居士四十九回忌於本源寺一、家老森休兵衛友習代二久尚一、物奉行西村甚五右衛門時哉代二祖母夫人一、物奉行羽生仙藏能通代二母夫人一、用人上妻直藏定利代二女兄初一、知覽覺之丞行義代二女兄雄一、各進レ香、法事奉行日高源右衛門為徳・種子島平左衛門時宜、霊膳奉行知覽孝左衛門・種子島十郎左衛門、寺僧凡三十名、

○同日、赦二納官村横目牧瀬彦右衛門・春田甚左衛門・春田休左衛門・春田仙左衛門・徳永儀右衛門・日高平左衛門・長深田五平次禁旅入者寺、蜑泊之善吉行者一、以レ修二本光公之四十九回忌一也、

○十三日、上妻源左衛門献二斗搗餅一、如レ例、家老森休兵衛友習、

○十五日、使下二家老上妻小左衛門定直・物奉行西村休八時乗・物奉行見習平山佐次右衛門友直・用人上妻九郎左衛門・普請奉行子嶋猪右衛門一、與中聞根寢(ママ)氏大銃鑄造之事上、

○十七日、以二上妻玄清・河東静鳳一為二製薬方掛一、

○同日、與二上成傳左衛門・平山村羽生十兵衛仕明高各五斗所一、同村山口七左衛門為二一世郷士一、賞丁向使丙此輩一監乙平山村之鹵田甲也、祖母夫人之所レ命云、

○二十三日、女兄初嫁二嶋津又六郎久明一、

○二十七日、三寺及二十人・鍛冶献上、如レ例、

○同日、西村城之助時樹・美坐源助時貞為二軍役方掛一、

○歳暮之規式、如レ例、

（表紙）

文久三年　種子島家譜　廿五代久尚　七十九

○文久三年癸亥正月元日、國上村獻二野老一、
○二日、國上村獻レ鯉、現和村庄司浦獻レ鰒、
○同日、覽レ馬、名代家老上妻小左衞門定直、馬役上妻七左衞門、
○同日、八寺進上、如レ例、
○四日、上之郡庄官・小觸進上、如レ例、
○六日、初符、名代家老前田新五兵衞宗誠、物奉行羽生仙蔵能通、用人知覽覺之丞行義、組頭日高源右衞門爲徳・種子島郷兵衞時加・美坐半兵衞時止、山奉行日高平右衞門・平山一右衞門・梶原伊左衞門・知覽才太郎・鮫島眞左衞門、西之表庄官獻二酒肴一、如レ例、
○同日、以二本月十日一爲二誕日一、實九日也、有レ故改レ之、
○七日、中之郡・下之郡庄官獻物、如例、
○十一日、奉二桝形守衞之命一、
○同日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、如レ例、
○同日、甲冑之賀、如レ例、
○同日、軍陣・温坐祈念、的始如レ例、射手一番（西村四郎八・子島龍助）、二番（上妻曽兵衞・下村源次）、三番（武田彦左衞門・八板十郎）、名代家老前田新五兵衞宗誠、用人上妻九郎左衞門宗富、
○十三日、　官創鑄二琉球通寶錢一、一文當百二十四文云、
○二十七日、勝手方奏曰、凡鬻二貨物于大坂及長崎一也、船長・水杪等傭錢定額之外加二與二貫文一云、許レ之、
○同日夜、偸児入二普請方吏署一、攘二筆吏西村清助錢三

十二貫文餘、即捜索之、不獲、

○二十八日、以子島猪右衞門為母夫人之納殿役人、

○二月二日、遣記録方掛田上助市于麑邸、抄録諸古簿中所記要領于別本、近來國家多事、　官多所沿革、因檢我家舊規關係公事者、以令聞之頻頻有之、而簿書浩繁、不便繙閲、故有此擧、

○二月四日、使家老岩河十右衞門時令與聞田圃丈量之事、

○九日、以日高十郎為野間・増田税吏、以下多年為祖母夫人納殿而屢役于麑府也、

○十四日、以岩河勇八郎為小姓、

○十五日、創建究竟院殿日等大居士之別廟于本源寺射場故趾、即以神之禮祭之、先是祖母夫人念公之功德大而遺愛在民焉、因有此擧焉、於是使史臣撰神号、乃撰數語以上、曰功德、曰馨德、曰栖林、史臣附奏曰、栖林之字公致仕後別号、今以之為神号頗似非禮、雖然又非如諱之字不可以不諱也、且栖林之字後人至今知而稱之、今從其知而所稱者、亦所以不忘公之德乎、但如其可否則非臣等所敢決、卜之於廟前如何、祖母夫人乃使籤之、籤亦得栖林之字、遂謹上号栖林大權現、

○十六日、以上妻源左衞門・日高孝兵衞為内用方掛、

○十八日、以醫山下復生為製藥方掛、増田村郷士牧瀬十郎太為樟腦山掛、

○十九日、獲鯨魚于長濱、

○二十二日、頃者、夷將寇薩州、　官屢下令嚴瀕海守備、組頭因建議曰、本島海外孤懸救援不及、非号令已定於平日、則恐臨變人心疑惑也、請、置軍役署、申明号令、以備緩急云、政府可之、軍役方掛家老西村段左衞門時起・森休兵衞友習、物奉行・組頭以下至諸司、各有軍役方掛、又以西村城之助時樹・美坐源助時貞皆韜鈐家、特命參預謀議、

○二十七日、與金一枚于醫子島桃園、前此創置藥

園、因遣桃園如大坂求藥種、且習采藥之法、桃園不乞旅資于府庫而辨事亦精細、歸來得益不少、故有此賞、

○同日夜、濱津脇水車方失火、前此政府使和州人山元矢吉以水車製蠟、以濱津脇脇之川地形便水為其所焉、謂之水車方、費財巨多、至此火、前功盡廢、

○晦日、　官告、頃日英夷抵長崎請測量于種子島・屋久嶋、鎮臺不許、夷船又轉指江戸云、或至種子島・屋久島等亦未可知、若至則慎守平日所令勿輕啓釁端云、

○同日、　官以三郎公拜　天賜御劍及褒勅赦于國中流人深町良右衛門・金四郎・是枝彦右衛門・牧野十左衛門等歸于麑府（嘗被放、而來者）

○同日、　官許商人恣買他國米、以往三年為限、

○同日、先是　王使東下下攘夷之詔、　幕府奏以下博議於衆決策而後從事、　官因下令曰、本藩四方海岸實是虜之要衝、不可守備一日而緩也、凡士分以下至賤隷、有所建議請獻之、勿有隱諱、

○祖母夫人以　前太守齊宣公之夫人所賜龍門布賜之、使作戰袍（布繡富士山、有公親筆言葉誰寫繪五字、蓋訓古登能波和多賀宇津志恵能富志能山、讀谷山王子誹諧之句云、）

○點檢丁夫・病夫聞于　官、如例、

○按察一向宗聞于　官、如例、

○官減年頭・八朔及五節句之賀儀、記于左、

○　四四　島津久徵久昌外四名連署達書

一年頭・八朔・五節句、御一門方以下諸役人迄供廻等之儀、以來都而朔望付、登　城之節通り、

一大番頭以下諸大身分、御側役以上寄合并迄、狹箱為持候儀、御代参又者諸御禮事等被仰付、入用之節計、

一御一門方初其外、御直元服又者隱居・家督等之御禮被仰付節者、夫々家格相當之供廻可被召連候、

一小番家格之内、御直元服之御礼且諸御役人御使者并檢使等相勤候節者、都而是迄之通、

右者、御一門方初供廻り等之儀、去辰之年被定置候得共、以來右之通被仰付候条、此旨向々江可致通達候、

二月

筑後（川上久封）
但馬（川上久運）
摂津（喜入久高）
式部（川上久美）
大蔵（島津久徴・久昌）

○官使下二大久保武兵衛者一権中島中所レ産海人草上、

○三月二日、與二銕匠之長八板銕蔵上下地一端一、賞二作レ銃而獻レ之也、

○三日、使下二用人日高源右衛門為徳一讀中法章上、

○同日、與二艾餅于三寺一、慈遠寺獻二同品一、

○同日、西之表庄官賀二瀬引一、如レ例、

○七日、以二物奉行羽生仙蔵能通・平山佐次右衛門友直、見聞役上妻直蔵定理、普請奉行子島猪右衛門・美坐治（ママ）右衛門一為二銕山方掛一、

○十四日、與二米一斛・染布一端于田上助市一、多年司二記録一執レ職精勉、且嚮令レ之赴二麑府一抄下録麑邸古簿中所レ記關二係國家之事一者上、不レ日而成、至レ是因レ病請レ解レ職、不レ許、慰労懇切而有二此賜一、

○十八日、栖林大權現廟落成、奉二安神主一焉、此日許二貴賤各拜詣一、家老・物奉行獻物有レ差、後獻二神符及粢盛于本府両邸一、

○同日、與二上下地一端于大匠柳田仙五郎、染地一端于牧瀬増五郎墨大工、金五十疋于武田善蔵同寄一、賞レ造二栖林大權現廟一也、

○二十日、三役覽二諸士武技于廣間一、事畢各褒二詞之一、

○二十一日、公儀流人智周死、聞二于　官一、如レ例、

○二十六日、　官告、金幣・錢幣改二其直一、金當二錢八貫一、四文錢當二八文一、銅錢當二四文一（惟銕錢以一文行）、

○同日、以二莖永村馬場藤蔵一為二作見舞一、以三多年為二母夫人之小奴一也、

○二十七日、兵具奉行長野平左衛門・吉良太郎、普請奉行岩河嘉兵衛・美坐治右衛門、馬役中田市蔵為二

軍役方掛、

○三郎公下二自手筆令一、令曰、頃日英夷戰艦抵二江戸・横濱一有レ所二要求一、幕議未二之許一、聞、彼專以二生麥街之事一為レ辭、果然邪則天下大變殆自レ我激二成之一也、可レ不レ懼乎、夫當時之事、我直彼曲、雖レ然夷情狡詐、非下可二以レ理説腹(服)一者上、若有二勢不レ得レ已者一、則如二我藩一特率二先他藩一、粉骨碎身攘二蕩夷虜一、以報二國恩一之請、

太守公附以二自手筆令一、令曰、今般夷以二生麥街之事一訴二于　幕府一也、三郎公因所レ布之令可レ謂二允當矣、夫於二　皇國大患自レ我啓レ之、則豈可レ不二憂懼一乎、雖レ然生麥街之事、我有レ辭矣、令二彼服一可レ必矣、如不レ服則武門先習、惟有レ戰耳、請、闔藩奉二三郎公之尊旨一以要下殄二滅夷虜一而報上二天下國家一、而至二於戰守之權一則待二令發一而後動、未レ有レ所レ令則雖二夷萬艦來脅一、泰然待レ之勿二輕舉妄動一云、

國老連二署其尾一、亦奉二承二公之尊旨一也、

○納二三狩所レ獲鹿皮于　官一、

○四月三日、獵二馬毛島一、採二鹿茸一以供二藥物一也、家老西村段左衞門時起・物奉行西村七郎時義・用人種子島鄕兵衞時加・山奉行平山一右衞門等赴焉、

○同日、三役・組頭覽二射術一、西村善太郎雙箭命レ中、賞以二鷲羽一、組頭賞以二弓弦一、且褒二詞師家羽生助左衞門・種子島鄕兵衞・西村城之助一、以二其門人各善レ射也、

○十日、以二渡邊早右衞門兼重一為二物奉行見習・改革方掛一、

○十一日、買二別墅于吉野村實形(方)一、以三英夷將二入冠(寇)一、為二避レ兵之地一也、券書記二于左一、

○　四五　畠地・家売切証文

賣切證文

一下畠五畝廿八歩　鹿児島吉野村之内　萬浮免

一下畠壱反弐畝拾弐歩　鹿児島吉野村之内　萬浮免

一家壱軒　但　建付之侭

代金七拾両
錢ニシテ五百六拾貫文
亥四月十一日　有川仲蔵印
種子御屋敷
御役人衆中

○十六日、覽二礮術一、褒二詞師家上妻惣左衛門及其門人等一、以三各善二礮術一也、又以三桑山直太郎・柳田今右衛門年七十以上而能手發二大銃一、賞以二火縄廿曲一、

○二十日、魔邸遣レ書議曰、近日巷説夷将二入寇一云、官亦下令曰、上下會所鼓聲起則市人宜二速避レ兵、云、若變發二于不測一、則邸亦不レ可レ保、方今　主公尚幼、将下買二別墅于實形(方)一而為中保全之計上焉、且本邸衛士寡單、請、今春以往諸役人定員外使下二郷士八人・圍人一人・人足四人一出レ府以備中守衛上云、政府可レ之、

○同日、祖母夫人下レ命、使三諸村毎家飼二鶏三頭一而収二其卵一鬻二之他州一、以助二貨殖一、倣二筑前人一也、

○二十四日、族人北条織衛密命二所司一曰、夷若至二種子島一乞二薪水牛馬一則與レ之固其宜也、雖レ至レ掠二奪人類一、唯以レ杖鞭レ之、使レ彼不レ能二掠奪一而已、勿三敢用二兵器一云、

○同日、魔人前田四郎八川上但馬家臣・藤山利右衛門酒匂太郎左衛門家臣等其餘十人、請下來収二往年所レ采松板一且焼上レ炭、許レ之、

○同日、知覽才右衛門・河内市兵衛為二兵具奉行一、船奉行日高孝兵衛為二軍役方掛一、山奉行日高平右衛門為二改革方掛一、

○同日、小姓羽生伊兵衛・河内市郎為二祐筆一、

○同日、西村城之助時樹為二用人一兼二組頭・横目一、

○二十五日、與二日高仙兵衛・霧田直兵衛金各一両一、以下嚮所レ買二女兄初雄之嫁装、其價直出納繁重、因使中二人為上二之清算一也、

○二十六日、以二平山村百姓善四郎一為二代々足輕一、命二氏盛村一賜二下々田一所一、以三多年為二祖母夫人與丁一也、

○二十八日、頃日　官下レ令嚴二軍伍一檢二禄田多少一、以出レ兵各有レ差、因賜二軍帖一封一、曰二之私領備組一、其法與二舊制一頗異矣、如二本島一則出二戰士六十人一、六十人外有二隊長一、有二副隊長一、隊長曰二物主一、副隊長曰二談合役一、其他主二資糧・器械一者、自二物主一至二役徒一通計百有余人、謂二之一手一、手猶レ隊、於レ是我所司相議、舊制三組外別立二五隊一、自二第一隊一至二第五隊一、更番各有二直月一、　官徵レ之則直月者充二其役一為レ法焉、第一隊物主平山佐次右衞門友直・知覽覺之丞行義、談合役上妻直蔵定理・長野平左衞門・羽生半左衞門、第二隊物主種子島才七郎時習・西村城之助時樹、談合役日高源右衞門為德・田上助市、第三隊物主平山寛蔵武肅・美坐平兵衞時止、談合役上妻九郎左衞門宗富・美坐源助、第四隊物主前田六郎右衞門宗成・西村十郎次時義、談合役渡邊勘右衞門讓・種子島十郎左衞門、第五隊物主平山藤左衞門良友・種子島郷兵時加、談合役高崎吉十郎・日高杉右衞門、

○晦日、與二上下各一領于樋口孝右衞門船長・八板覺兵衞召替船長、以下祖母夫人及二女兒初雄赴二于麗府一之日為中船長上也、

○幕府下レ教曰、以二五月十日一將二與レ夷絶一矣、諸藩守備不レ可レ緩也、又曰、一橋中納言奉二攘夷之　勅一歸二于關東一也、　太守公亦申レ之、以二自手筆令一布二之闔藩御領國中、

○族人北条時有下二條制一、記二于左時時有與聞我家政、

○　四六　北条時有申渡書

一此節御軍役御手當向等之儀、細々被仰渡候、御書付之寫、交代役人江相渡候ニ付而者、何篇仰出ニ基き、嚴重無手抜遂吟味可致取扱事、

一御幼少様之御事故、拙者存慮之次第、左條之通相達候事、

一古來御代替之節者、諸士誓詞被仰付哉与聞及候得共、其儀なく由ニ付、何様之訳ニ而是迄無之候哉、何分可申出事、

一役人其外諸役場、是迄年功順番を以申付置候処、此節以來、勤方精疎人柄宜敷者、役人中致吟味申出候上、夫々役儀可申付候、

一學文・武藝兼而心掛致修行候者於有之者、向々より取しらべ申出候ハヽ、勤方被仰付、又者御褒美等可有之事、

一旅行之節、餞別并土産物、親子兄弟之外堅停止之事、

一屹与立候祝ひ事等之節者、吸物壱ツ、取肴二三種、徒ニ酒會致間敷事、

右条々取違無之様屹与相守、不洩様可被申渡候、

○五月五日、慈遠寺獻粽、與同品于三寺、

○十三日、以家老前田新五兵衛宗誠・森休兵衛友習・西村蔵多時措、物奉行時任丈左衛門時喜・西村七郎時義、見聞役上妻直蔵定理・平山藤左衛門良友・前田六郎右衛門宗成・遠藤壮兵衛季恭等為改革方掛、初諸司憂府庫日匱乏、因欲省費節用儉素率下以謀貨殖、曰之改革、至是以其無効驗、族人北条織衛與諸司相議、復建新制數條、曰之又々改革、船手・普請方二署更筆吏稱檢者、擇廉吏為之、而年與俸米各四斛于見聞役、各五斛于檢者、當其役于魔邸、則見聞役半歳四斛、檢者半歳五斛為例、乃使宗誠等專管之、

○十七日、年與米二斛于本源寺、以令司　栖林大權現宮祭祀也、以往為例、券書記于左、

○　四七　森友習外四名連署寄附証文

本源寺

真米弐斛宛

右者　御隠居様思召を以

栖林大權現宮御造営有之候付、時節之御祭者勿論

御花香又者掃除等ニ至迄、永々行届候様被仰付、

本行之通、御佛供米として年々御寄附相成候、仍

而證文如件、

前田新五兵衛

宗誠（花押）

上妻小左衛門
定直（花押）
岩河十右衛門
時令（花押）
西村段左衛門
時起（花押）
森　休兵衛
友習（花押）

○二十七日、下レ令、以往停二二十八日諸士賀儀一、蓋準二本藩一也、
○二十八日、藩士禰寝彦助銜レ命再來作二鳥銃一、
○同日、用人上妻九郎左衛門宗富為二井（伊）關村掛一、前田六郎右衛門宗成納官村、種子島郷兵衛時加安城村、
○晦日、復使下二家老岩河十右衛門時令・物奉行時任丈左衛門時喜・組頭西村十郎次時義・普請奉行國上只次一接中待藩士禰寝氏上、
○囚者平五郎死、初平五郎有姉、曰二彼岸一、有レ故自放二火其屋一、平五郎搏二殺之一、即下二之獄一以待二官裁一、至レ是死、聞二之官一、
○六月四日、長野善之進・羽生勇太郎為二樟脳山筆吏一、
○六日、先レ是國人芝仲左衛門因レ疾請レ解レ職、許レ之且與二錢三十貫一、賞下自二慈詮公之時一至レ此奉レ職不上レ怠也、
○八日、公儀流人兼吉・由松、油久村百姓良太郎・其児良市（實西之表村百姓權次・其子權助）破レ獄脱走、至二安納村花木浦一、攘二一漁船一而入レ海、捜索不レ獲、事聞二于官一（翌年官告）（捕由松于大坂）、
○同日、定府小姓河内市郎辭二其定府一、許レ之、有司相議曰、如二定府一其旅費與二春秋更番者一大殊矣、其俸亦不レ可三以無二加賜一也、乃追下檢其為二定府一歳月上而年與二米一斛一、
○十二日、一向宗流人肥後市郎左衛門死、横目美坐平兵衛等檢レ之、聞二状于官一、
○十五日、高崎吉十郎・日高杉右衛門為二組頭一、上妻休蔵・西村四郎八為二馬役一、

○官赦二吾臣上妻増五郎一令レ帰、先レ是有レ罪流二于鬼界島一者也、

○官停レ納二租米于大坂一、原書記二于左一、

○ 四八 川上久美申渡書

御一門方并大身分・一所持之面々、持高相掛る諸出米之内、依願御仕登米大坂御拂、直成三ヶ月廻を以切手米上納被仰付置候処、當秋より御仕登米御引取二付而者、右切手米上納直成取究候儀不相成候付、惣而御免被成、御當地諸郷御蔵々江現米上納被仰付候条申渡候、承向江茂可申渡候、

六月　（川上久美）式部

○二十六日、藩士高田十郎左衛門授二射術於我臣西村城之助時樹一、

○二十七日、女兄雄嫁二鎌田杢之丞一、

○同日、英夷以二戰艦七隻一侵二麑府一、麑府戒嚴、久尚未レ堪二戎衣一、因與二母夫人一避二兵實形（方）別墅一、側用人美坐七郎右衛門時資、醫柳田齋栄、馬役笹河五兵衛、小姓羽生伊兵衛・白男川龍次郎・岩河勇八郎・緒方直十郎・白男川熊太郎、小奴羽生清次郎、圉人古市杢之助、槍持某従二久尚一、納殿役人下村要志、納殿長野惣右衛門、包丁柳田善平、小奴徳永彦吉・羽生彌兵衛、道具番下西之表鮫島與平次、表足輕長野小三次、輿丁一人従二母夫人一、此日祖母夫人適在二千石馬場鎌田氏一、聞レ變而不レ帰、遂避二于島津又六郎田之面崎別墅一、納殿役人見習牧藤十郎、納殿安藤桑之丞、小奴日高菊之助、包丁池村辰次郎、人足両人従レ焉、家老上妻小左衛門定直・森休兵衛友習、物奉行西村次郎兵衛時知・時任丈左衛門時喜、用人日高源右衛門為徳・西村城之助時樹、近習河内九郎右衛門、小姓河内市郎、諸司西村彌七郎・知覽才右衛門・河内勘十郎、其餘中村小平太・鮫島有右衛門・鮫島直市・緒方覽蔵・日高幸内・牧覽左衛門・武田平蔵・武田彦左衛門・上妻良太郎・鮫島直左衛門・鮫島周八・笹河岩次郎・徳永淺之助・越山休兵衛・

二之宮源之丞、守衛郷士上妻杢左衛門・徳永孝助・徳永平治・遠藤新助・遠藤七郎次、足輕榎本覺之助・鮫島勘太郎・笹河覺次・古市勘十郎・古市杢助・稲木覺兵衛（衛覺兵衛削士、籍為足輕者）、祈念僧扇樹院等衛二本邸一、定府家老知覧才兵衛行修、納殿役人緒方善蔵、納殿笹河友助、其餘河内矢一郎・緒方仙左衛門、郷士田上覺次・長山市太郎、包丁牧瀬新七、足輕柳田彦次郎・鎌田新蔵、市人荒木平八・榎本彌平・向田新八・吉留庄太郎衛二濱崎邸一、此日　官使下二譯人一責上レ夷以三其出二無名之師一、夷以二生麥街事一藉レ口、初三郎公朝二京師一、遂之二江戸一、路過二生麥街一適有二英夷二名一、衝二儀衛一而過、公怒使下二奈良原某一薄而斬上レ之、所謂生麥街之事是也、至レ此　官答以下衝二儀衛一者斬レ之、是　日本之國法上、夷不レ服、欲下使三レ　官出二金若干萬両一償二其濫殺一人之罪一、而後取レ成而還上、　官彌縫拒レ之、自二二十八日一至二七月朔一和戰之議未レ決、

○七月二日、夷攘二重富港所一繫之蒸氣船三隻一、挽レ之至二前港一、其二火而放レ之、其一碇而燒レ之、於レ是官遂下レ命擊レ之、此日風雨時冥、礮雷震レ山、黑煙塞レ海、彈丸雨注、沙石掀舞、夷艦凌二絶高濤一、輪換發レ礮、稍進逼二祇園洲一、會二潮退一艦膠レ沙而止一、頗有二可レ乘之機一、諸艦急折旋而擁二護之一、發レ礮益急、蓋防二　官兵襲擊一也、祇園洲礮臺為三其所二震裂一、戰士氣頗沮、税所某者奮而出死レ之、後　官賜二米于其家一、以表二死節一云、夷遂放二火箭一燒二向築地一、時風益急煙焰漲レ天、上町盡為二烏有一、延至二浄光明寺一而滅、至レ夜戰止、此戰也、夷避二諸臺礮門一、七艦悉萃二祇園洲一、故諸臺火力不レ及焉、祇園洲受レ丸最多而戰最勤矣、

○此日、我本邸使下二用人日高為徳一守中表門上、西村時樹守二裏門一、礮丸鳴動過二頭上一者不知二其幾千萬一、衆皆奮勵死守焉、既而上町火起烈焰及二邸北隣種子島氏・限元氏一數矣、於レ是撤二表門守一盡萃二裏門一、諸司以下親操二水器一以撲二滅之一、邸因得レ保矣、稲木覺兵衛・僧扇樹院等周馳頗健矣、濱崎邸與二夷艦一相去數十歩、人之耳目幾可レ辨、戰酣有二一巨丸一至、碎二門扉一洞二

屋楹震于邸後土障、土障圻數丈、

○三日、礮戰食頃夷艦轉指沖小島、島有兵守焉、隊將青山某素善礮者、當此時前後照星已定、以待艦至、艦至、礮發火函破裂、聲如震雷、殆沈没矣、夷急使別艦挽而避焉、餘艦環島仰攻、島小而峻巔凹、丸至高者過之、卑者礙于岸、我礮下瞰而發、幾無虚丸、夷終敗退、此役也、夷執譯人松木某・蒸氣船之奉行五代某等以之而去、両日之戰、我両邸無一死傷、衆皆相賀、

○七日、奉勇猛公戎衣于廣間、家老拜之、如例、

○十一日、官命改國分郡為國府、將城而徙治焉云、數日而事又寢、

○十七日、使三寺僧誦佛經于慈遠寺、又使羽生助左衞門・種子島鄕兵衞終夜連射以祈運祚、

○十九日、以牧瀨玄貞為樟腦山掛、

○同日、以石黒小四郎・吉良宇角為檢者、年與俸米五斛實筆吏也、謂之檢者、詳于本年五月十三日、

○二十日、以用人前田六郎右衞門宗成為慈遠寺寺社奉行、上妻九郎左衞門宗富大會寺寺社奉行、遠藤壯兵衞組頭、肥後四郎左衞門・前田太郎右衞門・上妻鄕太夫並納戸奉行、西村仲左衞門・美座矢太右衞門・種子田健助並兵具奉行、上妻鄕右衞門山奉行、岩河九郎右衞門為馬役、

○同日、船自大泊至告鹿子島戰状且曰、變未可止於此、雖公今在實形(方)別墅、地去鹿子島不遠、將復如末吉若敷根云、於是政府議其可否、或可焉、或否焉、否焉者曰、公既有祖宗舊封可當有虞之日、安使公流寓于他土哉、且社稷人民棄而不守、人將謂之何、可焉者曰、本島海外孤懸、若有不測變、將何避焉、不如、姑在彼地以待事平也、即使組頭召諸士以陳其所思、諸士亦以公之就島為請且曰、今日之事臣等死生以之也、若如麑邸所議則臣等海山隔絶雖欲趨其急安得而及焉、組頭聞之政府、府議亦決、乃艤快船三隻、使家老西村段左衞門時起・物奉行羽生仙蔵能通・組頭西村十郎次時義・船奉行日高孝

兵衞・其餘諸士五人一迎中公及祖母夫人・母夫人上、不レ日時起等至三麑邸一以二政府所レ議先告二北条織衞一、在邸諸司亦贊二成之一、遂聞二于祖母夫人・母夫人一、祖母夫人・母夫人感二其請之懇切一乃欲レ聽レ之、私使三レ人聞二狀于三郎公一、公使下二國老小松帶刀一傳レ命止上レ之、蓋以下祖母夫人貴族、當二多警之日一不上レ可レ使三レ之行二邊海之地一也、於レ是又請下惟久尚與母夫人就上レ島、亦不レ許、時起等卒帰、又召二諸士于本源寺一備告、以下所レ請不レ允者、官實拒レ之、非中久尚及祖母夫人・母夫人之志上也、

○二十二日、與二米一斛于池田浦仲吉船水夫等、同六斗・浦星一于飛船水夫等一、以下嚮航二鹿児島一會二英夷變一、以レ故令中久滯船上也、

○二十三日、麑人桑畑新次被レ放來、以レ奉二一向宗一也、

○二十四日、吉良六郎・西村清助為二檢者一、與二俸米五斛一、

○緒方吉兵衞為二牛馬皮方掛一、上妻七左衞門牛馬口錢方掛、日高平右衞門・西村七左衞門為二米倉監一本出米、方掛

○官赦二流人孫左衞門・肥後市左衞門一、以三天朝追二贈　順聖公官位一也、

○太守公下二自手筆令一、令曰、今般英夷所レ上之書、書辭無禮、實有二不レ可レ舍者一矣、嚮所下以堅忍自レ我不上レ開兵端一者、在レ欲下分二解事理曲直一責レ彼以中正義上耳、彼既攘二我蒸氣船一以簿レ我、即下レ命擊レ之、我士乃奮戰、所三以使二彼潰走心膽共落一者、實我士忠戰之所レ致也、豈不二感嘆一哉、聞、近日有下作二訛言一以惑上レ衆者、是果何理、方今固非二言路壅蔽之時一、而何憚不二明言一レ之、從レ今諸士以上不レ論、雖二鄕士以下賤隷者一、有レ所レ思請陳レ之、因置二上書箱于某處一云、國老連署書二其後一曰、禁二匿名書一者累代既然矣、從レ今有二上書一者記二其姓名于書尾一、而如二上書箱一置二之新橋口一、實　太守公親所二封印一、雖二行路者一亦加レ敬焉、

○官収二諸寺院及民間銅器一以鑄二大礮一、

○増二百工傭錢一各有レ差、以三近來物價高騰一也、

○中村小平太以下嚮築二波戸一之日為二筆吏一功上、進二其家格一為二代々小頭一、小平太以二親老子幼而家産匱乏一、請下從レ今十年辭レ之為二筆吏一如上レ故、許レ之、

○以二家老岩河十右衛門時令・物奉行時任丈左衛門時善（ママ）・用人日高源右衛門為徳一為二銕山及銑山方掛一、徳永小彌太、市人吉留甚四郎・榎本彌平次・荒木平八為二銑山支配人一、

○八月朔、大會寺・慈遠寺各獻二中紙二束一、與二同品于二寺一、

○八日、與二染布一反于野間村石堂休右衛門一、以嚮下母夫人鬻二樟腦于大坂一也、使丙休右衛門監乙其出納甲也、

○同日、與二金子各百疋于羽生武兵衛・笹河覺太夫・日高直五郎・宮浦半右衛門・阿世知直八・八板矢右衛門等、各五十疋于足輕牧瀬伊助・山野鵜助一、嚮家老西村時起等至二麑邸一請下久尚及祖母夫人・母夫人就上レ島也、以二此輩一備二途中警衛一、故有レ賜、

○十一日、與二染布一端于圉人長野甚四郎一、平日能執二其職一、且先般殿定番某妻死、覓二可代者一衆皆忌レ之、托レ佗以辞レ之、終命二甚四郎一、甚四郎乃奉レ命、因有二此賞一、

○十三日、使下物奉行西村七郎時義赴二長崎一鬻中松板上、

○十五日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、

○同日、以鮫嶋新蔵督レ植二棕梠一、

○十七日、下二令駒奉行署一曰、先レ是夷船至則臨時令レ辨レ出二軍馬一多少無二定員一、以往軍馬四疋、平日各具（ソナヘ）二鞍轡一、以備下異國方家老及書記・組頭二人所上レ騎、以為レ例、

○武田助太夫為二小姓一、普請奉行國上只次為二改革方掛一、

○官廢レ置二上書箱一、且下レ令曰、使下二下情一上達上者方今之急務、以往欲二建言一者、各就二其官長一而奏レ之、

○九月九日、使下二西村城之助時樹一讀中法章上、

○同日、覽二知覽才兵衛行修・西村源左衛門時民二家之銑術一、事畢褒二詞之一、各與二金一方一、褒レ善二其技一也、

○十六日、祈禱方名代岩河十右衛門時令詣二本源寺一、

○十七日、　官又鑄二半朱琉球通寶錢一、
○二十一日、覽二西村休八時乘礮術于内城一、事畢褒二詞之一且與二金一方一、褒レ善二其技一也、
○藩士限元猪之助傳二擊劍之法于我臣西村佐太夫一、許レ教二之島中武生一、
○官命下
今上御諱可レ諱レ之御諱統、
○十月朔、　官命レ學二犬追物于川上十郎左門一、(ママ)
○五日、使下二物奉行西村休八時乘一與中聞田圃丈量之事上、
○十九日、與二米三斛于國上只次一、以三急役二于麑邸一也、
○二十日、以三遠藤壮兵衛一為二用人一、緒方仙左衛門為二馬役一、平山藤助為二山奉行一、
○二十四日、使下二普請奉行遠藤健太郎・山奉行牧惣兵衛一與中聞銃山之事上、
○二十九日、以二物奉行西村甚五右衛門時哉一與二聞田圃丈量之事一、
○同日、以二鮫嶋新蔵一為二勸農掛一、職猶地方檢者、年與二俸米二斛一、
○公義流人薩摩之若蔵死、締方横目片野坂助左衛門、我横目美坐平兵衛時止・西村十郎次時義檢レ之聞二于官一、
○官賜二青銅二百疋于浦田浦水梢次平太一、先レ是七月三日之戰、大風大雨、諸所礮臺役夫疲困、臺将川上大膳請下借二我水工一以充中驅使上、乃遣二数輩一、次平太亦在二遣中一、服レ役尤勤矣、故有二此賜一、
○十一月二日、與二朝服各一領于柳田善兵衛・平瀬新太郎、染布一端于平瀬新助一、善兵衛獻二鳥銃五錢五目挺一、新助獻二薙刀一、新太郎獻三薙刀與二槍刃一各其所親造也、故各有二此賜一、
○十日、賜二金子一両于野間静圓・櫻井元可・牧瀬玄貞・河東静鳳一、以レ使レ治二種痘一也、
○十四日、以二西村四郎八一為二小姓一、
○二十五日、使下二普請奉行子島猪右衛門・山奉行平山一右衛門一與中聞禰寝氏所レ管大銃製造之事上、
○同日、賜二合塩焙各一斤于莖永村之古市喜齋・日高

九助・梶原儀助、賞射鷲獻之也、
○同日、以普請奉行子島猪右衞門為田圃丈量方掛、
○二十六日、以河内市郎為馬役・一世小頭格、以久為麑邸定府小姓也、
○幕府檢戸口、種子島亦與焉（如其條目則別有原書）、
○察一向宗聞于　官、如例、
○十二月四日、與金二方于包丁平山村之徳永平次、時平次役麑邸、任満将帰、會田圃丈量郷役衆亦将至島、因使平次司其膳羞、故有此賜、
○八日、締方横目神宮司勇助来、
○同日、帖佐箕輪矢右衞門・喜入家中池上十之丞・其餘男女十余人來、以鑄鍋銚也、
○同日、櫻島之五郎・助六・其餘男女十余人來、采葛者也、
○同日、加勢田郷士恒吉伊右衞門被放來、
○十二日、畠山伊織家來江口太次郎來、
○十三日、上妻源左衞門獻斗搗餅、
○十五日、與青銅四百疋于武田平蔵、以一歳中再役麑府也、
○二十三日、以岩河次郎・上妻惣左衞門・西村城助・時任駒袈裟・羽生管矢・中田泰蔵・八板藤千代・牧瀬市郎為児小姓、
○二十五日、與米二斗于交代船船頭笹河五右衞門、四斗于水杪等五人、以先是有故久使留滞于麑府也、
○二十七日、三寺・二十家・鍛冶進上、如例、
○二十八日、以渡邊勘右衞門讓為用人及改革方掛見聞役、遠藤健太郎為高奉行、
○官賜舟（塗飾新田丸）于祖母夫人、　官以此舟属不用、使麑商矢野某者管之、某嚮自久見崎運之于鹿児島、　官因使祖母夫人償其經費于某、
○三郎公輔　太守公而攝政、　幕議許之、松平豊前守傳其命、
○官記祖母夫人・母夫人歳暮上賀于　太守公及諸公族之禮以賜之、記于左、

○ **四九** 松寿院・宝慈院歳暮之賀進上書上

太守様
暐姫様
典姫様　　松壽院殿

右、歳暮ニ付、大奥通番所迄以使者御祝儀被申上候、御廣敷御用人謁、

太守様江　　寶慈院

右、歳暮ニ付、女使又者文を以御祝儀被申上候、

暐姫様
典姫様江　　寶慈院

右、歳暮ニ付、女使を以御祝儀被申上候、

松壽院殿

右、歳暮ニ付、使者を以二丸御廣敷御用人江相付、御祝儀被申上候、

寶慈院

右、歳暮ニ付女使又者文を以於二丸御祝儀被申上候、

太守様
暐姫様
典姫様　　松壽院殿

右、年頭ニ付、大奥通番所迄以使者御祝儀被申上、進上物被差上之、御廣敷御用人謁、

三郎様　　松壽院殿

右、使者を以　二丸御廣敷御用人江相付、御祝儀被申上、進上物被差上之、

暐姫様
典姫様　　松壽院殿

右、女使を以御祝儀被申上、進上物被差上候、

十二月

○歳暮規式、如レ例、

（表紙）

元治元年　種子島家譜　廿五代　久尚　八十

○元治元年甲子正月元日、國上村獻二野老一、

○二日、國上村献二介族一、庄司浦鰒、

○同日、覽レ馬、名代家老西村段左衛門時起、馬役河東仙之進、

○同日、八寺献物、如レ例、

○四日、上郡庄官・小觸獻レ物、如レ例、

○同日、國老某以二夷舶渡来之候一傳二長崎鎮臺之令一、如レ例、

○六日、初狩、名代家老西村段左衛門時起、物奉行西村七郎時義、用人種子島才七郎時習、登山、組頭日高杉右衛門實令・知覽覺之丞行義・西村城之助時樹、山奉行某々等、西之表庄官獻レ物、如レ例、

○七日、中郡・下郡庄官獻レ物如レ例、家老上妻小左衛門定直、

○十一日、甲冑之賀、如レ例、

○同日、本源寺軍陣・温坐祈念、的始如レ例、射手一番（西村善太郎河内矢一郎）、二番（高尾野四郎助下村源次）、三番（鮫島半助下村十郎）、名代家老西村段左衛門時起、用人日高源右衛門為徳臨焉、

○同日、村々諸寺獻レ物、如例、

○同日、以二國上只次一為二船奉行一兼二町奉行一、近習如レ故云、

○十三日、加勢田郷士川野甚兵衛・加藤源兵衛有レ罪被レ放来、

○同日、錮二住吉村之庄官遠藤半左衛門于本法寺一、平山貞市于蓮勝寺、催子助十郎・新太郎出二贖鍰各二貫文一、罰二其勸農不職一至下公田有中數所不施二耕種一

者上也、

○廿二日、與二金各一方二銖于種子島十郎左衛門・肥後四郎左衛門・西村四郎八・日高吉次郎及小牧郷社中一、以下先レ是有レ故、命令上レ移二寫曽我物語一也、

○廿四日、褒二詞西村城之助時樹・西村佐太夫時若一、以下今般時若受二劍訣于隈元氏一、時樹受中射術于高田氏上也、

○同日、　官告下本月十三日　三郎公（叙）除二從四位下一任二左近衛少将一且奉　レ勅参中與機務上、

○二十五日、與二天神丸船長濱田喜八及其水夫等米四斗一、以下先レ是有レ故使レ淹中滞于鷹府上也、

○是月、嚮自三虜之侵二鷹城一以来、和戦之策未レ決、至レ是國老下レ令曰、夫膺懲之大典雖レ不レ可レ不レ舉、然以下其所二關係一大重上也、頃日　二公有レ慮二於事之大小輕重一、乃遣二虜犒軍金若干一、以紓二國難於一時一、其意蓋在下忍二小忿一而雪中大恥上也、請闔藩不二特海岸之警備一也、于レ文于レ武宜下切磋磨勵以爲二他日之用一副中　二公之尊旨上云、

○久尚尚幼、以レ未レ堪二戎衣一、上書請レ使下二族人北条時有一物中裁吾軍事上、原書記于左、

○　五〇　島津久房願書

私親類種子島鶴袈裟事、未幼少御坐候二付、拾五歳罷成申迄之間、親類北条織衛江陣代被仰付被下度、私より奉願上候、此等之趣被仰上可被下儀奉願上候、以上、

子
正月　　嶋津　中（仲・久房）

○二月十日、赦二物奉行西村蔵多時措一、去春三月使下二時措一赴二大坂一監中物價之出納上也、當時事頗有四渉二不正一者三、以レ故錮レ之、而令レ待二罪於家一焉、而先レ是祖母夫人之築二波戸及鹵田一、時措督二其役一周旋最力矣、至レ是祖母夫人追二念其前功一、故有二是命一、

○十一日、流人大兵衛有レ罪、下二之獄一以往三年、

○十三日、錮二下西之表之捕手鮫島金太郎于遠妙寺一以往三年且収二其俸田一、以下言語不遜屢議中官長之短長上也、

錮二池村五右衞門于本蓮寺一以往三年、坐レ贓也、

○十七日、時任駒袈裟加二首服一、命二俗字城之進一、名代家老岩河十右衞門時令・家老西村段左衞門時起・理髪西村七郎時義獻賜、如レ例、

○同日、國老某召二我家老一傳二　太守公之　命一、飾二士風一嚴二武備一、

○二十日、西村佐太夫為二船奉行一、岩河彦左衞門番頭、西村直次郎兵具奉行、遠藤才助普請奉行兼納殿役人、日高平右衞門普請奉行、緒方吉兵衞為山奉行、羽生關助馬役、

○同日、以二國上村之足輕日高菊之助一為二一世郷士一且與二錢若干一、賞下嘗僕二仕于祖母夫人一而能勤中其職上也、

○二十二日、平山村之百姓善右衞門免二其徭役一、賞下嘗為二輿丁一之日能奉中其職上也、

○二十四日、西村城助加二首服一、命二俗字番右衞門一、名代家老西村段左衞門時起・家老森休兵衞友習・理髪羽生仙藏能通・奏者西村十郎次時義・物奉行・用人班列獻賜如例、野間清十郎以元服之儀始謁、

○二十五日、與二錢三十緡于船手檢者羽生勇太郎、米二斗于其下吏孫藏、米若干于船匠某々等一、賞下嘗補二厨船一之日、此輩各能執二其職一不上レ怠也、

○同日、與二樋口孝右衞門・濵田喜八錢各千緡一、以下嘗有レ故、借二其宅一而饗二魔人某々等一之日頗累中家人上也、

○二十八日、　官放二加勢田郷士川村權左衞門于吾島一、以レ信二一向宗一也、

（ママ）是月、久尚賀三　太守公・少将公拜二　天賜一、初　少将公朝二于　京師一奉レ勅入見

上賜二之酒一、傳奏野宮宰相以二　天旨一告曰、嘗英夷之侵二汝之封疆一也、汝能一戰攘二斥之一、可レ不レ謂二之武一哉、足三以光二揚　神州之威靈于四表一矣、

上嘉二汝之忠節一賜二鞍馬于汝、馬于　太守且黃金十枚于汝之戰士一云、　公親捧二　勅書一而出、其明、至二諸公卿之第一謝レ之、至レ是　官下二徇書一告二之闔藩一、

○祖母夫人一世　官年賜二金二百圓一、原書記二于左一、

○ 五一　喜入久高申渡書

金弐百両　　種子島霰袈裟江

右者、松壽院殿御付高三百石之所務を以而、内外之御取續被為在候處、何篇御身柄御相當之御附届も有之、折角御省略被召加筋ニ者候得共、其御取續御難渋ニ付、先達而種子島出産牛馬皮、彼方計を以大坂江繰登せ之上御拂立之儀、願之儀有之候得共、牛馬皮仕向之儀者、是迄之通ニ而、右出産之高ニ應、御利潤金之内より半分宛、年々被成下候筋被仰付置候處、右御利潤金之儀、少分之事ニ而難黙止訳合候間、旁別段之御取訳を以而、牛馬皮御利潤金差足、本行員数丈年々御續料之名目を以而御一世被成進候条、可申渡候、

二月　（喜入久高）攝津

○少将公任ニ大隅守一、因禁ニ人名用ニ大字一且同音者、

○官告レ改ニ元元治一、

○三月三日、使下ニ用人某一讀中法令書上、

（ママ）三寺獻賜、如レ例、

○西之表庄官獻レ物、如レ例、

○八日、與ニ西村九左衞門・市人井元彌吉府庫所レ榷之産物價金十一一、賞ニ嘗有レ勞ニ於産物販鬻之事一也、

○十二日、錮ニ羽生才之丞于妙昌寺一日三七、以下嘗為ニ蠟澄屋下吏一之日有中不正之事上也、

○十四日、豆州中木浦人傳兵衞者告、去年十二月多襖人與吉航レ海而至、其月十二日又出亡不レ知レ所レ之、

○二十二日、本藩見聞役竹内十郎左衞門来、

○二十三日、常刄中湊人四郎八商船漂ニ到于熊野浦一、船長源七以下通計五名、本藩之横目野元一郎・奈良原源八郎、吾横目某検レ之、聞ニ状于　官一、

○二十四日、獵ニ馬毛嶋一、以レ採ニ鹿茸一也、物奉行以下所司數名赴レ之、

○二十九日、　官告ニ我流人長野次郎死ニ于喜界嶋一、

○四月朔日、與ニ河東祐兵衞米六斗一、賞下嘗為ニ勝手方掛一之日能稱中其職上也、

○二日、上書請下厨船漕ニ運砂糖・生蠟于大坂一者、以

往不レ受二山川及内浦津吏之検察一而直自二種子嶋一抵中大坂上　官許レ之、原書記二于左一、

○　五二一　用頼代美代藤兵衛申状

種子島霧袈裟所帯方、連々極難渋之取續御坐候處、先般御軍役等屹与手當不被行届候而者不相叶御時節ニ而、何れ成所帯方立直り無之候而者、手當難被行届段被　聞召通趣有之、所帯被致改革候様、分而被蒙　仰候上、掛役々迄茂被掛置、是迄少事之儀迄茂盡吟味、漸々立直り向ニ而御坐候得共、先年以來大坂表其外借金元利共過分追重り候而、元済し不致候而者不相叶儀故、奉願趣有之、於大坂御拝借金被仰付、右を以而相弁被申候、然處、亡弾正殿代、私領種子島茂遠海孤島ニ而、海岸防禦手當向下島廻見之上、嚴重手當向被申付置候得共、近年異國船繁々致渡來、島許近邊往來、終ニ者上陸迄茂いたし、終日程及滞留、掛念之儀共是迄餘多有之、何れ成今通ニ而者、海岸要地之場所而已有之、右之場所江者臺場等築立方不致候而者不相済時節ニ罷成申候得共、是迄大坂表御當地借財等夫成ニも難打捨置儀御座候得者、未其道茂尽果、古來より植付置候枦木之儀も、過半老木ニ相成、夫丈成実等薄ク生蠟斤数等も年々及減少、砂糖之儀も両三年寒氣強餘多枯、是以出來嵩も相減シ、島許出帆より大坂着船迄之間、諸雑費等之引負ニ而、當分別而不繰合罷成申候、就而者、改革以來砂糖・生蠟其外諸産物大坂江繰登せ御物御計を以而御拂立被成下候、然處、遠海孤島之儀ニも御座候間、右積船早目為致船仕廻等島許致出帆、相應之里数透乗行候而も、風波相変候儀毎々有之、終ニ者走帰り候事而已ニ而、其上打續順風等不宜、長々致船待、乍漸同所出帆之上、内之浦并ニ山川御番所御改済之上、直様致上坂度、何様差急候(衍カ)候而も依時宜而者順風取後し、無是非長滞帆ニも相及、船中飯料等も致不足、両様共ニ難黙止儀御坐候、前文通、諸所ニ而日を亡邂逅、砂糖・生蠟者勿論其外諸産物手當等別而差急き候而も、全ク其詮無御坐、是迄数

度大坂及遅着、夫故直組ニも相拘、第一蔵方補筋等ニ付而も別而不繰合ニ成立、其外急埒不仕、改革中看ゝ不益罷成申儀御座候而、役ゝ中別而心痛仕居申候間、近頃恐多奉存候得共、旧來より大坂表直仕登せ御免被仰付、種子島之儀先祖代より屋久・硫黄・永良部・竹島・七島、種子島代ゝ被下置候處、十六代種子島左近太夫久時代、文禄四年御領國中一統御所替之節、知覧江所替被仰付、其後再ひ種子島被下置領地被致來申候、右通十二島被下置、其後種子島而已を被下置、往古より諸色他國江積出候儀御免被仰付、手計ニ而積出來、其上靏袈裟六代之祖久基、依勤功手形銀迄茂御免被仰付置候儀御座候間、旁之御取訳を以而、一往種子島詰締方横目并唐物取締見聞役より諸産物等時ゝ御改之上、大坂表見聞役等江送状被召附、島許より直乗御免被仰付被下度奉願上候、左様御坐候ハヽ、尚又於大坂時ゝ御改を受可申候、左候ハヽ、積船往來格別便利茂宜敷罷成、諸産物直段迄茂都合能、第一致改革候様との御趣意迄茂相立可申候、左候而、是迄多端之物入迄も、右之餘勢を以而相補申度御坐候、尤三島方江上納之儀者唐物締并締方横目より三嶋方江御問合之上、右ニ應し樽数是迄之御振合通無滞上納可仕候間、右旁御取訳を以而、何卒御免被仰付被下度、種子島鶴袈裟幼少故、親類北条織衛被承届、此段奉願候様被申聞候間、此等之段、被仰上可被下儀奉頼上候、以上、

用頼代

美代藤兵衛

○ 五三 三島方掛役々答書

本文承知仕候、種子島製砂糖之儀、山川江積送り取納之上、山川出張同役差引ニ而大坂御仕登せ被仰付来候処、其通ニ而者、島許より相應之里数故、依時宜而者順風取後し、夫丈入費多端且大坂表及遅着、夫故直組ニ茂相拘り、第一蔵方補筋ニ付而も、別而不繰合成立候趣を以而、往古諸色他國直仕登せ被仰付置候儀も有之候ニ付、其通被仰付度趣ニ付而者、

御取締向ニ相拘、不容易之儀ニ者候得共、願意無據趣ニ相見得申候間、為御試三ヶ年、願通御免被仰付、萬一不取締之儀も御坐候ハヽ、年限中ニ而も御取揚被仰付度、尤直仕登せニ付而者、締方横目又者唐物締見聞役より樽数相改、斤目付番付帳取仕立、證印相居、大坂御留主居江向送状付為差登、左候而、當坐江も斤数等相記、何丸より直仕登ニ相成候趣致掛合候様被仰付、運上銀之儀者、是迄之通大坂上納被仰付度吟味仕候、乍然、何分御沙汰次第奉存候、此段申上候、以上、

位劣砂糖有之、大坂仕登不相成分者、砂糖蔵届之上、是迄之通被仰付度、此段茂申上候、以上、

三島方掛

御役々

子

四月三日

○ 五四　琉球産物方掛並裁許方掛答書

本文吟味被仰渡承知仕候、種子島新製砂糖、大坂表直仕登之儀、御取締ニ相拘、不容易之事ニ而者候得共、願意無據向ニ付、何篇三島方掛御役々調之通可被仰付哉、於其儀者、唐物締横目之儀引取被仰渡、當分締方横目迄詰御坐候間、御取締向等嚴重被仰渡置候ハヽ、不締之廉有御坐間敷吟味仕、此段申上候、以上、

琉球産物方掛

御裁許方掛

子

四月

○ 五五　勝手方松岡十太夫申渡書

此表、向々調之通申付候条、如例可申渡也、

御勝手方印

松岡十太夫

子

四月十四日

大坂御留主居

御船奉行

琉球産物方掛

御裁許方掛

三島方掛

○五日、官命流人伊牟田尚平自七島徙居吾島、以四今般　太守公・少将公拜　天賜、故宥其罪也、
○六日、以岩河勇八郎為馬役、
○十七日、　官告吾流人猶原覺七去年七月十七日死于喜界島、
○十九日、以西村彌七郎為講談役、
○二十日、郷役吉留林藏・岩重伴左衛門・宮原喜左衛門・高崎傳左衛門等歸于麑府、吾高奉行河内九郎右衛門及庖丁某從之、明年　官将丈量島中之田圃、因請于　官先使是輩相地之廣狹肥瘠以豫為之區處、至是事畢而還、
○二十一日、與羽生半左衛門・河内覺右衛門染布各一領、賞有勞於田圃丈量之事也、
○二十三日、以笹河覺太夫為馬役、
○二十五日、以輿丁某々等屢役麑邸故、與之米各有差、
○五月朔日、　官告本年三月十三日聰徳院夫人卒、夫人者祖母夫人之妹而為阿部侯之室者也、

○五月五日、儀式、如例、
○同日、遠藤直四郎・濵田盛右衛門・大山四郎右衛門・阿世知清之丞始謁・獻物、如例、
○九日、與朝服各一領于楢原孫之助・濵田喜八、染布各一領于池村新助・松下平左衛門・荒木平八郎・松下理右衛門、賞嚮久尚與祖母夫人・母夫人下島之日、是輩舟中各能勤其職也、
○十三日、　官告　太守公奉　幕命兼領日州細島、
○二十日、國上村之十四郎・金之進・善之丞・甚四郎・仲市・彌平・喜助・嘉助・休太郎・重吉罰銭各有差、以嚮檢牧馬之日匿其馬而不以實聞也、
○二十四日、聞頃日　官将権屋久島所産之物貨、因使用頼美代藤兵衛上書分疏我之遣船八石船于屋久島則其有所由来者、以請以往亦仍舊貫(慣)、原書記于左、

○ 五六　用頼代美代藤兵衛口上覚

口上覺

一杉完料拾四挺（ママ）
一檜完料弐挺（ママ）
一弐長底弐拾五挺
一小樽五拾束
一平木

右者、今般屋久嶋之儀御仕向等被召替候段、粗承知仕候、然處、同所之儀者先祖十六代種子島左近太夫久時迄被致領地、別段由緒之訳筋を以年々八斛米積渡、本行之通申請被仰付、完料（ママ）之儀者、専同人菩提所又者軍役道具格護蔵、其外仮屋入用之桶・丹荷、平木之儀者、同所修補用ニ相用、難有奉存候、然処、種子島之儀遠海孤島之上平島ニ而、杉適被差立置候而も、大風等之憂ニ而過半倒木又者中途より吹折、迚茂難致生長、此以前より申受被仰付置迄を以、格別之用分相達来候間、是迄之振合通りを以、不相替本行丈者年々申請被仰付被下度奉願候、左様御座候ハヽ、往古より之由緒も相立、修覆旁行届申事御座候間、別段之御取訳を以、何卒奉願候通御免被仰付被下度奉願候、此旨種子島霜袈裟幼少故親類北條織衛被承届、此段私より奉願候様被申聞候間、此等之段被仰上可被下之儀奉願上候、以上、

用頼代
美代藤兵衛

子
五月廿四日

○ 五七　屋久島奉行届書

本文調被仰渡承知仕候、屋久嶋之儀御改革被仰付、御年貢平木迄被仰付、諸産物御商法を以惣御買入被仰付置候処、種子島之儀、往古より之由緒柄を以年々八石米積渡、諸木直申請被仰付來、當時不容易之儀ニ者候得共、此節申出之趣も無據相見得、殊ニ現米積渡諸木引替相成事ニ而候間、旁御取訳を以而是迄之振合通ニ而、入用之節々産物方計を以而代米取申請被仰付度吟味仕候、乍然、何分御沙汰次第奉存

候、掛見聞役申談、此段申上候、以上、

子六月廿日　　屋久嶋奉行

○二十二日、上書請レ鬻二塩干屋久島一、　官許レ之、原書記二于左一、

○　五八　種子島役人西村時起口上覚

口上覚

種子島之儀、全躰仕用之塩無多事、専他國塩等を以而仕用相弁申候得共、何分手廣之場所柄ニ而端々迄行渡兼、無據末々之者共、過半直煎ニ而仕用いたし候段、松壽院殿被聞通、不便被存候處より、嶋元之内江手元計を以塩濱被相開候趣法も相立、當分一統通融いたし、今通ニ而者追々餘計出産相増可申、就而者出來丈時々屋久島積越、年々之相場を以而御買入被仰付被下度、天晴次第ニ者猶又相應之出來塩可相成、尤積出方等ニ付而者、往來共ニ御横目衆時々御改を請、送状付を以積渡、又々帰帆迄茂右之振合通仕申度奉存候、左様御座候ハヽ、第一不締之廉有御座間敷奉存候間、前文奉願候通御免被仰付被下度奉願候、此等之趣、被仰上可被下儀奉頼上候、以上、

子五月二十五日　　種子島役人　西村段（時起）左衛門

○　五九　屋久島奉行届書

本文承知仕候、屋久島御改革ニ付、島許産物御商法を以、惣御買入被仰付、御當地より諸色御買下相成候処、出來塩年々積渡、相場を以御買入被仰付度願書ニ付而者、塩絶殊ニ冬向通船無之節積渡候ハヽ、島中便利可罷成、其外於當坐差支之廉相見得不申候間、願通御免被仰付方ニ而も可有御座哉、於其儀者、積渡候上者、島許産物方江御買上被仰付度、左候ハヽ、不締之廉有之間敷奉存候、乍然、何分御沙汰次第奉存候、掛見聞役申談、此段申上候、以上、

子六月廿日　　屋久嶋奉行

○　六〇　琉球産物掛並裁許掛届書

本文吟味被仰渡承知仕候、種子嶋出産塩屋久嶋江積渡度願ニ付而者、屋久嶋奉行しらべ向を以而願通御免可被仰付哉、於其儀者、御取締向両島詰見聞役より改方嚴重行届候様被仰渡置候ハヽ、不締之廉有之間敷吟味仕、此段申上候、以上、

琉球産物掛
御裁許掛

子
六月廿六日

○六月六日、與ニ植木見廻下西之表山口甚助・安城村之小川新四郎篠巻各六把一、賞三能稱二其職一也、

○十日、以二宮浦藤九郎一為二用人一兼二組頭一、

○是日、久尚與二母夫人一詣二熊野一、

○十五日、以二今般久尚始就レ邑赦二島中一、稲木覺兵衛・山下寛齋・西村哲衛・羽生清賀・莖永村之日高今次復二其士籍一、馬場藤右衛門復二其郷士一、池村五右衛門・輕卒鮫島金太郎令レ出レ寺、然於二五右衛門・金太郎一、則猶令レ屏二居于家一、久レ之終赦レ之、

○二十二日、本藩射師東郷源四郎以二吾臣日高直五郎善レ射、盡授二其秘訣一焉、且使下二直五郎一上中扁額于國分正八幡宮上、其文曰、

○　六一　日高直五郎奉納扁額文

八幡大神宮江射術修行身體鍛練之矢數敬而奉記本府師家東郷長左衛門實敬嫡子東郷源四郎實美主種子島取次師範從羽生助左衛門傳法左之条々

一肩矢數壹萬二千二十五本

但朝六ツヨリ夜九ツ迄射収

一日試矢數九千二百二十五本

但朝六ツヨリ暮六ツ迄射収

合矢數二萬千二百五十本

文久二（ママ）年癸亥六月五日

種子島鶴袈裟家来
日高仙兵衛實徳子
當年二十六歳
日高直五郎實是

○二十九日、夏越之賀、西之表庄官獻レ物、如レ例、
○七月朔日、以二緒方直十郎一為二講談役一、
○七日、家老拜二勇猛公之戎衣於廣間一、如レ例、
○八日、使下二平瀬友次一納中罰銭五十緡上、以下嚮受二官命一、焼レ炭之日有中不正之事上也、
○與二匠人池亀喜助銭千緡一、以嚮命令レ作二銃架一而不レ受二其工價銀一也、
○本藩之横目野元市郎・寢占彦助来、
○十一日、以二種子島十郎左衛門一為二船奉行一兼二町奉行一、西村七左衛門普請奉行、上妻七左衛門山奉行、日高杉右衛門改革方掛、知覽彌兵衛勝手方掛、
○十八日、西村七左衛門為二本出米方掛一、
(ママ)是月　官以二我醫生柳田東洋一為二郡山郷士一列二於醫員一、
○八月朔日、慈遠寺・大會寺獻物、如レ例、
○十日、魔人與次郎以レ奉二一向宗一被レ放来、
○同日、山下寛齋以下造二私第一之資不上レ給、上書請レ借二府庫之米五斛・金五十圓一、乃與レ之如二其所レ請、先レ是寛齋請下以二其私第一奉中祖母夫人上焉、因大興二土木一、經費許多、寛齋自出レ之、已而諸司相議別賜二第于寛齋一、以収レ之、今之濱邸是也、然其所レ賜之第、地仄屋蠹、與二其所レ収者一、美悪固不二相當一也、至レ是寛齋粗陳二前事一、以哀訴懇至、故有二是賜一、
○十五日、蓮勝寺獻二神酒・粢盛一、
○同日、日高源右衛門為徳・宮浦藤九郎(ママ)為二談合役一、
○十七日、　官頒二　天詔・幕教于闔藩一、本年七月大守公使下二島津周防・島津(ママ)一戍中京師上、本月十六日與二毛利氏之老福原某等一戰二于京中一大破レ之、福原等引還、初諸夷之乞二通商一也、　廷議主レ戦、幕議主レ和、而長門侯等固右二　廷議一、而憤二幕府之強償一也、不三肯奉二其令一、幕府乃錮二侯于其國一、侯之臣松野某・濵野某齋二于石清水神廟一、為レ侯上書訴二屈于朝一、不レ報、至レ是侯使下二福原越後・國司信濃・益田右衛門介一擁レ兵入上レ京、遂據二天王寺・天龍寺・山崎一以為レ営、有二其意不レ可レ測者一、於レ是諸藩之戍

大萃二京師一、幕府大目附永井主水正召二福原等一喩而使レ解レ兵、不レ肯、十八日黎明、幕府遂率二諸藩之兵一攻レ之、列陣未レ成、福原等已分レ兵自二九門一進、幕兵殆破、我薩之先鋒軍二近衛第西一、逆而擊レ之、宮内某等戦没、遂取二公家門一衛レ之、長人善戦、然衆寡不レ敵遂敗、残兵走入二鷹司第一保レ之、幕兵逼而火レ之、餘火延及二街市一、不レ滅三日、長兵遂大潰、殺獲生擒者不レ可二勝計一、十九日、國老小松帯刀奉二幕命一攻二天龍寺一、不レ見レ敵而還、二十三日下　レ詔討二毛利氏一、使下二薩之戍兵一據二兵庫一以絶中毛利氏入レ京之路上、後數日

天朝賜二勅書及馬于　大守公一以賞二其戦功一云、

天詔・幕教今略レ之京師戦争之事、未得確説、其事情不可得而知也、粗記其所傳以待他日公論定耳、

○二十二日、　官奉二　天詔・幕教一討二毛利氏一、島津又六郎為二惣督一、次二筑前蘆屋一以與二毛利氏一相持(峙)、是行吾贈二鳥銃二挺于又六郎一以餞レ之明年和成解兵、

官告

天朝以二特旨一追二贈　前太守順聖公照國大明神一、

○八月、麗邸報云、本月四日英夷以二戦艦十八隻一侵二長門一、長人逆二戦于下關壇浦之間一數日、長人連敗遂偽乞レ和、以退レ之、是役　官未レ戦前數日、先使下二園田某一在二豊前小倉一觀中其戦状上、至レ是園田氏之報至、今摭二其略一曰、初夷艦之至也、小倉藩使下レ人詰中其来侵之由上、夷曰、前年我英船之過二此洋一也、長人薄而擊レ之、我英未レ知二其罪一、乃訴二之政府一、今我與二佛蘭二國一以レ兵問レ之也、及二戦止一也又使二レ人問一焉、曰、長門侯使下二其臣完戸(宍カ)某・杉尾某一乞上レ和、我将下取二犒軍金一而後許中之成上也、且曰、是戦我喪二三十六人一、而彼兵死傷不レ可二勝計一、且獲二彼礮三十六門一、

○九月九日、使下二用人宮浦藤九郎一讀中法令書上、

○十三日、大蒐二于城之濱一、久尚親涖レ焉、

○二十三日、西村熊袈裟加二首服一、命二俗字勘九郎一、久尚親臨焉、理髪西村次郎兵衛時知・奏者上妻九郎左衛門宗富、其餘家老・物奉行班列、是日西村岩五郎亦始謁、獻賜各如レ例、

○晦日、以二日高直五郎一為二馬役一、其家格隷二於小頭一而世二襲之一、賞直五郎嚮以二善レ射故一、受二其師東郷氏之秘訣一且以二射法一為二久尚一祈二運祚一也、

○是月、　官赦二伊牟田尚平、其余一向宗流人休助・傳左衛門・仲兵衛・金次郎・仙藏・龍右衛門・新右衛門・市次・休兵衛・新兵衛・壮之進・矢吉・玄龍・仙兵衛・正右衛門・仲右衛門等一令レ歸二于郷一、今般以三　太守公・少将公拜二　天賜一大赦二闔藩一、故有二是命一、

○按二察一向宗一聞二于　官一、如レ例、

○十月朔日、観二知覽覺之丞行義・西村七郎時義銃術一、事畢褒二詞之一、且與二金各一方於二家之門人一、以三時義門人鮫島玄心・三浦清兵衛二発命二レ中於正鵠一、久尚別與二銭千緡一以賞レ之、三役亦銭七百四十八文、

○二日、與二大山五郎右衛門・八板平右衛門米各一斛一、賞三昨年二人能促二取民之滞債一也、

○六日、使下二美坐源助時貞一演中布兵之法上、久尚親涖焉、演畢褒レ之、且與二金一方其門人一、是日祖母夫人・母夫人亦下レ簾觀レ之、

○是日、以二遠藤壮兵衛季恭一為二用人・改革方掛一、参二於物奉行所一、日高杉右衛門實令用人、職事如レ故、西村佐太夫時若・種子島十郎左衛門時(ママ)組頭、野間清十郎番頭、下村十郎復二其近習・馬役一、向因請免之、

○十日、與二西村七郎時義・下村要志・小田宗助褒翰一、本年三月、時義等三人赴二大坂一監二物價之出納一、當二是時一幕府方破二毛利氏之兵于京師一、遂収二其大坂之邸一、因使下二薩邸一具中甲兵上以備二救援一、時義等在二逆旅一聞レ之曰、今日之事雖下陪臣如二吾曹一者上、亦豈忍二坐而視レ之哉、況我販鬻之事、平日既受二惣裁於留守一、而今日不レ趨二其急一則彼謂二我何一、不レ可三以遣二吾公室之恥一也、乃戎装提レ兵而出、至則部署已定衆将レ発、邸幾無レ人、留主大嘉二時義等之志一、以充二邸之守兵一云、至レ是政府相議、時義等此擧可レ謂二忠且敏一、故褒詞及レ之、

○二十日、觀二羽生伊兵衛伊勢流小禮一、事畢褒二詞之一、與二金一方於其門人一、

○二十三日、以二日高源右衞門爲徳一為二物主一、
○二十六日、觀二西村休八礮術于城之濱一、二十七日、羽生助左衞門・種子島郷兵衞・西村直之進代城之助也、射術于内城、事畢褒二詞之一、且與二金各一方於其門人一、以二下村源次双箭命中一、久尚別與二弓一張一以賞レ之、
○十一月四日、與二牧瀬善助米一斛一、去歳以来藩官某等之来丈二量島中之田圃一也、吾所司借二善助之宅一以營二辨其庶務一、善助亦助レ之、周旋頗有レ力焉、故賞賜及レ之、
○六日、與二中田市藏金三方一、以レ使レ移二寫義臣傳一也、
○八日、狩二于馬毛島一、将下採二鹿皮一以遣中田圃丈量使上也、物奉行以下所司通計七名赴焉、
○十一日、以二日高孝兵衞一為二談合役一、
○是日、　太守公・少将公下レ命曰、以往雖二公族貴門一宜下入二學于泮宮一以奬二勵多士一裨中風教上、云、近侍關山糺召二我族人北条時有一傳レ之、
○十二日、觀二上妻宗左衞門礮術于城之濱一、事畢褒二詞之一、且與二金一方於其門人一、
○二十一日、田圃丈量使郡奉行有川藤左衞門・川上藤右衞門、書役崎山平右衞門・宮之原正藏、其佐武松吉藏・上村源之助、算者永田權之丞・阿久根甚左衞門、其佐吉留清兵衞・野村郷兵衞、蒔見川内源五右衞門・田方直助・鮫島嘉右衞門・東利右衞門、竿取東條市左衞門・古川辰次郎・中島勇四郎・永井為兵衞・白坂半之丞・鋒立喜右衞門・神宮司槌之進・森萬助・木村助左衞門・野村源助等至レ自二魔府一、其明日久尚親饗二之于慈遠寺一、遣二之鳥銃各一挺・鹿皮二領一、吾家老・物奉行・高奉行及其書記某等班列焉、
○二十一日、上妻惣左衞門加二首服一、久尚親臨焉、理髪羽生仙藏能通・奏者上妻九郎左衞門宗富、其餘家老・物奉行・用人班列獻賜、如レ例、
○同日、與二山崎太郎・田上伊八俸田七斗所一、太郎善作レ箭、伊八作レ弓、故有二此賜一云、
○二十四日、饗二丈量使於濱邸一、母夫人泣レ焉、人贈二金各三圓一方一、
○二十五日、赦二流人清吉一使レ出レ獄以久尚襲家之後始就島也、

○同日、觀二下村佐一郎馬術一、事畢褒二詞之一且與二金一方其門人一、

○官使下二藩官伊知地壮之丞・折田平八・橋口彦次一與中聞我家政上、官因所レ賜之書記二于左一、

○ 六二 島津丹波申渡書

伊知地壮之丞
折田平八
橋口彦次

右者、今度御一門方四家一所持之面々江被仰渡趣有之候處、種子島霧袈裟幼少之事候間、掛被仰付候ニ付、御趣意ニ基キ家政向承届、領内仕置之利害相察、此涯軍備治定いたし候様可取計旨被仰出候条、可申渡候、

十一月　丹波

○十二月朔日、有馬直之進・遠藤次郎・下村源助・榎元周七・日高甚次郎・牧丕太郎・高崎次郎・上妻三之進・市来清之進等免二其滞債一、各憫二其家産困乏一也、

○同日、與二前田仙次郎・阿世知休之進・高尾野利三次・遠藤六右衞門・鮫島矢太郎金各三方一、賑二救其貧乏一也、

○同日、以二日高平右衞門一高奉行兼郡奉行、小田宗助為二馬役一、

○同日、藩吏某等始丈二量田圃於莖永村一、既而両二部其人一、其一西巡、其一東巡、復至二西之表一而合、東巡者本藩之郡奉行有川藤左衞門、其書記及郷役等十一名、吾家老西村段左衞門時起、郡奉行日高杉右衞門・緒方善藏・川内覺右衞門、其餘所司數名、西巡者本藩之郡奉行川上藤右衞門、其書記及郷役等十一名、吾家老岩川十右衞門時令、郡奉行美坐織太郎・川内九郎右衞門・羽生半左衞門、其餘所司數名従レ之、明年三月二十七日事乃畢、

○是夜、松下仲藏商船破二壊于前港一、所レ載之米爲二波濤所レ濡、

○二日、與二族人北條織衞時有金九十圓一、初先公頒二賜
禄田五百石于時有之祖一以爲二二宗一、門閥列二於寄合一
住二邸之北隣滑川上一、中世以還家計不レ振、遂不レ能レ
守二其先業一移住二諏訪街一、至二時有一稍擢二顯職一、而第
宅卑陋、不レ可二以延レ客、時有心竊愧レ之、乃欲レ
改二造之一、然患レ乏二於資一、乃謀二之我一、我給レ之以使レ
成二其志一焉、既而又請下借二錢本若干於我一、薄起二其
利一以買中禄田四十石上、許レ之、至レ是又請下嚮之所レ借
者陸續完償而別借二四百圓一增中買二十石上、而以レ復二
先業一為レ辞、魔邸諸司相議以為、凡我公族之貧乏者
不二獨北條氏一也、我既許二之於此一則不レ得レ不レ許二之
於彼一、而人コトニ賑二救之一則非三我府庫財力之所二能
繼一也、況方今軍興相繼、不レ可三以無二非常之儲一也、
將レ辞レ之、既而又議、如二北條氏一則族人中門閥尤貴、
今吾公尚幼、其臨レ有レ事可二以代レ公者獨有二北條
氏一耳、況今公私皆使下二北條氏一為中之處置上、則今日
之請、不レ可二以不レ許也、遂亦如二其所レ請、
○三日、一向宗流人與次郎死、聞二之于　官一、

○六日、獲二江豚八於島間浦一、
○八日、久尚贈二金各一圓二方丈量使於莖永村一、
○十三日、西村只千代加二首服一、命二俗字甚七一、名代家
老前田新五兵衞宗誠・理髪西村七郎時義・奏者西村
城之助時樹、此日、西俣六郎亦加二首服一、命二俗字喜
十郎一、名代家老森休兵衞友習・理髪渡邊早右衞門兼
重・奏者平山藤左衞門良友、其餘家老・物奉行・用
人班列、
○同日、上妻源左衞門獻二斗搗餅一如レ例、名代家老前
田新五兵衞宗誠、
○同日、魔府流人仙兵衞病二死于平山村一、締方横目與二
吾横目一往檢レ之、
○同日、日高十郎免二其滞債若干一、賞下先レ是久勤二仕於
祖母夫人一而有上レ労也、
○十七日、與二包丁林次右衞門米二斛一、以四嚮有レ故使三
急二役於魔府一也、
○二十日、與二庖丁牧瀬新之助・荒木宗十郎米各二斛一、
賞下嚮役二於本府一之日能勤中其職上也、

○二十五日、以二西村甚五右衛門時哉一為二家老格一使レ侍二吾側一、
○二十七日、二十家・鍛冶獻レ物、如レ件、
○官下令レ減二公族及諸官人之鹵簿一、
○官初所レ使レ與二聞吾家政一者、伊知地壮之丞等條書問二島中方今之事件一、家老知覽才兵衛行修答以レ使下二在島諸司一詳悉検査而後聞上之、原書記二于左一、

○ 六三 問条書

此節竊袈裟殿御承知之趣有之、御幼弱ニ付、我々掛被 仰付家政向承届、此涯軍備致治定候様可取計旨被 仰出、不容易之事候ニ付、
御趣意深奉汲受、速ニ満備之成功無之候而者不相叶儀御座候、右ニ付、御家政古来より之規則者其通之事候得共、古今之宜ニ從ヒ政事茂常変有之、當時所謂化を易て行之處置無之候而不相済、専強兵富國治定之策、精々遂吟味、制度相立候儀當今之急務ニ而候条、追々利害得失可申談候得共、先御領内當分之現実且
御趣意ニ基キ各吟味之形行可承候付、右条々も細々取調、一帳を以て可差出事、
一人心一和者武備之根本ニ而、第一役々處置之公私ニよりて向背有之事候、當分御領内人氣合一いたし候哉否之情実、
一廉恥之風不相行候而者、士氣磨勵之道茂立兼候、當時役々勤向、公私精疎之次第如何候哉、
一文武之本業、教導勧勵之處置、當分制度之次第、
一急変之節、鉄炮要具相備、幾組出役可相調哉、且大砲何挺、打役等都而御定通人数相備哉否之現実、
一窮士引立方當分之仕向、
一急速出陳之節、人馬・粮米・用金其外諸手當向、備組ニ應し、何様之賦候哉、當分之用意、
一蔵米所務何程ニ而、年分出入之総、且領内産物料等茂可有之候ニ付、右等瑣細算當立、
一諸役人明細帳、
一奥向御召仕之男女、
○歳暮規式、如レ例、

（表紙）

慶應元年　種子島家譜　廿五代　久尚　八十一

○　六四　記録所掛平山武肅覚書

初　公室置記録所、以使修世譜、而其書法如　公親所筆者、至是記録所相議、請用臣子之書法、　公許之、然其如編修已畢者則姑置之、慶應元年乙丑以下盡從所改定云、事詳于後冊明治三年六月、

記録所掛平山武肅謹誌

其所改定、此巻是為始、因粗記其由、使後世之観者不惑焉、

武肅又識

○慶應元年乙丑正月元日、公受賀于廣間、

○三日、公拜祖廟詣三寺、

○八日、近侍局減其官員、頃日　太守公・少将公使諸大臣減其冗官、族人北條時有奉命聞諸于公、公欲減之而難於黜其人、乃使年長而在職之久者四人為之、其餘皆免焉而使奉他職、國上只次・羽生半左衛門・下村十郎・上妻七左衛門等在職如故、

○十一日、的始之儀、公親臨焉、射手姓名別記、本源寺祈禱、如例、

○是日、寶慈院君下命、毎正五九之月使近侍代公詣真所八幡、今後年以為例、蓋為公祈運祚也、

○西村甚五右衛門時哉為家老格、而使侍于公側、

○二十七日、廃府流人是枝彦右衛門遇赦而歸、

○是日、賜西村九左衛門仕明高六斗所、賞久為内用方掛而能稱其職也、實寶慈院君之所命也、

○二小君詣三寺、

○二月七日、使下二羽生仙蔵能通一代二西村休八時乗一與中聞田圃丈量之事上、

○二十四日、田圃丈量使鮫島嘉右衛門郷役病死、葬二于慈遠寺御坊一、

○是月、　官下二詢書一告、舊臘　大樹公賜二劍于　太守公一以賞二京師之戦功一云指長門人入京之事也、

○官流二段左衛門者于我島一、以レ崇二一向宗一也、

○真華院夫人凶訃至、夫人者松壽院君之叔母也、

○官下レ命曰、向命使下二寄合以上一入中學于泮宮上、然未レ聞三有二其事一焉、夫如二八歳以上二十歳以下者一則宜三速従二前命一、

○條二録島中庶政之概略一、遣二三役麑府一以呈二諸伊地知壮之丞等一、答二向所レ問也、今摘二要領一以記二于左一、

○　六五　種子島役人連署届書

一人心一和之条

右、人心一和之儀、不容易之儀御座候得共、種子島之儀一圓之場所故一統一和仕、當地之変事且出役等之節、早速差揃罷出候様用意仕居申候、

一廉恥之条

右之風行れ候儀、是亦不容易之事御座候得共、先祖久基以来御上之御制度者勿論、當家法令ヶ條書ニいたし、毎年上巳・重陽両度宛惣家中江為讀聞申候、諸役々之儀も右之舊規を相守、政事行届、風俗振起り候様尽力仕申候、

但条書之儀者別冊相認申候、

一文武之条

右、先年以来學問所・武藝所相立、学問所之儀者掛役々召入置、児輩相集、素讀・手習等為仕申候、尤一ヶ月六度宛式日相定、十五歳以上之者共江經書講義為仕申候、武藝所之儀、取次家引受引勧方仕、春秋両度役々見分を遂申候、藝能之精粗ニ依褒貶仕申候、文武共ニ折角出精仕申候、

一窮士引立之条

右、甲冑并武器永代拝借、且蔵方失脚を以銃炮巻調置、直安申請為仕申候、其外蔵米下直申請為仕、

分而極貧之者江者米銭賑恤仕申候、

一急変之条別冊略之

右、別冊之通手當仕居申候、他所江出役之儀ニ付而者、種子島之儀四方海岸之場所ニ而、折々吴船渡来仕、測量等敷儀いたし候迄ニ而、是迄者変事も無御座候得共、當御時節柄、少人数之場所、其上隣境援兵迚も無御座候故、幾組も差出候而者島元之手配調兼申事御座候間、四組之内一組出役仕可申賦御座候、尚又大炮之儀者弐挺相備、打役等申付居申候、

一急速出陣之条

右、一組出役ニ付而者、粮米・用金等第一之儀御座候故、乍漸囲米弐百石・用金當分五千両相貯居申候、猶更省略仕、年々積金用意仕可申候、

右条々、御調之ヶ条ニ基き形行申上候、遠海端島無調法之我々共、世間之都合も分り兼、時宜不合之儀のミ可有之奉存候、此節難有御掛御承知被成下候付而者、萬事宜敷様御下知被成下度奉存候、

以上、

役人

連名

十二月

○三月十日、以ニ川内熊右衛門（ママ）為ニ用人一兼ニ組頭・横目一、渡邊常右衛門番頭、川内勘十郎高奉行兼ニ郡奉行一、西村員右衛門・牧惣兵衛普請奉行、下村十郎・鶴田直兵衛・羽生助左衛門・種子田健助・知覧才右衛門山奉行、而十郎兼ニ近習一、助左衛門・直兵衛兼ニ政府書記一如レ故、普請奉行岩川嘉兵衛有レ故免ニ其本職一専参ニ改革方一、

○是日、流人本田玄龍・傳左衛門・惣之丞等遇レ赦歸ニ于麑府一、

○十七日、赦ニ太兵衛一公儀流人、先レ是有レ罪囚ニ之獄一、以ニ三年一為レ限、至レ是歳月未レ満、然住吉村吏等為レ之請レ賜ニ恩赦一焉、故有ニ此命一、

○是日、羽生彌助為ニ代々郷士一、賞下為ニ公之小奴一多年能稱中其職上也、

○二十四日、責二向上妻曽兵衛一、以下向製二硝石一之日為二其下吏一而有中不正事上也、

○二十六日、鎌田典膳女於豊殿至レ自二本藩一、實松壽院君之外孫、此行来二省其祖母一也、

○是月、　官下レ令正二家統受授之制一、原書記二于左一、

○　六六　島津久徴申渡書

是迄親存生中嫡子病死、「其カ」壹身者及老年、嫡孫幼少ニ而成長程久敷、家内介抱難調者者、願之通三男より嫡子成ニ而、右嫡孫者其者之嫡子ニ被仰付、又者家督之者死去、嫡子幼稚有之、家内介抱同断之者者、弟江継目被仰付候も有之、右全躰家内介抱不相叶老筋を以、別段御仁慈之御取扱被仰付来候得共、乍一往嫡子之者差置、庶子又者弟江家督被仰付候儀、嫡庶之名字相紊、人倫之大義ニ戻り、別而不輕事候付、以来右躰之儀、願書候而も屹与願通ニ者不被仰付候条、此旨向ゝ江可申渡候、

三月　（島津久徴）左衛門

○四月二日、以レ奉二安栖林公神主于別廟一也設二場于慈遠寺一、使下二東西市人一演劇上焉、謂二之遷坐一、公與二二小君・女公子等一親臨観レ之数日、

○六日、藩士末川某告レ授二銃術于西村七郎時義一、

○十五日、饗二田圃丈量使於慈遠寺一、使下二西市人一演劇以供上レ観焉、二小君亦親臨観レ之三日、

○十六日、赦二太吉一公儀流人、先レ是有レ罪将三終生囚二之獄一也、然以三今般奠二安栖林公神主于別廟一也有二此命一、

○締方横目平川助七・種子島治左衛門及田圃丈量使有川・川上等以下各歸二本府一、

○二十七日、令下二前田六郎右衛門宗成・平山寛蔵武肅一各待中罪于私第上、以レ有レ所二觸犯一也、蓋出二二小君所レ命云、凡錮レ之五十日、後政府請レ赦レ之、時二小君威怒亦稍霽、事乃得レ解、

○先レ是赦令屢行、於レ是獄無二繋因一、君臣相賀、

○是月、田圃丈量之事畢、所司奏二其欲出一、記二于左一、

○ 六七　村々高増減書上

東之手

一高三拾三石六升壱合四勺七才　　莖永村

但此節新仕明高差引残

一高六石壱斗四升三合七勺五才　　上里村

但書同断　　萬引入

一高三拾九石六斗弐升五合九勺四才　　平山村

但書同断　　萬引入

一高弐拾四石壱斗七升四合壱勺七才　　納官村

但書同断　　萬引入

一高三拾弐石五斗壱升四合三勺七才　　増田村

但書同断　　萬引入

一高七升八合三才　　古田村

但書同断　　萬引入

一高三石九升八合九勺六才　　安城村

但書同断　　萬引入

一高拾壱石四斗八升三合七勺四才　　現和村

但書同断　　萬引入

一高六石五斗五升八合三勺四才　　安納村

但書同断　　萬引入

一高拾四石七斗五升八合三勺三才　　國上村

但書同断　　萬引入

拾ヶ村

合高百七拾壱石四斗八升九合九勺萬引入

但此節新荒起高并新仕明高増高相成候分

引残減高

西之手

一高拾壱石三斗九升四合七勺八才　　下中方限

但此節新仕明迄差引残引入分　　引入

一高四拾三石四斗壱升壱合四勺六才　　上中方限

但書同断　　引入

一高四石六斗弐合九勺　　西之村

但書同断　　引入

一高五石八斗三升六合四勺六才　　島間村

但書同断　　引入

一高三拾壱石五斗壱升五合六勺三才　　坂井村

但書同断　　引入
一高五石三斗五升弐合九才　　油久村
但新古高差引増　　増
一高壱石四斗弐升弐合九勺壱才　　野間村
但此節新古高迄差引残引入分　　引入
一高弐石三斗五升　　住吉村
但書同断　　引入
一高壱石五斗四升七合九勺弐才　西之表上西方限
但新古高迄差引増　　増
一高壱石五斗八升三合四勺弐才　　中西方限
但書同断　　増
一高九石壱斗三升五合四勺弐才　　下西方限
但書同断　　増
拾壱ヶ村
合高八拾弐石九斗壱升四合五勺七才　　引入
但此節新仕明并直位増増高相成候分引残減高
両手
合高弐百五拾四石四斗四合四勺七才

右、此節御直竿ニ付、萬引入如此ニ候、

○官許レ鬻ニ琉球諸島所レ産之珍怪諸物一（先是禁、之云）

○官使下ニ伊地知正治・坂本廉四郎等一与中聞我家政及軍事上、原書記ニ于左一、

○　六八　桂久武申渡書

伊地知正治
坂本廉四郎
奈良原幸五郎（繁）
市来六左衛門（政清）
椎原与右衛門（国幹）

右者、御一門方四家・一所持之面々江被仰渡趣有之候處、種子島霜袈裟幼弱之事候間掛被仰付候付、御趣意ニ基き家政承届、領内仕置之利害を相察、此涯軍備治定いたし候様被仰付候条可申渡候、

四月　右衛門（桂久武）

○五月朔日、以二時任丈之進一為二番頭一、
○五日、賀儀、如レ例、
○十日、　官告改元慶應、
○十一日、賜二天神丸船長大木嘉太郎及其水夫等米六斗一、先レ是使下二嘉太郎一迎中田圃丈量使上也、會二洋中風不順一、然能操レ船速往来、故有二此賜一焉、
○是日、鎌田氏之室於雄君権二我島中之海苔一、於雄君者即我女公子也、凡女公子之嫁二他門一者、我乃賜二之粧資一年有二定額一、至レ是君以二近時物價高騰冗費許多不レ能二自償一也、請権二海苔一以補レ之、於レ是其臣秋末半次郎者来監二其出納一、
○十二日、寶慈院君與二鎌田氏一共遊二馬毛嶼一、留連十一日而歸、
○十七日至二十八日一、閲二武技于廣間之庭一、事畢賜三錢各若干及褒翰于師家與二其門人一、
○二十四日、以二梶原伊左衞門一為二納殿役人一奉二仕于寶慈院君一、
○閏五月六日、　官下二詢書一曰、初昌平日久、風俗寖頽、特如二豪族貴門一則成三長於二深宮婦女之手一、與二一二私睦一宴安消レ日、古今之治亂・人情・國體盲焉置レ諸不レ問、是以雖三他日當二要路一、然不レ能レ決二大事一也、不レ能レ勝二大難一也、尸素之責不レ能レ免焉、可レ謂レ背二其職位一也、今後宜下結二交士林一讀レ書講レ武以成二我德器一即施中之事業上也、
○十五日、桑山直次郎有レ罪納二贖鍰五十緡一、
○是日、賜二軽卒榎本善右ヱ門金一方一、賞下多年直二于吏府一使役有レ労且稱中其職上也、
○十九日、庄司浦水夫次郎助・新助有レ罪納二贖鍰各五十緡一、
○二十六日、嚮松壽院君不豫、至レ是未レ差、群下患レ之、因使下二用人平山藤左ヱ門良友・醫池野意仙一報中病状于麑府上、
○是月、　官以二吾公尚幼一故、使下二我諸有司一更勤中于政務上、原書記二于左一、

○ 六九　小松清廉申渡書

當世態、文武引立之儀専要ニ而、舊弊致一新候様、私領之儀者役人初精徴ニ吟味行届、折角公平至當之所置を被付萬端行届候様との趣者、先達而被仰渡候通ニ候、種子島霜袈裟幼弱之事故、第一重役相勤候面々下情不通ニ而者不相済候付、以来廣得衆議、役場進退旁之儀深致吟味、被掛置候御役々江申出候上取計候様、左候而、家政向不依何色存寄有之者、領内役場江相付、親切尽評議、不致一決儀者熟談之上、掛御役々江被得裁断候様被仰付候条可申渡候、

閏五月　（小松清廉）帯刀

○責ニ呵組頭高崎吉十郎能哲一、初栖林公別廟成、二小君乃将丁使丙ニ西東市人一演劇以慰乙安神威甲也、所謂遷坐是也、於レ是諸郷諸生皆謂、不レ宜レ用ニ淫樂於先公廟一、遂歴ニ擧其不可者數条一以諫、能哲亦與焉、而言不レ聽、且曰、是實能哲激而成レ之、大背ニ其職一、故有ニ此命一、

○官問ニ我武庫所レ蔵大銃之員一、即録而上、凡大銃六門、一門具ニ弾藥各五十発一云、

○六月七日、公親詣ニ本源寺一、使下ニ三寺僧一誦レ経禱中松壽院君病上、三役班列焉、亦使下ニ射師種子島郷兵衛・羽生助左ヱ門一以ニ射法一被上レ之、

○二十一日、　官醫三名至レ自ニ本藩一、嚮告ニ松壽院君之病状于　官一、且請下使中ニ朝稲宗益者一治上レ之、至レ是宗益與ニ白男川隆菴・柳田意哉等一俱来、意哉者勝姫君之侍醫、姫君使三レ之省ニ松壽院君之病一云、隆菴者則松壽院君之侍醫也、此行麗邸贐ニ金十圓于宗益、二圓二方于隆菴一以為ニ裝資一、

○二十三日、贐ニ金三方・塩蛸五升・縮木綿一領于寢占彦助一、以送ニ其歸レ郷、彦助嚮助ニ田圃丈量之事一、故及レ之、

○二十五日、以ニ種子嶋才七郎時習一為ニ側用人一、

○二十六日、　官所レ使三與ニ聞我家政一者伊地知・坂元等命曰、如ニ家老・物奉行・用人・側用人・近習・納殿・小姓等之職一、則其陟黜罷免告而行レ之、

○是月、　官賜下向所二文出一之田若干上、原書記二于左一、

○　七〇　島津久徴申渡書

一高四拾石弐斗弐升壱合八勺七才

右新仕明出来高

一高六斗三升五合四勺弐才

右荒起出来高

種子島鶴袈裟

右者、此節私領江惣直竿被召入候處、出来高右之通有之、然處、享保之度大支配之砌、現地引入高有之、御蔵入高を以足高被下置候、其後惣直竿之砌、新出来高有之、右足高差引被仰付筈候處、其節迄者差引之沙汰ニ不及、以後御検地等ニて出来高有之候砌差引被仰付筈候ニ付、此節出来高之儀者、都而御蔵入可被仰付事候處、此節直竿ニ付而も、高弐百九拾四石餘引入、種子島之儀遠海端島ニ而風波之憂も不少、先年より之改革詮立兼、當時蔵方難渋ニ而軍役方手當向存分難行届候ニ付、度々申出趣有之、右通、先年御蔵入高を以、足高迄も被下置候上、別而不容易之儀候得共、御續柄旁別段之思召を以、此節限無代銀申請被仰付候条可申渡候、

但以後之例ニ者屹与不相成候、

六月　（島津久徴）左衛門

○女公子於初君至レ自二本藩一、族人北條時有従焉、

○官放二清藤宇八・勘右衛門・五郎右衛門・小次郎・金右衛門于我島一、以レ有レ罪也、

○七月二日、錮二下中之村地方検者牧平次于妙昌寺、横目遠藤勘左衛門・有留金次郎・遠藤仁左衛門・遠藤仁助、作見舞上妻仲兵衛・上妻圓右衛門・遠藤勝次郎・有留十郎・羽生勘次于某々寺一各三七日、向村人謀以二早稲不レ登請レ賜二之検見一、所司往検レ之則稲未レ及レ熟、其豊歉不レ可二豫卜一也、蓋村人之意在下於誣レ上以欲上レ減二租額一耳、而平次等實與焉、故及レ之、功才太吉亦納レ炭贖レ罪、

○八日、以西村七郎時義・平山佐次右ヱ門友直為物奉行、上妻直蔵定理・平山藤左ヱ門良友為物奉行見習、四人者二小君與北條織衛之所識抜云、種子島平左ヱ門時（ママ）・西村佐太夫時若用人兼組頭・横目、美座七郎右ヱ門時資復其用人、亦兼組頭・横目、

○是日、賜近習國上只次銀五枚、其在職中年以為例、只次少奉仕于二世、自扈従累選近習、労勤有年于茲、故有此賜焉、實二小君與時有議而所命云、

○九日、以美坐次右ヱ門為船奉行兼町奉行、長野平左ヱ門兵具奉行、種子平左ヱ門談合役、

○十日、賜白田數頃于杉崎藤太郎、仕明高六斗所于岩坪平蔵、平蔵者賞嘗為小君之小奴多年能稱其職、藤太郎者以新命為降福權現之祠司也、

○十三日、用人上妻九郎左ヱ門宗富謝病解職、

○十六日、魔人竹下仲兵衛・山師林右ヱ門代小田市之助来採柞灰、

○十八日、物奉行西村休八時乗死、

○十九日、以西村蔵多時措為家老兼改革方掛、賜俸田十五石所焉、實北條時有與二小君議而所命云、

○二十三日、以西村權太夫・美坐矢太右ヱ門為山奉行、美坐季次郎兵具奉行、

○是月、官醫三名皆歸于魔府、頃日朝稲氏等稱松壽院君病稍差、以屢請賜歸、於是乎遂歸（或云、朝稲氏等治療失方、遂托於病癒而歸、）公及二小君其餘三役各有所賜、以致謝焉、

○責呵島間村之植木見舞河東十太郎・鮫島直助・岩坪金兵衛・鮫島藤右ヱ門、増田村之里正遠藤藤右ヱ門、横目遠藤矢之助・日高藤次郎・馬場勘助也、十太郎等坐其不職也、藤右衛門等坐村民小吉・猪之助等不請而演劇也、猪之助等亦各納贖鍰三十緡、

○初我邑税納所鬻産物價錢于坂之薩邸以償之以為常矣、頃日官禁之以使納米于藩之府庫焉、

蓋以近時米價騰貴納錢之不利於官也、於是陳我島海路不便於漕運以請納錢償之依舊官亦允之、

○使西村城之助時樹就軍賦役伊地知正治行軍之法質其所疑焉、

○八月朔、古市杢之進初謁、

○四日早曉、大蒐于城之濱、

○七日、以僧善行院為大會寺住職、

○是日、賜物奉行西村七郎時義・平山佐次右衛門友直俸田各十石所、

○以近時物價高騰旅資不給故也、三役・諸司之臨有事而急役于麑邸者各增其日俸（春秋更番者不與焉）、賜錢五百文于家老、自家老以至鄉士一等各減四十八文、

○十七日、家老前田新五兵衛宗誠致仕、

○是日、北條時有獵馬毛嶼、西村七郎時義・鮫島圓迪從之、

○十九日、至是松壽院君病大漸、三役直于濱亭、遣快船迎北條時有於馬毛嶼、未至、君召三役永訣、謂曰、妾久在病、使卿等勞於保護、然終至於此者天也、妾復何恨、惟悲幼君與寶慈院殿之末路不能目見之也、他日卿等能輔之以忠於上仁於下、而使先業無墜則妾永瞑于地下、卿等願記此言、言畢泫然、群臣悲泣無能答焉、其夕時有至、君、氣息欷然、強託亦以後事、

○二十日、松壽院君卒、君才識明敏、處事善斷、使人以器、其宏量偉度雖男子有或不如者焉、不幸屢遇我公室之無長君也、於是與聞外政數十年、乃以為民興利為己任、築波戸起鹵田、其事業之尤大者也、而性亦仁慈、故雖賞或僭刑未嘗濫、而賑窮周乏亦其所急也、凡此數者則君之美德哉、

○二十一日、上法諱松壽院殿妙悟日全大姉、於是諸司謀葬事、以平山寛蔵武肅・知覧覺之丞行義並為中陰奉行、緒方仙左衛門・日高直五郎靈膳奉行、

西村員右衞門・上妻新太夫細工奉行、

○二十三日、群臣以二生時微行之儀一、奉二靈柩一自二濱亭一歸二于本第一、取二路于本源寺一而自二本第之本門一入、公素服迎二之阼階一、即奠二于奥書院一、公及寶慈院君以下各以レ次奠香、家老西村時措請レ使二君生時之屬官及侍女・僕從等一亦各臨哭盡レ哀、許レ之、禮畢靈柩出レ自二廣間之後廊一、至二本源寺一奉二安于靈位之後一、三寺諸僧及中陰奉行以下迎拜、各有二著位一焉、於レ是三役代二公及小君・女公子一奠香、遂殯二于御牌塔一、

○是日、以二西村彌七郎等二十一人一為二行歷奉行一、東嘉助等三人為二葬場奉行一、

○二十六日、賜二銃一口・馬一疋于北條時有一餞二其歸一于本藩一也、寶慈院君亦別有レ所レ贐、

○二十八日、太守公・少將公使下二醫某一省中松壽院君之病上、聞二君已卒一而途還、

○二十九日、物奉行見習平山藤左衞門良友・上妻直藏定理請レ解二所レ兼組頭職一、許レ之、

○是月、遣二國老喜入摂津鳥銃一口・塩蛸一斗・海苔五十斤一、向　官之丈二量我田圃一也、松壽院君謀二之國老一、陰使レ助レ我也、以レ故無下事各不レ得二其宜一者上、租額比レ舊頗減、則國老之力也、至レ是使レ使謝レ之、附以二此數品一、

○賜二族人北條時有金千圓一且賜レ書曰、昔者我先君之使下二卿之始祖一別樹上レ家也、頒二與禄田若干一而家世列二於寄合一、聞近時家道艱難、殆至レ不レ能下守二先業一而上奉中公事上、吾甚憫レ之、且也曩以四吾之幼弱未三レ堪二統禦一也、使レ卿與二聞吾邑政一惣二裁吾軍務一數二年於此一、使下レ吾無レ患二於上一而物得上二其所於下一也、嗚呼卿之於二吾家一可レ謂二勤且勞一矣、吾不二敢忘レ德、不腆金幣薄以致レ謝、其買二禄田一復二先業一以永輔二相吾家一也、

○九月朔日、以二美坐源助時貞一爲二物奉行見習一、緒方善藏用人其職船奉行、國上只次側用人、牧藤十郎・河東專之進並山奉行、專之進兼二近習一、藤十郎家格列二于小頭一、

○三日、締方横目種子島壯之丞・大重仲之助来、

○九日、停レ讀二法令書一、以二松壽院君之喪未レ除也、
○十四日、葬二松壽院殿妙悟日全大姉一、早暁公與二實慈院君・女公子一詣二本源寺一、各以レ次奠香、自二族人種子島壮之丞一以至二三役・諸司・侍女等一亦然矣、及二柩将レ発公親奉二木主一而歩從、既而家老西村甚五右衛門時哉代レ之、於レ是公先二靈柩一至二御坊一迎レ之、蓋爲二舊典一也、乃行二葬儀于御坊一、正建寺日晧為二引導僧一、大會寺日讓歎徳僧、禮畢乃蔵二遺髪于御牌塔一、
○十五日、流人休助病死、聞二之于　官一、
○十七日、下村十郎・上妻七左衛門為二代々小頭一、
○二十三日、僧本信院病死、先レ是有レ故作二牢于室一而繫レ之者也、
○二十六日、日高菊之助為二代々郷士一、賞下嘗僕二仕于松壽院君一而能稱中其職上也、
○是月、　官使下二吾有司一檢二我禄田及丁夫之員一聞上レ之、原書記二于左一、

○　七一　種子島郡見廻届書

高頭壱萬六拾五石八升弐合六勺六才
但田高七千六百五拾四石七斗九升三合三勺七才
畠高八百八拾五石四斗壱升四合九勺
損地千五百弐拾四石八斗七升四合三勺九才
一高八拾四石八斗六升壱合四才　家中屋敷高
一高四石壱斗壱升八合九勺四才　寺社屋敷高
一高八石三斗壱升弐合五勺　庄屋屋敷高
一高八石八升三合九勺九才　濱人屋敷高
一高弐百拾九石三斗四升壱合七勺四才　水主屋敷高
家中屋敷餘地高
右壱行名目之株、當島江者無御座候、
一高五千七百六拾弐石四斗五升七合八勺　蔵入高
一高三千六百九拾弐石九斗四升六合四勺弐才　家中高
内
弐千百六拾七石八斗五合四勺　門付高
千五拾六石四斗七升弐合四勺壱才　自作高
四百六拾八石六斗六升八合四勺三才　仕明抱地
一高弐百八拾四石九斗三升弐勺三才　寺社家

外ニ
高千五百三拾九石弐斗九合七勺九才　諸郷散高
一現用夫五百三拾五人
外ニ
用夫五百三拾三人
小觸・名主・諸役分・定病・片輪者等ヲ除、
一村数拾八ヶ村
内
一西之表村
用夫弐拾弐人
高頭八百九拾八石六斗八升八合三勺三才
一國上村
用夫五人
高頭三百六石壱斗七升弐合六勺
一安納村
用夫拾六人
高頭百拾五石四斗壱升壱合壱勺五才
一現和村
用夫弐拾九人
高頭五百七拾四石五斗弐升八勺三才
一安城村

用夫五人
高頭弐百弐拾六石九斗四升四合七勺九才
一古田村
用夫
但現用夫無御座候、
高頭六拾七石九斗六升弐合四勺九才
一住吉村
用夫弐人
高頭弐百拾八石五斗四升壱合三勺五才
一納官村
用夫六人
高頭弐百九拾八石六斗壱升七合三勺九才
一増田村
用夫四拾人
高頭五百拾四石九斗五升弐合九勺壱才
一野間村
用夫拾七人
高頭八百五拾四石壱斗八合弐勺弐才

一油久村
用夫弐拾三人
高頭四百四拾七石七斗弐升三合壱勺弐才
一坂井村
用夫弐拾三人
高頭七百弐拾弐石三斗弐合五勺
一平山村
用夫八拾四人
高頭九百弐拾弐石五斗六升六合四勺六才
一莖永村
用夫百九人
高頭千四百三拾壱石三斗八升三合五勺五才
内百八拾九石六斗五合八勺四才　上里村
一中之村
用夫六拾六人
高頭千四百六石九斗五升五合八勺弐才
一西之村
用夫三拾八人
高頭五百三拾七石六升弐合六才
一島間村
用夫四拾壱人
高頭四百九拾壱石壱斗六升八合五勺五才
右之通取調申出候様被仰渡候付、相調申候處、如斯御座候、以上、
丑九月　種子島郡見廻
御郡方

○十月朔、以近時物價沸騰貧士窮民殆不能營活故也、工匠傭銀及諸物價各定其額以禁圖一己之利、
○二日、分遣高奉行検島中之間田定其租額、
○五日、命平山藤助監植杉木且製木綿、賜俸米年一石八斗、先是浪華人安田某者自言、能以木皮製綿毳、吾島亦将施其法焉、故有此命、
○九日、修松壽院君四十九日祭儀于本源寺、向凶訃

之聞二于麑府一也、　太守公・少将公・暐姫君・寧姫君各賜二弔使及香銀一、至二宮女某々一亦贈レ賻各有レ差、

○十五日、頒二松壽院君遺命於諸司一以奬二勵之一、其言即所三臨レ終告二三役一者也、故今不レ録、

○十八日、遣二家老某一奉二安松壽院君之木主于松濤庵一、用二其遺命一也、

○二十四日、公巡二視島中一且觀二驅馬于牧一、所レ謂馬追是也、

○十一月七日、以下獵狗間有中嚙二牧之生駒一者上也、分二遣馬役于島中一、縶二衆人所レ飼之狗一、聚而殲レ之食二其肉一収二其皮一、於レ是乎島中殆無レ狗、

○是日、公至レ自三巡二視島中一、

○本藩之見聞役堀嘉右衛門来監レ鑄レ銃也、

○十二日、厨船発レ港更代船、洋中遇レ颶、幸至二屋久島一而免、是秋諸司之役二于麑邸一者艤以待レ風、九月至二十一月一未レ得二便風一、衆皆憂二瓜代愆レ期、此日天色昏黑、然風頗順、命使レ解レ纜、舟人不レ肯強レ之、時副船甚小、船長某堅執不レ可、於レ是其所レ乗者皆徙萃二大船一、乃犯二風濤一而発、距二馬毛嶼一五里許、風雨益急、舟幾覆者數矣、乃収レ帆縛レ柁、出没掀舞三晝夜、十四日黎明至二屋久洋一、去レ島里許、潮勢逆行舟不レ進、乃碇二于大洋中一、既而嶋人使下二快舸二隻一来救上、而相慰曰、吾曹亦先公之遺民也、今日之事豈不二努力一、諸君其少安、乃施二縄於本舟一而挽レ之、舟行如レ箭、轉瞬間入二安房河一而泊、衆皆相賀、其年十二月発二屋久島一亦遇二風不順一而歸二種子島一、明年二月得三始抵二麑府一、

○十五日、以二西村甚五右衛門時哉一為二家老一、賜二俸田十五石所一、

○是日、長野平左衛門・高崎吉十郎並爲二船奉行一、岩河彦左衛門納戸奉行、羽生助左衛門普請奉行、岩河勇八郎兵具奉行、

○羽生平次初謁、

○賜二時任丈左衛門時喜米一斛一、以四有レ故使三屡役二于麑邸一也、

○二十四日、名越只次爲二代々郷士一、以下嘗僕二仕于松

壽院君一而能稱中其職上也、

○二十八日、命二川内矢一郎一其家格列レ于二小頭一、初矢一郎之先爲二役人組一、其祖某以三家産困乏一、致二其家格一而為二筆吏一、既而一家死亡、無レ主數十年、及三矢一郎襲二家統一、問三家格列二於何等一也、而凡致二其家格一者降二一等一為レ法、故有二此命一、

○官使下二我有司一檢中戸口及禄田・村里・寺院等之員上、聞レ之、原書記二于左一、

○ 七二 種子島郡見廻届書

一家中惣人数四千弐百五拾壱人
但 女并下人・下女相除、
一家中人躰九百九拾壱人
一所高壱萬六拾七石六斗五升六合六勺弐才
内 弐石五斗七升三合九勺六才
右種子島本源寺・慈遠寺弐ヶ寺御免地無役高、
一家中高三千四百八拾壱石弐斗三升六合三勺九才
但 他郷家中高無御座候、
一寺社領高四百三拾五石三斗四升弐合六勺九才
一拾八ヶ村
西之表村　國上村　安納村　現和村　古田村
住吉村　納官村　増田村　野間村　油久村
坂井村　平山村　上里村　莖永村　中之村
西之村　島間村
一現用夫五百三拾五人
一浦用夫百四拾五人
一鹿児島より種子島海路三拾九里
但 種子島より佐多御崎迄拾八里、佐多御崎より山川迄八里、山川より鹿児島迄拾三里、
一寺数弐拾七ヶ寺
一家中足輕人数八百三拾人
一家中足輕高三百八拾弐石八斗九升六合八勺
右者、從　御上嘉永五子ノ年以来去子之年中限、相違之處相糺、當十一月中差出候様被仰渡如斯御座候、以上、
丑十一月　郡見廻　河内勘十郎

遠藤健太郎
美座平兵衛

○十二月二日・三日、修慈詮公十三回忌于本源寺、實為明年正月、有レ故今修レ之、

○四日、稲木覺兵衛献鉛百五十斤、曰レ酬舊恩萬分之一、

○是日、大泊浦人以近時物價沸騰故、請今後舟人告急于種子島者增其傭錢、乃人與十三貫文爲定額、

○八日、平山一右衛門為普請奉行、

○十六日、賜錢三十緡于榎本甚兵衛、二十緡于榎本弥平、各十緡于宇多津嘉七・池野意仙、賞向松壽院君卒之日借其宅而辨庶務、而家人亦助レ之周旋頗有レ勞也、

○二十一日、納錢二百貫文正建寺、永供松壽院君之祭資、

○二十八日、以魔商土師喜左衛門爲逆旅主人、

○是月、官賜我島牛馬皮價金三分二、先レ是官榷牛馬皮、我以府庫空之之故、屢請自鬻レ之、其言懇到、然官遂難レ於許レ之、至レ是賜其價金三分二而榷レ之尚如レ故、

○納松壽院君私錢九十貫文于本源寺資其冥資、

○大守公自減其鹵簿、使諸大臣亦倣レ之且降其礼服、於レ是雖公族・家老登営之時、亦不レ過外套而着袴耳、

○頒賜松壽院君遺物于三役及諸司、至醫師・近侍等所レ賜各有レ差、

○官命禄田五百石出兵一人、以習陣法且備緩急、謂之番兵、

○二十九日、公親詣持佛堂、

○歳暮賀儀、如レ例、